妖怪さんと俺ちっち

野生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
妖怪さんと俺ちっち

【Ｎコード】
Ｎ２７４４Ｘ

【作者名】
野生

【あらすじ】
妖怪専門の相談所を明朝夕夜と、彼を訪ねる妖怪たちのほっこり笑って、ちょびっと怖い物語

第一話　雪女の夏（1）

第一話　雪女の夏

事務机と来客用のソファー、そしてファイルが詰まった本棚。どこにでもあるその事務所の中は、真夏だというのに肌寒い冷気に包まれていた。

ぐぁんぐぁん、とあきらかに買い替え期を過ぎた年代物のクーラーが、設定限界まで引き下げられた冷気を苦しげに吐き出す。ついさっきまで、灼熱の熱気を怠慢なほどに素通りさせていた窓には、あまりの温度差に白く曇ってしまっている。

異常な空間。しかし、事務所に備え付けられたキッチンから現れた男は、さらに異様なモノを、ソファーに座る女性へと差し出した。

カチャンと、涼しげな音を鳴らし、表面に水滴を付けた透明な硝子の容器が机に置かれる。その器には、まさに処女雪を思わせる純白の氷の粉が山盛りに乗せられていた。

「シロップはどっちにする？　赤？　緑？　それとも黄色か？」

言いながらに、男はカキ氷と共に持ってきた、苺、メロン、そして檸檬のシロップを机に置く。眼の前に用意されたカキ氷とシロップに、この寒い事務所の中でも額から汗を流す女性は、探るような眼差しを男へ向けた。

今日のお客であるその女性は、町を歩けば、すれ違う男十人が十人とも振り向くような美女だった。差し出されたカキ氷にも負けないくらいの透明感のある白い肌。細く整った秀眉、すこしキツイ印象を受ける艶やかな双眸、すっと伸びた鼻筋。そこだけが色彩を持ったかのような、桜色の唇。見た目の年齢は二十代中ほどといった感じだが、後頭部で髪を結わえ、すっと背筋を伸ばした白地に淡い燈色の鬼灯が描かれた着物姿は、老舗旅館の女将のような気品を帯びている。

麗しい桜色の唇が、まるで舞い散る桜弁のように流麗に動いた。

「いきなり押しかけて、すみま……」
「とっ、そうだそうだ。忘れてた」
女性の耳朶をくすぐるような美声を男は無作法にも遮り、唐突に胸のポケットへと手を忍ばせた。困惑する女性に、彼は僅かに口端を上げながら、手を引き抜く。
指先に摘んだ一枚のカード、名刺を女性に差し出しながら、自分の名前を口にした。
「俺っちの名前は、明朝夕夜（みょうちょう・ゆうや）。呼ぶ時は、夕夜でいい」
「……なんだか、朝だか夜だか紛らわしい名前ですね」
「よく言われるよ。それで、本日は当相談所にどういった御用件でしょうか？　雪女さん」
最後の言葉に、女性は驚きと微かな理解を込めて夕夜を見る。
「お気づきでしたか」
「じゃなきゃ、こんなお出迎えはしないさ」
「ふふふ。噂に聞いた以上に、面白い方の様ですね」
「噂って、どんな噂だよ」
冷笑とも微笑とも思える笑みを浮かべる雪女に、夕夜はトレードマークの八重歯を覗かせながら苦笑いを浮かべた。彼女の顔色を見る限り、あんまり面白そうな噂には思えない。
さすがに寒くなってきた腕を擦りながら、夕夜は自らも対面のソファーに腰を下ろした。
「それで、今日はどのような御用件で」
夕夜が雪女に微笑む。夕夜の見た目は二十歳前後といったところだが、その微笑みにはどこか老成されていた。夕夜は両手の指を組み、上半身を微かに前方へ傾ける。
「はい、実は……」
小さく頷く雪女。冷え切った室内に、夕夜の耳から下がる鈴のピアスが、りん、と綺麗な音を立て、雪女の言葉を誘った。
「探していただきたいものがあります」
「探しもの？」

聞き返す夕夜に、雪女はその細い顎を引き首肯する。絹のように滑らかで繊細な水色の髪が彼女の動作に合わせて僅かに揺れた。
「それは何ですか？」
「？雪の涙？です」
「雪の、涙……」
雪女の言葉を口の中で小さく繰り返しながら、夕夜は指を解いて今度は腕を組み、身体を深くソファーに沈めた。数百年の記憶の時を遡り、依頼の品の名を探る。
「ん～、聞いたことがあるような……無いような？」
曖昧な記憶に夕夜は思い出すことを放棄した。
「なんか、日本酒にありそうな名前だな」
「飲んだら未来永劫氷漬けになりますよ」
茶化す夕夜に、雪女は口元を袖で隠し優雅に笑う。軽くあしらわれたことに夕夜は複雑な顔をして頬を掻くと、そんな自分を取り繕うように口早に唇を動かした。
「いくつか質問をしていいか？」
「どうぞ」
「それは眼に見えるのか？」
「はい」
「それは形あるものか？」
「それは、『眼に見える』では答えになりませんか？」
訊き返す雪女に、夕夜は不敵な笑みを湛えて答える。
「水や焔、雪なんかも眼には見えるが形はないだろ」
「ふふ、そうでしたね」
「で、どうなんだ。形はあるのか」
「はい。？雪の涙？は形あるものです」
「特徴は？」
「それはお答えできません」
夕夜の質問に、雪女は微笑みを崩すことなく即答した。夕夜は一度質問を止め、雪女の微笑を凝視する。その氷彫刻家の匠が生涯を

駆けて作りだしたかのような微笑は、あらゆる質問を跳ね返す絶対零度の障壁となって、夕夜の眼の前に佇んでいた。
夕夜の口元から短い笑いが零れる。答えの与えられなかった質問に、夕夜は楽しそうに顔を綻ばせていた。
「じゃあ、別の質問を。ああ、それと。これからも答えたくなかったら答えなくてもいいぞ」
「ありがとうございます」
夕夜の言葉に、雪女は絶対零度の障壁を作り出す微笑みを僅かに崩し、ホッとしたように頭を下げる。その動作ひとつひとつが、まさに男を魅了する動きだ。僅かな表情の変化が、絶妙に男の心をくすぐる。相対しているのは夕夜でなければ、依頼など投げ出して彼女との対話を楽しもうとするだろう。
質問を待つ雪女に、夕夜はしばし逡巡し口を開いた。
「?雪の涙?がある場所の見当は?」
「私の住む山のどこかに」
「今もそこにあるのか?」
「お答えできません。……ですが、夕夜さんがいらっしゃっていただければ、必ず姿を現してくれるでしょう」
「姿を現すってことは……、生き物なのか?」
「お答えできません」
「ふーん……そっか」
質問を一度止め、夕夜は背中をソファーに預けたまま逸らし、事務所の天井を仰いだ。プロペラがゆっくりと回転し、部屋の中の空気を混ぜ合せている。ふんふん、と夕夜は何かを考えるように鼻を鳴らすと、逸らしていた上半身を唐突に引き戻し、グイッと雪女に顔面を近づけた。
「ひぅっ」
唐突に間近に迫った夕夜の顔に、存外可愛らしい声を上げた雪女が思わず鼻白む。雪女の水晶のように透明な瞳と、夕夜のどこまでも奥深い黒眸が至近距離で混ざり合う。

「あ、あの。どうなされました」
身の危険を感じたのか、雪女が焦り交じりに夕夜に声を掛ける。
その言葉に、息が掛かるほど至近距離で雪女を観察した夕夜は、ニッと口端を吊り上げて笑った。
「あんた」
「はい……」
「抱き枕にしたら気持ちよさそうだな」
「えぇっ？」
本気とも冗談とも取れる言葉に、雪女の顔が眼に見えて動揺する。
その姿に夕夜は楽しげに哄笑すると、これまた唐突に身体を引き、再びソファーへと自身の身体を預けた。
「冗談だよ。気にするな」
「本当に冗談ですよね」
先ほどまでの微笑を消し、雪女が鋭い氷柱のような厳しい視線で夕夜に問いかける。
夕夜は漂々とした笑みを浮かべながら両手を上げて「本当に冗談だって」と弁解すると、二本指を立てた手を雪女の前に突き出した。
ぎょっとする雪女に、夕夜の唇が滑る。
「じゃあ、最後にあと二つほど質問してもいいか」
「……どうぞ」
すこし憮然とする雪女に、夕夜は可笑しそうに笑いながら指をひとつ折る。
「なんで、その依頼を俺っちに？」
笑みを作りながらも真剣な眼差しで問う夕夜に、雪女は一瞬気負いされたように身を引くと、一転して決意を固めて答えた。
「私の願いを叶えるために」
艶やかでありながら凛としたその言葉は、温度を下げ続ける事務所の中に、驚くほど静かに、そして激しく響き渡った。
雪女の答えに、夕夜が満足したように笑い、大きく手を打ち鳴らす。

「おっしゃ。分かった。その依頼、引き受けよう」
夕夜の言葉を受け、雪女は安心したように顔を綻ばせた。
「そうと決れば早速出発だな。ええっと、まずは列車の切符を手配して、それから宿だ。宿は同じ部屋でもいいな。金は出来るだけ節約させてくれ。ああ、それとソレ食っちゃってくれよ。せっかく作ったんだからな」
まくし立てるように言い、夕夜は携帯でどこかに電話をかけ始めながら、机の上で未だに高々と聳え立つカキ氷を指さす。
その、あまりの成り行きの速さに雪女は眼を大きく開いて、うるさそうに顔を顰め携帯電話から耳を離す夕夜に問いかけた。
「あの、分かったって。本当に引き受けてもらえるんですか？」
「そう言ったつもりだけど。――って、ああもう。うるさいうるさい。そんなに怒んなよ」
携帯電話の方の耳孔を耳で押さえながら、夕夜が電話の相手に悪態をつく。
半ば呆然とその光景を見ていた雪女は、シャクッと無意識のうちに一口氷の粉を口に運びながら、思い出したように夕夜に質問した。
「あの、夕夜さん」
「ん、なんだ？」
「もう一つの質問は何だったんですか？」
「ああ、それか」
受話器の向こうからどんな言葉が送りつけられているのか、夕夜は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべながら、残ったもう一本の指を折った。
「あんたの名前。まだ聞いてなかったろ。――ンガ。あーもう。はいはい、俺っちが悪かったって」
電話に向かって頭を下げる夕夜に、雪女はどういった反応をすればよいのか分からないといったふうに照れ笑いを浮かべ、艶やかな唇を動かした。
「私の名は、梨雪（りせつ）と申します」

雪女の夏（2）

揺れ動く車窓の向こうで、騒々しく景色が流れていく。太陽から逃れるように、座る梨雪はその白い身体を安息の影へと沈めて息を着いた。ガラス細工のように透明感のある肌には、すでに幾つもの透明な珠が浮き上がっている。

「暑くて溶けてしまいそうです」

頬を流れる一滴の汗を指で掬うと、不意に個室の扉が開いた。

「ここで溶けられたら困るな。列車代と宿台が無駄になるし、俺っちの怒られ損だ」

個室のドアを開けて廊下から現れた夕夜は、小さく苦笑する。部屋の温度に小さく身震いすると。その手に持つ氷だけが山盛りに入れられたコップを梨雪へと差し出した。

「ありがとうございます」

安堵したようにコップを受け取り、梨雪がその繊細な指先で氷の一つを口へと運ぶ。サイコロほどの氷が艶やかな唇に吸い込まれ、かりっと涼しげな音を立てて砕かれた。

そんな彼女の姿に、夕夜は震える唇で笑みを作りながら冷え切った座席に腰を下ろす。こちらは夏だというのにホットコーヒーを口元に運んだ。震えていた唇が、温かな湯気と柔らかな茶色の液体に解される。

夕夜が手配した切符は、当日に予約を取ったとは思えない最高クラスの個室だった。だが、快適な旅を約束するその個室も、今は些か寒すぎる。梨雪のために、事務所と同様、設定の最低温度まで空調を利かせてあるのだ。先ほど切符を確認しに来た車掌は、その異常な寒さに驚きを隠せないでいた。その眼が梨雪の姿を捉えるや否や、上気したように真っ赤になっているのだから、面白いことこの上ない。

声の裏返っていた車掌のことを思い出し小さく吹きだした夕夜に、

梨雪は不思議そうに首を傾けながら、すこし躊躇したようすで話を切り出した。
「あの、夕夜さん」
「ん、なんだ？」
「夕夜さんは……その。人間……ですよね」
「いきなりな質問だな」
梨雪の質問に苦笑を漏らしながら、夕夜はコーヒーをサイドボードに乗せて答えた。
「ああ、種族でいえばてっきとした人間だよ。ちょっと、人より長く生きてるけどな」
楽しげな笑いにつられ、夕夜の耳に下がる鈴のピアスがりんりんと音を奏でる。その深い音色はまるで、夕夜の時を代弁しているようだ。
夕夜の答えに梨雪は「そうですか」と、思案するように浅く眼を閉じる。再び開かれたその透明な瞳は、推し量るように夕夜の黒眸を直視した。
「夕夜さんは……」
喉まで出かかった梨雪の言葉が、何かにせき止められて無音の空気となる。夕夜は怪訝な顔をして訊き返そうとしたが、それを梨雪は小さく首を横に振って遮った。
「いえ、なんでもありません」
「あっ、そう。んじゃ、話したくなったら話してくれ」
恐縮する梨雪に、夕夜はあくまで明るく肩を竦める。話したくない相手に話しさせる駆け引きを、夕夜は長い月日の中で知悉していた。それに、夕夜も梨雪も寿命は長い。時間はたっぷりとある。
しかし、押し黙ってしまった梨雪に、個室の空気はどこかぎこちなくなった。そんな空気を解そうと、小さく息を吐いた夕夜が何気なく梨雪に声を掛ける。
「これから行く梨雪の住む山は、どんなところなんだ」
夕夜のその問いかけに、緊張していた梨雪の表情が僅かにほぐれ

た。
「とても良いところですよ。自然が残り、私たちが住む闇がまだまだ手付かずに生きています。そして、特に冬の景色は圧巻です。全てを覆う純白の雪には、なにものにも染まらず、人々に畏敬の念すら抱かせていました」
その言葉を皮切りに、梨雪は夢中で故郷の山のことを話し始めた。その話がほとんど冬のことであるのは、彼女が雪女であることの性だろう。次々に紡がれる物語のような冬の出来事の話に、夕夜は口を挿まず耳を傾け続ける。自慢げに身ぶり手ぶりで話す仕草は、見た目の鮮麗された美しさとは対照的に、子供のように無邪気だった。
「……というわけなんですよ。あれ？　どうかしましたか、夕夜さん」
話し続けていた梨雪が、何やら考えむように腕を組んでいる夕夜を見て話しを切る。
「ん、ああ。俺っち、その山行ったことあるわ」
「え？」
夕夜の唐突な告白に、梨雪が眼を丸くする。
「私どもの山に、ですか」
「ああ。もうかなり昔のことだから、すっかり忘れてた。いやー、あの頃は俺も若かったな。丸一日山を走り回ったり、河童の大将と相撲を取ったり。山の神に交渉して、人柱の風習を止めさせたこともあったな」
壮大な夕夜の昔話しに、梨雪が「そ、そうですか」と乾いた笑みを漏らす。山の神に哄笑するなど、人間の領分を大幅に超えている話だ。
気がつけば列車のアナウンスが目的地の名を告げていた。
梨雪の住む山までは、駅からはバスでの移動になる。途中で溶けられては堪らないと、夕夜は梨雪のために列車から氷をくすねて渡しておいた。日に数本しかないバスに乗り、揺られること小一時間。事務所から五時間を掛けてようやく旅館に辿り着いた。

受付を済まし、中居に案内された部屋に梨雪は思わず声を飲み込む。通されたのは、その高級そうな旅館でも離れに特別に作られた一室だった。調度品は見るからに良いものが揃っており、畳の香りが鼻孔をくすぐる。とても急遽手配したとは到底思えない。

夕夜は心付けを中居に手渡し、大きなカバンを床に下ろすと、座椅子に腰を落ち着け苦み走った顔で悪態を付いた。

「アイツめ。どんだけ高い宿をいれたんだよ」

「アイツ？」

「ああ、気にすんな。仕事がら、今回みたいな遠征は多くてな。それを頼んでいる、仕事仲間だ。心底、底意地の悪い女だよ」

事務所の対応の時や列車の中とは打って変わって、夕夜はどこか投げやりに説明する。しかし、いつまでも気持ちを苛立てておくようなことはせず、すぐに切り替えて遠路に疲れた身体を立ち上がらせた。

「それじゃあ、行くか」

「え？　行くって、もうですか？　疲れているなら少し休んだ方が……」

「今休んだから大丈夫だ」

軽く屈伸や身体を伸ばす夕夜の顔に疲労の色はない。本当に今座っただけで回復したというのだろうか。

「あ、それとも。梨雪は疲れたのか？」

口をあんぐりと開け黙る梨雪の様子に、勘違いした夕夜が口を開く。

梨雪は小さく笑うと、微笑みを浮かべたまま「いいえ」と首を横に振った。

「山に近づいたので、だいぶ回復しています。やはり、都会は慣れないものですね」

「そうだな」

夕夜が鷹揚に頷きながら、大きなカバンから小さなリュックを取り出し、中身を幾つか詰め替えて詮索の用意を整えた。

「これでよしっと。んで？雪の涙？とやらは、この山のどこかに居るんだったよな」
「はい。今は必ずいます」
「そうか。じゃあ、いっちょ見つけ出してやるか」
楽しげに自分に気合を込めた夕夜は、梨雪を伴って緑が眩しい山へと繰り出した。
梨雪に案内された奥山は、彼女が列車の中で楽しげに話していた通りの、素晴らしい景観をもって夕夜を迎え入れた。木々は生い茂り、深緑の芝生が傾地を彩る。雲の少ない空から降り注ぐ太陽の香りには、土と草の匂いが混じっていた。動植物が生を謳歌する、まさに古き良き日本の光景。都に事務所を構える夕夜には、なかなかの気晴らしにもなる。
太陽に近づいた分、肌を焼く陽はその強さを増していた。傾斜を登る夕夜の額といわず腕といわず、滴る汗が幾重にもその肌に筋を描いて滴り落ちる。時折頬を撫ぜる風は野山の涼しさを運んでくれるが、それは気休めにしかならなかった。半そではすでに余す所なく汗で濡れ、背中にびっしょりと張り付いている。
「少し休みませんか？　無理をするのは、身体に悪いですよ」
山に繰り出して小一時間。提案したのは、日傘をさし影の下で憂いの表情を浮かべる梨雪だった。
「こんなの、俺っちにしたら無理の内にはいらなぇよ」
梨雪の言葉に、夕夜はぐっと親指を立て、白い八重歯を見せ笑ってみせる。だが、その親指を立てた腕はこきざみに震え、足元はかなりおぼつかない。無理をしているのは見え見えだ。
その様子に、梨雪はどこか呆れ顔で微笑み、仕方なしという風にもう一度口を開いた。
「すみません。私の方が先に疲れてしまいました。あちらの木陰で休みませんか？」
「んあ、そうか。それなら仕方ないな。よし、休もう」
梨雪の言葉に満面の笑みを浮かべ、夕夜は一目散に日陰へと駆け

だした。辿り着くなり胡坐をかき、バックから取り出したお茶を一気に喉に流し込む。
その傍らに、後をゆっくりと追ってきた梨雪は、優雅な仕草で腰を下ろした。
「梨雪も何か飲むか。氷もあるぞ」
「いえ。私は大丈夫です」
「本当か。この暑さで」
「雪女は山の妖怪でもありますからね。自らの山に帰れば、夏でもほとんど問題ないんですよ」
梨雪の言葉に、夕夜は「へー」っと感心したように頷いた。
「それは知らなかったな。今までも何度か雪女の依頼は受けたけど、ぜんぶ冬だったし。なぁ、雪女って夏は何してんだ？」
何気なく訊いた夕夜の顔が、強張る。梨雪の顔がまるで恐いものでも見たかのように恐れ戦いていたのだ。その肩は小刻みに震え、透明な瞳が怯えている。
「おい、どうした？」
突然の梨雪の反応に、夕夜は手に持っていたペットボトルを放り捨てた。震える肩を掴み、怯える眼を自分に無理やり向かせる。夕夜の顔をその瞳に映した梨雪は、はっと気持ちを立て直すと、自分の動揺を隠すように無理やり笑みを浮かべて微笑んだ。
「い、いえ。何でもありません。ごめんなさい」
「別に謝んなくていい。それより、どうしたんだ？」
浮かび上がった腰を再び芝生に落とし、夕夜は放り投げたペットボトルを拾い上げた。中身の半分ほどを山の地面に呑まれたそれを、残った分を梨雪に差し出す。梨雪は何も言わずに受け取ると、そっと唇を濡らした。
「私は。夏が……嫌いです」
「雪女だから、ってわけじゃなさそうだな」
小さな呟きに、夕夜は真摯な眼差しを梨雪に向ける。梨雪はその黒眸から逃れるように顔を背けると、そのまま膝を抱え込んでしま

った。
一陣の風が吹き、梨雪の水色の前髪と着物の袖を攫う。涼しげな風は、哀愁を乗せて夏の焼けた山を駆け抜けた。
夕夜は無言のまま梨雪から視線を外し、背後の木の幹に自らの背をあずける。そして、唐突に現れた雪女の寂しげな背に、再び視線を這わせた。探し物の依頼だったが、本当の依頼は別にある、と小さく白い背中と、工芸品のような儚くも美しいうなじが語っていた。
無言の時の中、微かに擦れ合う木の葉に耳を傾けること数分。
「クスクス。クスクスクス」
その幼い笑い声は、不意に眼を閉じていた夕夜の耳を撫ぜた。瞼を持ち上げ、ぼやける視界に声の主を探す。
「こっち。こっちだよ」
少しバカにしたような、女の子の声。
「こっちだよ。こっち。分からないの？　あはは、顔もバカっぽいけど、耳もバカなんだ」
「だれが……バカだって？　コラ」
それまで疲れと暑さでぐったりとしていた夕夜が、「バカ」という単語を受け、一気に精力を漲らせる。妖怪の世界で『単純馬鹿』が夕夜を指す隠語になっていることは、本人知らない事実である。安っぽい挑発に、夕夜はすぐさま顔を持ち上げた。
「どこに居る！」
極力冷静を装いながら、夕夜が隈なく木の屋根を観察する。
声の主は、夕夜が背を預ける木の枝で、ブラブラと足を揺らしながら無邪気な笑みを浮かべていた。
「誰だ。おま……」
「捕まえてっ！」
探るように口を開いた夕夜の言葉を、梨雪の鋭い声が切り裂く。その声に対する夕夜の行動は俊敏だった。余計な言葉は吐かず、全身のバネを使っての垂直跳び。少女がぶら下がる木の枝までの数メートルを一瞬にしてゼロにする。がさっと、夕夜の体重を受け止め

た枝が、葉っぱをざわめかせて大きく撓った。
人間離れしたその跳躍に、少女が驚いたように眼を丸くする。
「うはっ！　お兄さん凄いね！」
驚きの表情はすぐに子供の無邪気な笑みに覆い隠された。白いアネモネの花をあしらった子供用の浴衣に身を包む少女は、その幼い顔をキラキラと輝かせる。
怪訝な顔をする夕夜よりも早く、少女の小さな口が動き、
「お兄ちゃん、遊ぼうよ」
「なっ！」
少女の姿が夕夜の視界から消えさった。
「に？」
自分の言葉が遅れるという事態に動揺しながら、夕夜がすぐさま辺りへ視線を走らせる。
「夕夜さん。向こうです」
その視線を、遠くへと走り去る少女を指差しながら叫んだ梨雪の声が誘った。
夕夜はすぐさま枝から飛び降り、梨雪の指の先、走る少女の背中に視線を向ける。
その視線は少女が向かう、深い森へと流れた。
「逃げ込まれたら面倒だな。ちょっと、ここで待っててくれ」
その声を梨雪の隣に残し、夕夜は少女の背を追って駆けだした。
所詮は小柄な少女の足だ。夕夜はたちまち少女に追いつき……再び消えた少女に眼を丸くした。
「あはははは。お兄ちゃん、間抜けだなぁ」
小馬鹿にした笑みを浮かべながら、少女は山間にぽっかりと口を開く森の入り口で佇んでいた。
「どんな手品だ。いったい？」
夕夜の口元が、楽しげに吊り上がる。今さら馬鹿にされているのは、あまり気にしていないらしい。その笑みは、向こうで手を振る少女と、なんら変わらなかった。

「捕まえられるかな。お兄ちゃん」
ぺろっと可愛らしい舌を出し、少女は森の中へと消えていく。
「上等だっ！」
その小さな背を追って、夕夜は躊躇うことなく森の中へと駆けだした。緑の葉とこげ茶色の幹のベールが夕夜を包みこみ、そして薄暗い影がその身体に降り注ぐ。森の合間に出来た獣道。その両側に生える雑草を靡かせながら、夕夜は足下の悪道を駆け抜けた。
「捕まえた」
完全に射程内に入った少女の背へ、夕夜の手が伸びる。
「捕まんないよ」
その指先で、少女は冷たい冷気を残して消えさった。いったいどんなカラクリを使っているのか。夕夜の手のひらが、虚しく虚空を掴み取る。
「どこだ？」
「こっちだぁ」
バカにしたような返事は、夕夜の頭上からだ。出逢った時と同じように、木の枝に腰掛ける少女は、悪戯気な笑みを夕夜に夕夜に振りまく。
再び足に力を込めた夕夜は、先ほどの失態を思い出し、込めた力を霧散させた。
「んで、お嬢ちゃんはいったい俺っちに何の用で？」
「あれれ、用があるのはそっちじゃないの？」
夕夜の質問を逆手にとり、少女はクスクスとせせら笑う。いらっと、夕夜のこめかみが跳ねた。
「もう一度訊くぞ。俺っちに何の用……」
「ノロマなお兄ちゃんには、教えてあーげない」
森全体に響きそうなほどの大声で、少女はお腹を抱えて笑い声を張り上げる。バタバタと揺れる足に合わせて、彼女の腰掛ける枝がざわざわと波を立てる。
突然、その波が一段度大きくなった。余波で揺れる木の枝に、夕

夜は片膝を付いて凶悪な笑みで少女に笑いかける。
「俺様をあんまり馬鹿にすると、泣かすぞ」
「泣かないよ」
手を伸ばせば、もう少女に手が届く。
口調が変わった夕夜に少女はひるむ様子を見せず、笑みを浮かべたまま向かい合った。
「ほー。じゃあ、どうするんだ？　喚くのか？」
「ううん。笑うの」
「んなっ！？」
その声につられるように、夕夜の足元が枝の表面を滑った。夕夜が足を乗せていた部分だけが、唐突に凍りついたのだ。氷は水気を孕んでおり、表面の摩擦は少ない。あとは、物理的な重力の法則に任せて、夕夜の身体は堅い地面に落下した。
「いっつっつ。何しやがんだ？」
身体を起こし、夕夜が怒声を張り上げる。どうやら、怒ると素が出るタチらしい。
「あはははは。怒った怒った」
そんな怒りに顔を赤くする夕夜を楽しげに煽りながら、浴衣の少女はスクッと立ち上がり、小さな手を振った。
「まぁ、挨拶はこれくらいでいいかな。また、遊んでね。お兄ちゃん」
声を残し、少女の身体はまるで春に溶ける雪のように、跡形もなく消えてしまう。
「クソガキ。絶対にゲンコツかましてやるから、覚えときやがれ」
姿を消した少女に、夕夜は身体を横たえたまま拳を地面に叩きつけ、鬱憤の溜まった声を張り上げた。

雪女の夏（3）

夕夜たちが泊まった宿、福治苑のもてなしは絶品の一言に尽きた。用意された料理は、山間というのに海の幸にも富、もちろん山の幸の味も筆舌し難い。美味い料理に舌鼓を打った後は、極上の露天風呂だ。源泉かけ流しの見事な造りだった。疲れが湯の中に溶けだし、一日の苛立ちを洗い流してくれる。すっかり鬱憤をお湯に流した夕夜は、上機嫌なままに自室の離れへと戻ってきた。

「早かったんですね。身体はちゃんと洗いましたか」

しっとりと水気を含んだ髪を拭いていた梨雪が、夕夜に少し含み笑いを浮かべながら声をかける。性格が変わった夕夜を見てからというもの、梨雪は少し夕夜のことを子供扱いしていた。

「洗ったよ。もともと俺っちは早風呂だからな」

面白くないといった表情を浮かべ、夕夜は素っ気なく答える。その様子に梨雪はクスッと艶やかに微笑み、滑らかな髪に櫛を通し始めた。結わえていたため分からなかったが、梨雪は意外と髪が長い。穏やかな滝のような水色の髪は、梨雪の腰近くまでその清流の装いを見せていた。

朝顔の絵があしらわれた旅館の浴衣に袖を通している梨雪に、夕夜はふと疑問に思ったことを口にする。

「なぁ、もしかして風呂に入ってきたのか？」

「はい。いいお湯をいただきました」

「いいお湯って……溶けなかったのか？」

身を傾けて訊いてくる夕夜に、梨雪は首と肩だけを振り返り、意地悪そうに笑う。その笑みが、夕夜に嘘だと告げていた。

憮然とする夕夜に、梨雪は声を出して笑い、一言付け加える。

「水浴びだけしてきたんですよ」

「ああ、そうですか」

投げやりに言って、夕夜は身体をすでに準備された布団へと投げ

出した。ごろりと寝返りを打つと、白熱光の温かな光が眼に沁み渡る。眩しげに腕で庇を作ると、その向こうで何かに光が遮られた。
梨雪が髪を梳かす手を止めて、夕夜を覗き込んできたのだ。はだけた浴衣の胸元から、吸い込まれそうな白い肌の乳房が覗く。ぎょっと、して顔を背ける夕夜の耳を、梨雪の妖しげな笑い声が撫ぜた。
「意外と、照れ屋なんですね」
「ほっといてくれ？」
口早に言う夕夜に、梨雪はさらに笑みを濃くしながら、僅かに身を捩る。胸元のはだけが広がった。
「抱き枕にちょうどいいんですよね。今夜も熱帯夜になるそうですよ」
「また、えらく態度が変わったな？　お前はいったい何がしたいんだ？」
自分のペースを取り戻しながら、夕夜は梨雪に問い掛ける。人生経験の果てしなく長い夕夜は、感情をコントロールする術を心得ていた。子供相手には向きになることもあるが、基本的に会話の空気を掴むことにおいて、夕夜に並ぶ者はそういない。
「誘っているのに、ノッてきて下さらないのですね？」
「俺から見れば、まだまだ梨雪も子供だからな。百年後に出直してこいよ」
夕夜の顔に余裕が戻ると、梨雪は残念そうに口を尖らせながら身を引いた。
「女の花盛りは、意外とすぐに終わってしまうんですよ」
梨雪は最後にもう一度だけ艶やかに微笑むと、胸元を正し、再び櫛で髪を梳かし始めた。
ほっと胸を撫で下ろす夕夜に、背中を向けたままの梨雪の声が届く。
「夕夜さん。雪女の伝承をどのくらい知っていますか」
感情を感じさせないその言葉に、夕夜は探るように梨雪の背を睨む。そして、不穏な動きが無いことを感じ取ると、小さく息を吐い

て答えた。
「まぁ、人並み以上には知ってるよ」
「では、何で雪女が人の前に姿を現すか、なぜ人を求めるのか知ってますか？」
梨雪のその問いに、夕夜の口が開きかけて止まった。雪女の伝承は本当に幾つも知っているし、今までに何度か雪女の依頼も受けてきた。だが、梨雪の言ったようなことは考えたこともなかった。
「雪女が人を求めるわけ、ねぇ」
何百年生きようと、分からない疑問は生まれてくる。その面白さに夕夜は頬を緩めつつ、梨雪の言葉について思考を巡らせた。
雪女が人を求める理由。確かに、多くの雪女伝説は雪女の方から人間を尋ねてくる。思い返してみれば、夕夜が今までに受けてきた依頼も、人間を求めた末の恋愛ごとがほとんどだった。では、その理由は何だろうか。
妖怪が人に恋心を抱くことは少なくないが、雪女に関してはその例がかなり多い。基本的に、雪女は男を作らなくても自らの分身として子を残せる。つまり、わざわざ人間の男を求める必要はないのだ。
眉間にしわを寄せて、頭を悩ませる夕夜。しかし、曖昧な答えばかりで、核心は得ない。そのことを梨雪に伝えようとした途端、夕夜の身体が俄かに緊張した。
梨雪は浴衣を脱ぎ棄て、一糸纏わぬ姿となって夕夜の前に立っていた。
「どうした？　もしかして、また俺を襲いたくなったのか？」
冗談交じりに訊ねる夕夜に、梨雪は何も言わずしだれ掛かってくる。害意が無いことをその憂いた目を見てすぐさま感じ取った夕夜も、それ以上の言葉は無く梨雪のことを柔らかく迎え入れた。
静かな静かな抱擁。
氷のように冷たい身体を密着させ、睦言のように耳元で囁く。
「それは……寂しいからですよ」

「寂しい？」
「はい。私たち雪女の多くは冬の時しか姿を現わせません。私のような者は、本当に特殊なんです。夕夜さん。あなたが今までに逢ってきた雪女の方は、いったいどこでお会いしたんですか」
梨雪の冷たくも熱情の籠った言葉に、夕夜は過去の記憶を掬いあげる。掬いあげた記憶は、どれも冬のことだった。
「でも、じゃあなんで人前に？」
「だから、寂しいからです」
嗜めるように言う口調には、溢れんばかりの悲哀が籠っていた。
「春、夏、そして秋と。私たちは冬の極寒よりも冷えた時を、ずっと一人寂しく過ごさなくてはなりません。だから私たち雪女は人を求めるんです。この……温もりを求めて」
梨雪の冷たい指先が夕夜の頬に触れ、彼の浴衣の下の胸へと滑る。夕夜の深い双眸を映し込む透明な双眸に黒点が描かれる。
夕夜は相談屋だ。相手が困っているならば、それが自分の応えられるものならば応える。
優しく、慈愛にあふれた腕で梨雪を抱き寄せる夕夜。
「あは、お兄ちゃんて純情なんだね」
その声は、部屋に満ちる熱い空気を霧散させた。
「子供は寝てる時間だぞ」
夕夜は梨雪の背中に回しかけていた腕を引っ込めると、眉間に皺を寄せ「お前は引っ込んでろ」と顔に書きながら、声がした背後を振り返った。
いつ、どこから、どうやって。
夕夜に悟られることなく部屋へと忍び込んだ昼間の少女は、部屋に用意されたお煎餅をバリバリと貪り食いながら、二人の情事を眼を輝かせて見ていた。
「あ、なにやってんの。ほら、続けて続けて」
先を急かす少女に、夕夜はどこか疲れたように溜息を着きながら、優しく梨雪の身体を退かした。その頬は昼間の一件を思い出したの

か、微かに震えている。
「やあ、また会ったな。っていうより、俺っちはお前を捕まえようとしてんだぞ。分かってんのか？」
「無理だと思うけどなぁ」
お煎餅の最後の欠片を噛み砕き、少女は夕夜に笑いかける。
図々しくもお茶をずずーっと音を立てて飲みほした少女は、子供らしい無邪気な笑みを浮かべながら、「はい、パス」と言って夕夜の眼の前に何かを放り投げた。
真っ白な布団を汚したそれは、夕夜の靴だ。
「なんの、つもりだ？」
「だって、裸足で外に出たら危ないでしょ」
「分かってるのか？　ここは、部屋ん中だぞ」
「じゃあ、これならどう？」
その呟きを残して、少女はその小さな身体を夕夜の双眸から消し去った。一体どんな力を使っているのか。奥歯を噛みしめる夕夜の耳に、かんっと、何かがガラス窓を叩く甲高い音が響く。夕夜がそちらを向くと再び音が鳴り、氷の塊のようなものが窓に跳ね返され、夜の帳に飲み込まれた。
ペキペキと、無言のまま夕夜が指先を鳴らす。そして自らの靴を摘み上げると、音を立てて部屋の窓を全開にした。梨雪の言うように今夜は熱帯夜になりそうだ。空調の利いた室内とは逆に、むわっとした熱気を孕んだ空気が夕夜の頬を撫ぜる。
「ちょっと、食後の運動に行ってくる」
夕夜は軽く振りかえり、梨雪に微笑みを残して夜の闇へと駆けだした。
あっという間に部屋の灯りが闇に飲み込まれ、林へと飛び出した夕夜の浴衣の裾が激しく靡く。月明かりに照らされながらも、旅館を包み込む茂みは夕夜の視界を黒々と彩った。
「さてと、ませがきはどこにいる？」
小さく悪態を付きながら夕夜は辺りを見回すが、闇にまだ目が慣

れてなく、姿を探すことはできない。「しゃーねーなぁ」と溜め聞き交じりに夕夜が短く、聞き慣れない言葉を唱える。すると、夕夜の耳から下がる鈴が輝き始め、その光で夕夜の視界に色彩を彩った。
「よし。んで、アイツは……」
「鬼さんこちら。手の鳴る方へ」
「こっちか？」
闇から響く声と手の音を頼りに、夕夜が闇を切り裂くように駆ける。闇夜の鬼ごっこは、まだ始まったばかりだ。だが、いつまでも鬼は代わらない。
「鬼さん」
「こちら」
「手の鳴る」
「方へ」
「だあぁぁぁ。ちくしょう」
駆けるごとに声の位置が変わり夕夜を右へ左へと翻弄する。そして、夕夜が勇んで「こっちか！」と飛び出した時だった。
夕夜の視界が、唐突に下から上へ流れ出す。落ちる身体を受け止め、逆巻きに打ち上がる水柱。気泡が夕夜の視界を埋め尽くす。鼻と口から同時に侵入してくるお湯に、夕夜はもがきながら、首を水面へと引き上げた。
「キャァァァッァァー」
「んなっ！？」
耳を割く悲鳴。視界を彩る、桃色に上気した柔らかな肌。夕夜が崖からダイブしたのは、福治苑の女風呂であり……
そこで夕夜は鼻から大量の血を吹かされて気絶した。

雪女の夏（4）

「随分と大変な目に遭いましたね」
翌日。部屋に用意された朝食に舌鼓を打ちながら、梨雪は対面に座る夕夜を茶化すように笑いかけた。まるで猫にでも引っ掻かれたような傷を顔面や腕に付けた夕夜は、昨日よりもさらに憮然とした表情で梨雪の笑みを受け止める。
傍目には顔の良い夕夜だったからこの程度で済んだが、知り合いという旅館の女将からこっぴどく注意され、その機嫌の悪さは留まるところを知らなかった。普通に考えれば多すぎる朝食も、焼け食いの勢いに負け次々と胃に収められていく。
結局、用意された分を全て平らげた夕夜は、そのまま苦しげに仰向けになって転がった。
「今日の詮索は中止にしますか？」
「いや、行くぞ」
中居のことを考えて食器を丁寧にまとめる梨雪の言葉に、夕夜は呻くように答える。だが、その言葉には続きがあった。
「少し休んでからな」
夕夜の呟きに、梨雪は微笑を浮かべて頷く。
少女の捜索が始まったのは、朝食を終えてから二時間ほど経った後だった。
「待てぇ――っ！」
野山に夕夜の声が木霊する。その何重にもなる声に、夕夜に追われる少女は楽しげに舌を出して「あっかんべー」と、ガキ大将顔負けの憎たらしい笑顔を浮かべ振り返った。
二日目の鬼ごっこ。しかし、やはり少女の不思議な力は、夕夜の人間離れした足を軽々と振り切っていた。触れられる直前にその身体は幻と消え、別の所で夕夜を指さしお腹を抱えて笑い声を上げる。
だが、夕夜の気力が萎える気配は一向になかった。

少女が幻ならば、夕夜は太陽だ。降り注ぐ熱気にも負けない闘志で、この鬼ごっこに活を見出す。夕夜の足に蹴り上げられ、緑の芝が舞い上がる。その緑の影が風に攫われるよりも早く、夕夜の右手が少女に伸びる。だが、やはり捕まえられない。

手を伸ばせば消えうせる終わりのない鬼ごっこは、日が暮れるまで続き。夕夜が鬼のまま幕を下ろした。

「あぁーあ。ダメか」

膝を重たげに引き摺りながら、夕夜は喘ぐように身体を布団へと打ち出した、夕食はまだだが、梨雪が中居に用意させておいたのだ。

「なかなか、手ごわそうですね」

優雅な仕草で、梨雪がお茶を注ぐ。その姿を見ながら、夕夜は耳の鈴にそっと指先を這わせた。

「その鈴。何か特別な力があるんですか？」

「ひ・み・つ。だよ」

お茶を差し出す梨雪に、夕夜は意地悪げに笑って答える。昨日今日会ったとは思えないほど、二人は打ち解けていた。これも、夕夜が醸し出す独特の雰囲気によるものだろうか。

昨日とは一つとして同じ料理の無い絶品の夕食で精を蓄え、温泉で汗を流す。

再び少女が現れないかと注意を張り巡らせながら、夕夜は悲鳴を上げる足を白いシーツに投げ出した。

「たく。最近なまってるな」

「だったら、マッサージでもしましょうか？」

「じゃあ、おねがいでも……。いや、やっぱりやめとく」

赤い舌で桜色の唇を舐める梨雪の姿に、夕夜はお誘いをやんわりとお断りしながら、上半身を柔らかな布団を倒した。

「あら、残念」

余裕のある大人の笑みを浮かべ、梨雪が夕夜の傍に腰を落とす。警戒の緊張を張る夕夜に、梨雪の口元の笑みが一層濃くなった。

「大丈夫です。いつも発情しているわけではありませんよ」

「なにも言ってないぞ」
「顔に書いてありますよ」
楽しげに鼻を鳴らす梨雪に、夕夜は面白くなさげに口をへの字に曲げる。その唇に、そっと梨雪の指先はあてがわれた。
口を開こうとした夕夜の唇が、梨雪の指先と、どこか悲しげな表情に押し留められる。
「夕夜さんは……寂しくないのですか？」
水晶玉のような瞳が真っ直ぐに夕夜を写し、そっと言葉を待つ。だが、耐えきれずに、再び梨雪の唇が動いた。
「夕夜さんのことは噂で知りました。特別な力を持つがために何百年も生きる、不老長寿の人間。あなたは、なんでその長い時を生きることが出来てのですか。取り残される中、あなたを支えているものは何ですか」
かちかちかち、と時計の針だけが音を立てる室内は、梨雪の身体から漏れ出す寂寥の思いに、寒々しい雰囲気で満ちていた。
そんな中、梨雪の指先は弾かれたように宙を舞う。
夕夜は、梨雪の想いが籠ったその問いに、深い寂しさを織り交ぜながらも決して強がりではない笑みで持って答えた。
夕夜の笑みを受け、鈴のピアスが光を放つ。
「どうして……」
すがるように唇を噛む梨雪。その脳裏に、再び夕夜が見せた悠久の歴史が弾けた。雪女も普通の人間より何倍もの長寿を誇っている。だが、夕夜が見せたものは、雪女が生きた年などほんの夢ごとのように感じるほど長く、そして切ない思い出だった。戦火に焼かれる人々や、居場所を奪われた妖怪たちの憤り。そのなかでそっと横たわる優しさが、ら雪の身体に流れ込む。
「それが答え……だよ」
不敵とも思える笑みを消さぬまま、夕夜は静かに唇を動かした。
ありえない、と梨雪が首を横に振る。髪を振り払うその姿は、稚児が駄々をこねているようだ。

「こんな、こんなので……。こんなに寂しいのに、悲しいのに。何でっ！」
身体を寝かせたままの夕夜に、梨雪が覆い被さるように捲し立てる。束ねていない水色の髪が夕夜の頬に掛かり、外から二人の顔を完全に遮った。
夕夜は、その水晶玉の瞳に写る自分の顔を直視しながら、笑っている自分の顔にさらに深い笑みを刻み込んだ。
「俺っちを、必要としてくれた奴がいたから……かな。そんでもって、俺っちを必要とする奴が、今も、これからもたくさんいるだろうから。それに、俺っちも楽しんでるんだよ」
「楽しんでる」
「ああ、今日の鬼ごっこも楽しかったぜ。まぁ、明日は俺が勝つけどな」
「何を根拠に……」
どこか怒ったように、梨雪は夕夜の身体から身を離す。そして、そのまま自分の布団へと潜り込んでしまった。
夕夜は身を起こし、膨らんだ布団へと視線を流す。
「なぁ、梨雪」
「知りませんっ！」
背中に差し伸べられた声を、梨雪は冷たい声で遮断する。
夕夜はそんな梨雪に苦笑を浮かべると、その視えない瞳に向かって再び言葉を投げかけた。
「約束するよ。お前らの願いは、必ず俺が叶えてやる」
「……」
無言の返事を受け取り、夕夜はそっと温かな白い光を放つ白熱灯を、穏やかな燈色の光を放つ常夜灯に切り替える。自らも自分の布団に潜り込むと、眠りにつく間際に寝返りを打ち、夕闇に向かって囁いた。
「約束してやるよ」
橙の闇に溶けるその言葉に、窓の向こうで佇む少女は口元を引き

結び、ぐっとその小さな手を握り締めた。

雪女の夏（5）

「ほれほれ、まだ捕まえられないの？　お兄ちゃん？」
「人をバカにするのも、いい加減にしろよ。お嬢ちゃん」
炎天下の下、荒々しく肩で息を吐く夕夜は、十メートルほど先で涼しげに笑う少女へ精一杯の虚勢を投げかけた。
夕夜がこの山を訪れて、早一週間。その間、毎日毎日この鬼ごっこは続けられていた。しかし、夕夜にはもう後がない。なぜなら、福治苑の予約は今日までしか取っていないのだ。
じりじりと肌を焼く熱気に、滴る汗。額から目に掛かる汗を乱暴に拭い、夕夜は体勢を低くする。そして、渾身の力でその身体を前へと投げ出した、逃げるそぶりを見せない少女は、やはり夕夜の手の届く寸前で、冷たい冷気を残し幻と消える。こつん、と氷の礫が夕夜の後頭部を打ち、振り返ると初めて彼女に会った時のように、彼女は森の手前で手を振っていた。
「たく、子供は本当に元気だな。イライラするくらいに」
苛立っているのか楽しんでいるのか分からない笑みを浮かべ、夕夜がすっかり重みの無くなった足に力を込める。そして、森へと駆けだそうとした瞬間、その肩を繊細な指先が撫ぜた。
「お疲れ様です。夕夜さん」
「梨雪か。宿に居ろって言ったろ。溶けても知らねぇぞ」
足に込めた力を霧散させ、夕夜が子供のような笑みを梨雪に投げかける。
そんな夕夜に梨雪は穏やかな微笑を零し、その桜の桜弁のような唇を動かした。
「なかなか、上手くいかないものですね」
「まぁ、ガキ相手に本気になるわけにもいかないからな。大人げない」
汗だくの本気丸出しの姿で、夕夜は大人げなく言い切る。

思わず吹きだしそうになる口を艶やかに袖で隠しつつ、梨雪はその透明な瞳で、森の入り口から手を振る少女を見定めた。
「捕まりそうですか？　もう、時間もないんですよね」
「まぁ、予約を延長することもできるんだが……。それすると、またアイツにどやされんだよな」
　辟易と呟きながら、夕夜は軽く腕を回す。そして「よしっ」と小さく気合を込め、信頼に足りる不敵な笑みを心配げな表情を浮かべる梨雪に振りまいた。
「まっ。安心してくれよ。そろそろ本気出すからさ」
「では、お手並み拝見させていただきます」
「おう、よく見とけよ！」
　ぐっとガッツポーズを残し、夕夜は再び両足に力を込めて走り出した。
　夕夜の身体が、緑の帳に飲み込まれる。寸前で夕夜よりも早く森に飛び込んだ少女は、これまた出逢った時のように木の上だ。夕夜は足に力……気を練り込み、ひと跳びで背高い木の枝へと跳ね上がり、木から木へ軽やかに飛び移る小さな背を追い駆けた。
「残念だけど、鬼ごっこは今日でおしまいだな」
「それはヤダ」
　夕夜の言葉に少女は振り返らず、緑の闇に向かって即答する。だが、いくら人間離れした動きを見せようと、少女は夕夜を振り切ることができない。一瞬、深緑生い茂る葉の束が夕夜の視界から少女を奪い去ったが、次に現れた背はもう間近だ。天井を覆っていた葉の群が開け、太陽が森の隙間に降り注いだ。
　夕夜が少女へ向かって手を伸ばす。だが、少女は指先が触る刹那その姿を消し……。
　その後を追うように夕夜の姿もまた、しかしこちらは粉々になって掻き消えた。
「うそっ！」
　二人分の身体が消えた地点から少し離れたところで、幼い驚きの

声が上がる。先に姿を消した少女は、目を丸くして夕夜の消えた空間を凝視した。夕夜は間違いなく自分を追っていたはず。その身体が粉砕したという事実に、少女の意識は縫い付けられた。
「どこにいったの？」
動揺する少女は、忙しなく辺りに眼を走らせる。姿はおろか、気配や気の残滓さえ感じられない。
「どこ、どこ、どこ？」
首を右へ左へ振るたびに、少女の頭に乗っかった丸い髪の束が揺れる。
「つーかまえた」
小さな頭をそっと叩く温かなゲンコツ。
振り返ると、息を切らし左手に硝子の欠片のような物を摘んだ夕夜が、会心の笑みを浮かべて立っていた。
「コイツだろ。お前が消える手品の正体は」
言いながら、夕夜は指先で水滴が浮き上がる硝子の欠片、のように見える氷の薄い膜を弄んだ。
「コイツに自分の姿を映して、俺の眼を誤魔化してたんだな。いやー、入れ替わるタイミングが上手過ぎて、初めは本当に気付かなかったぞ」
「ちぇっ。いつ分かったの」
あーあ、という感じに首の後ろで手を組み、少女は夕夜に訊ねる。夕夜は疲れた息を思いっ切り吐き出しながら、可愛らしい少女のどこまでも深みのある大きな水色の瞳に向かって答えた。
「二日目。あの、あっつい中をさんざん走らされた時だよ」
「そんなに早く？　でも、なんで」
驚きを隠せない少女に、夕夜はようやく落ち着いた呼吸に不敵な笑みを浮かべて、彼女の問いに答えた。
「影だよ」
「影っ？」
思わず身体を跳ね上げる少女。

「そう。初日は、木陰に森の中、夜のおかげで分かんなかったけどな。二日目は、丸分かりだ。本物のお前には体の丸い影、でも、入れ替わったときは氷の膜の細長い影」
「じゃあ、さっきのも？」
「ああ。ちょうど木陰が途切れただろ。入れ替わったのは、一瞬俺っちの視界から外れたあの時だ」
「でも、そんなに早く気付いてたなら、どうして今まで？」
「そりゃ、入れ替わる前にスピード勝負で勝ちたかったからに決ってるだろ。まぁ、最後はこっちもインチキ使ったけどな」
「そう、そこ。そこが訊きかかったの！」
その言葉を待っていたとばかりに、少女の水色の瞳が輝きだす。少女と同様に、夕夜もその反応を待っていた。
「訊いてばかりじゃなくて、ちょっとは自分で考えてみろよ」
これまでのお返しとばかりに意地悪げに鼻で笑う夕夜に、それまで目を煌めかせていた少女が顔を剣呑に曇らせる。ピキッと枝が凍り始めるのを眼の端に収め、夕夜は慌てて肩を竦めた。
「悪い悪い。俺が悪かった」
「早く教えてよ」
待ちきれないとばかりに、少女は手を振り回す。そんな反応に、夕夜も楽しげに自分の手品の種を披露した。
手に持っていた氷の膜を、そっと手に乗せる。すると、手に載った薄い膜から上がる冷気が、一瞬にして氷の鶴へと姿を変えた。
「すごい」
「すごいも何も、お前にもこのくらいできるだろ」
「でも、氷の欠片なんていつ集めたの？」
「そんなの簡単だ。さっき向こうで鬼ごっこしていたうちに集めておいたんだよ。盗むのは、ちょっと得意だからな」
平然と言う夕夜に、少女は「やられた」と額を小さな手で叩く。その小さな身体を夕夜は唐突に抱きかかえた。
「こ、こら。何するの」

動揺する少女に、夕夜は意味ありげに微笑む。
「そんなの、決ってるだろ」
呟きを残し、夕夜は枝から地上へ飛び降りる。そして少女を優しく抱きかかえたまま、森の出口へ向かって歩き始めた。しばらく歩くと、鼻孔をくすぐる森の香りが、身体を包み込む太陽の香りに切り替わる。
その森と太陽の狭間で、日傘をさす梨雪は待っていた。
「ご苦労様でした」
丁寧に梨雪は夕夜に頭を下げる。そして、再び頭を上げた時……
夕夜の左腕が、梨雪の身体を包みこんでいた。
「え……」
驚きに目を丸くする梨雪。動揺する少女。
二人の美女と美少女を抱いた夕夜は、そっと囁いた。
「？雪の涙？。確かに見つけ出したぞ」
その囁きは、どこか居心地悪そうに笑う少女へと向けて放たれていた。
「なんだ……気付いてたんだ」
悔しそうに呟く少女に合わせ、夕夜の左腕に包まれていた梨雪の身体から柔らかさが消え、氷の彫像に姿を変える。梨雪の唇を成していた桜の花びらが、優しく吹いた風に吹かれ、野山へと帰っていった。
梨雪の変化に驚くことなく、そっと手を離した夕夜は「まぁな」と軽く答える。
「何でわかったの？」
「実はな、雪女は涙で人の形を作ることができることは知ってたんだよ。雪女はそうやって涙で作った赤子を抱いて人の前に現れる、って話を昔聞いたことがあったからな。でも、最初に『おやっ』と思ったのは、ここに着いた時のコイツの言葉を聞いた時だ。ええっと……、お前も梨雪でいいのか？」
「ううん。私の名前は雪花（せっか）」

「そうか、良い名前だな」
夕夜の賛美に、雪花は顔を赤らめて顔を逸らし、「で、なんでよ」と口早に言った。
「初め事務所で梨雪は『現れる』って言った。でも、ここに着いて言ったのは『今は必ずいます』って言葉だった。まるで、相手の姿が見えてるみたいにな。なんとなく違和感があったのはその時だ。あと、雪花と初めて会ったとき。梨雪は捕まえてとは言ったけど、あの時も、そんでもってその後も一度も雪花のことを?雪の涙?って呼んでなかったからな」
「そんなことで。でも、それだけなの」
「もちろん、それだけじゃないさ。つーか、ヒント出し過ぎだぞ」
微笑みながら夕夜は?雪の涙?、梨雪と一体化した着物の鬼灯を指さした。
「鬼灯の花言葉は【いつわり】。そんでもって……」
夕夜の指先が滑り、少女の着物の白いアネモネに定まる。
「白いアネモネの花言葉は【真実】。だろ」
「はぁ……大正解」
どこか残念そうに答える雪花を抱いたまま、夕夜はゆっくりとその場に腰を下ろした。
「それで……なんで俺っちをここに?」
優し声色で、夕夜は雪花に問いかける。梨雪は心地よさげに目を細めながら、その小さな身体と声を振るわせて、ゆっくりと、まるで深々とふる雪のように静かに答えた。
「雪は……さ。どんなに降っても、どんなに降り積もっても。春には消えて、みんな忘れちゃうんだよね。そして、私のことも。冬はあんなに私と一緒に遊んでくれるのに……」
言葉に出さなくても、全身で雪花は語っていた。
ただ一言……寂しかったのだと。
雪花は目尻から零れる涙を拭い、無理やりな笑みを浮かべて夕夜の顔を見上げた。

「思いっ切り遊びたかったんだ。太陽の下で、誰か……」
その言葉を最後まで聞かずに、夕夜は雪花の小さな身体を抱きしめた。言葉よりも確かなものが、肌から溢れ出し梨雪の魂に沁み渡る。
「夕夜……そんなに抱きしめたら、溶けちゃうよ」
「大丈夫だ、溶けやしないよ。溶けても、また捕まえてやる」
ぎゅっと、雪花の小さな手が夕夜の服を掴んだ。押さえていた寂しさが堰を切って溢れだし、幼い泣き声が野山の隅々まで沁み渡る。零れる涙は雪の結晶となって、二人の身体を白く包み込み、地面に落ちると同時に元の水へと姿を戻した。
「ねぇ、夕夜。ずっとここにいてよ。私と、ずっと一緒にいてよ」
泣き顔で目を赤く腫らし、雪花が夕夜に懇願する。
しかし、夕夜の首はゆっくりと横へ動いた。
「俺はここに留まることはできない。まだ、俺を必要としてる奴らがいるからな」
「そんな……」
再び身を包む寂寥の予感に、雪花の顔が強張る。だが、その頬は直ぐに緩んだ。
夕暮れの真っ赤な太陽を背負う夕夜が、そっと雪花の耳に囁く。
「本当……に、そんなこと……」
「できる。ちょっと、俺がどやされるけどな」
「でも、私……」
「もちろん『ずっと』ってのは無理だ。でも、雪花が大人になるまでなら誤魔化せる。それに……」
「それに？」
「俺っちは、ずっと雪花に会うことができる。遊んでほしい時にはいつでも呼べよ」
力強い笑みを浮かべながら、夕夜は雪花の綺麗な髪を優しく撫ぜた。そして、思い出したように、呟く。
「そっちこそ、約束忘れるなよ」

「うん。うんっ」
夕暮れに染まる丘で、今度は満開の雪の結晶が真っ赤な花で二人の身体を包みこんだ。

雪女の夏（6）

「はは、良い顔してるじゃねか」

夏の終わり。事務所には、一通の残暑見舞いを見る夕夜の笑い声が響いていた。残暑見舞いの差出人は、福治苑に住み込みで働くことになった雪花からだった。

あの後、再び夕夜は携帯電話でどこかへと電話を掛け、電話の相手に怒鳴られながらも梨雪を高名な氷彫刻家の弟子として仕立て上げ、福治苑へと売り込んだのだ。しかも、旅館の女将は霊感があるらしく、雪花のことも認めてくれた。

「アイツ、知っててあの旅館を手配しやがったんだな」

口元に笑みを浮かべながら、夕夜は視線を事務机の置かれた携帯電話へと向け悪態をつくと、再びはがきの写真へと視線を戻した。写真では後ろに大きな白鳥の氷細工を作り出した雪花が、誇らしげに胸を張っている。どうやらその後の経過は順調のようだ。はがきにも、女将さんにしごかれながらそれでも楽しくやってる、と言葉が添えてあった。

ぎぎっと、背中を預けた椅子が声を上げる。

夕夜ははがきを大切にファイルに仕舞いこむと、机の上で水の玉を表面に浮かべた器を手に取った。ひんやりとした冷気が、鼻を抜けて夕夜の暑さで溶けかかった脳を癒す。

高々と積まれた氷の粉。鮮やかな抹茶の緑と白い練乳、そして濃い紫の大粒の小豆。

特製の宇治金時をスプーンで掬い、しゃりっと軽快な音を立てて噛みしめる。

「うん、美味い」

喉に流れる冷たい清涼感に、思わず声を漏らしながら、夕夜はキッチンの奥に眠る冷蔵庫へと視線を流した。

冷蔵庫の上、冷凍庫には、今は大きな混じりっ気のない氷が入っ

ている。その氷で作ったカキ氷は、最高のものだ。
もう一口、氷を口に運ぶ夕夜の耳元で、りんと嬉しそうに鈴が鳴る。
舌の上で溶ける氷を頬を綻ばせながら、夕夜は静かに呟いた。
「まいどあり」

第二話　妖孤の秋

ジュァァァァー

油の跳ねる小気味の良い音が、夕夜の住む狭いアパートのキッチンに響いていた。

「よし。うまそうだ」

満足げに微笑みながら夕夜は菜箸を伸ばし、油の色を吸い取って綺麗な狐色に化けた、薄い豆腐を引き揚げる。油きり用の金網に乗せられた油揚げは、窓の外と同じ深い秋の色に染まっていた。

静かな飛沫を上げ、また新たな薄豆腐が油へ沈む。沈んでは身を焦がし、引き揚げられては小麦色に焼けた身を冷やす。弾ける油の音に鼻歌が混じり、部屋に満ちる食の調べは、ゆっくりと夕夜の表情を和らげた。

薄豆腐を揚げ続けること数十分。銀の金網の上に、油揚げの大華が綺麗な花を咲かせる。

「よしっと。こんなもんか」

全ての薄豆腐を上げ終えた夕夜は、満足げに微笑んだ。鼻をくすぐる香ばしい香りを楽しみながら、今度は揚げ終えた油揚げを丁寧にタッパーに詰めていく。

「今年で最後かな」

タッパーを風呂敷で包み、先に作っておいた水飴の瓶と一緒に旅行鞄に仕舞った夕夜は、すでに夜の帳が落ちた窓の外を見つめながら静かに呟いた。

妖孤の秋（2）

深緑が枯れ、紅に染まる京の山。
「これを見ると、秋が来たって感じがするな」
目に鮮やかな紅葉を楽しむ観光客に交じり、夕夜は峠の茶屋で団子を頬張りながら呟いた。ひらり、と舞い落ちた紅葉（もみじ）が鶯色のお茶に浮かび、鮮やかに色彩が浮かび上がる。
春には桜、夏の深緑、秋の紅葉に、冬の雪帽子。時代がどれだけ流れようとも、ここで見ることのできる景色は、いつまで経っても同じ趣のままだ。星の数ほどの出会いと別れを繰り返した夕夜にとって、いつまでも変わらない景色は、彼らを思い出す日記代わりとなっていた。
「さてと、そろそろ行くか」
ささやかな思い出に触れ、頬を緩ませた夕夜が腰を持ち上げる。頼んだ団子とお茶の代金を支払い、夕夜は再び歩き始めようとした、その時。
「ねぇねぇ、お兄さん。ひとり？」
「ん？」
十五夜に飾る薄（すすき）のような薄茶色の長い髪を背中に流した女の子が、不意に夕夜に声を掛けてきた。地元の高校の制服を着込んだその少女は、悪戯っ気のある笑みを浮かべながら、上目づかいに夕夜のことを覗き込む。
「ねぇねぇ、ひとりなの？」
「まあ、見ての通りだな」
どこか人懐っこい少女に、夕夜は軽く肩を竦めて答えた。
「へ～、男一人。寂しく京巡り？」
「大きなお世話だよ。じゃあな」
軽く手を上げ、夕夜はその場を立ち去ろうとする。
そんな夕夜の態度に、少女は慌てて駆け寄ると、夕夜の腕にしが

みついた。
「あ、とと。ちょっと待ってよ」
「何か俺っち用でもあるのか？」
「こんな可愛い子が声を掛けてるのに、無視して行くってどうなのさ？」
「自分で可愛いとかいうなよ。あと、子供には興味がなくてな」
意地悪気に笑いながら答える夕夜に、少女は頬を膨らませた。
「あー。まだ子供扱いするんだ？」
「まだ？」
「え、あ、いや。あはははは」
「ふぅ。まぁ、とりあえず離れろよ」
優しく微笑みながら、夕夜が少女の額に軽くデコピンを送り込む。
ゴチンと、なかなか痛そうな音が響き、少女はその場にうずくまった。
「〜〜〜〜った〜い」
「じゃあな」
蹲る少女を残し、夕夜は颯爽と歩きだす。
そんな夕夜の足が、道半ばで紅葉の生い茂る林の道半ばでピタリと止まった。先ほどまで登っていた日が突然落ち、辺りが暗闇に包まれる。
「これは？」
まったく驚いた様子を見せないまま呟く夕夜に、蹲っていた少女がゆっくりと立ち上がる。「駄目だよ、お兄さん」と、その怪しい笑みを浮かべる口元に人差し指を添え、身の毛のよだつような恐ろしい声で囁いた。
「女の子の誘いを断っちゃ」
暗い、夜よりも暗い闇に覆われ、辺りの景色とともに少女の姿が見えなくなる。
徐々にその深さを増す闇は、ついに自分の手すらも見えない濃闇となって夕夜を包み込んだ。目を開けているのか閉じているのかさ

え、その闇の中ではわからない。
奪われた視覚を補うかのように、夕夜の他の感覚が鋭敏化する。寂寥を滲ませる葉の香りが、まだ自分が山の中にいることを教えてくれる。靴底から足裏に伝わる微かな感触が、自分がまだ山道に立つことを伝えてくれる。
「くすくす。くすくす」
耳をくすぐる、怪しい少女の笑声。だが、その音は四方から聞こえてきた。遠くのようで近く、近くのようで遠い。反響する声は、その距離感がわからなかった。
闇に囚われて、どれほどの時間がたったのだろうか？
不意に夕夜はため息をついたかと思うと、見えない腕を思いっきり背後に伸ばし、息を殺して忍び寄っていた細い腕をつかみ取った。
「きゃっ！」と、闇の中から小さな悲鳴が響く。
「駄目だ。これじゃあ人は怖がらないな」
厳しくたしなめる言葉に、闇の中から「ちぇっ」と拗ねた声が響いた。
その声に導かれるように、夕夜の視界に色が戻り、辺りは再び元の光景に戻った。天頂から少し傾いた太陽、山道を覆う紅葉の赤い絨毯、「次はどこへ行く」と楽しげに言葉を交わす観光客。今しがたの怪奇を感じさせない、辺りの光景は、今の怪奇を感じたものからすれば逆に異様に感じる。
そんな異様が日常茶飯事の夕夜は対して気にした様子もなく、その手に？まえた少女に、少し厳しく、そして優しげに微笑んだ。
「ずいぶんなご挨拶だな。萌狐（もこ）」
萌狐と呼ばれた少女は、自分の名を呼ばれるや否や髪の毛の盛り上がりのように見える耳をピクピクと動かし、自分の手を掴む夕夜の手を巻き込んでその体にしがみついた。
「もう、夕夜のいじわる。人が首を長くして待ってたんだから、もうちょっと何かないの？」
夕夜に抱きつきながら頬を膨らませる萌狐に、辺りからくすくす

と笑い声が上がる。傍から見れば、若い女の子が彼氏に抱きついているように見えるからだろう。
その少女の正体が、古からの大妖怪、妖狐の娘だと知ればいったい彼らはどんな顔をするだろうか。
「お前は人じゃないだろ。それといい加減離れろ。変な噂は立てたくないんだよ。こっちには知り合いが多いからな」
自分の周囲、正確には周囲の人ではなく、あらゆるところにある影を気にして夕夜が萌狐を窘める。
陰と陽の折り込まれた古都京都には、夕夜の知り合いがそこかしこにいる。もちろん、人ではなく闇の住人の方の、だが。人の知り合いももちろんいるが、こちらは変人奇人ばかりで、どちらにしろあまり関わりたくはない。
「やだ」
夕夜の提案に、萌狐はいっそすがすがしいほどはっきりと答える。
夕夜自身も懐かれるのは嫌ではないが、このままではこの後の用事に支障をきたしてしまう。どうしたものか、と夕夜が小さくため息を零す。すると突然、しっかりと抱きついていた萌狐の体が、グラッと大きく傾いた。
「とっ。おい、萌狐。大丈夫か？」
細い胴に手を回し、グラついた体を支えながら夕夜が萌狐の顔を覗き込む。
「ほぇ～」
萌狐は何かに当てられたようにボーっとした顔を見せた後、「隙ありっ！」と小さく叫んでいきなり夕夜の体をまさぐり始めた。
「な、こら。なにしてる」
服の中にまで手を突っ込んでくる萌狐に、夕夜がたまらず声を上げる。と同時に、周囲の視線、この場合は人の視線が一気に熱くなった。昼間から大胆なカップルとでも思われたのだろうか。
一方、周囲の視線も夕夜の注意もあっさりと無視した萌狐は、一通り夕夜の体を漁り終えると、不満そうに顔を持ち上げた。

「夕夜。お土産は？」
あることが当然とばかりに萌狐が催促する。
「萌狐。ちょっと、歯を食いしばるか」
さすがにこれ以上好き勝手させるのは教育上よくないと悟った夕夜は、朗らかな笑みを満面に浮かべながら、固く握った拳を萌狐の頭に突き落とした。ゴンっ、と人の頭から聞こえてはいけない音が響き、周囲にいた人たちまでもが痛そうに顔を顰める。
一方、痛いどころの話ではない衝撃を頭に受けた萌狐は、声を上げることなくその場に蹲った。
「本気で泣くよ？」
「さすがに泣かれたら面倒だな」
頭を押さえながら恨めしく顔を上げる萌狐に、夕夜は背負っていたバックを開け、風呂敷に包まれたお土産を取り出した。
「油揚げっ！」
普通の人間にはわかるはずのない香りを嗅ぎつけ、蹲っていた萌狐が風呂敷めがけて飛び上がる。
現金な萌狐に苦笑を漏らしつつ、夕夜はひらりと体を躱し、風呂敷を萌孤から遠ざけた。
「あぅ～」
「まだお預けだ」
口元に指を押し付け物干しそうな顔をする萌狐に、夕夜はきっぱりと宣言する。
「なんで？」
「あのなぁ、お供え物にいきなり手を出そうとするなよ」
「いいじゃん。どうせウチに供えるやつなんだし。さあ、はやく、はやく！」
「あのなぁ」
隠している尻尾を盛大に振る萌孤に、夕夜がどうしたものかと腕を組む。そこで夕夜は、今回はもう一つ目的があったことを思い出した。

「仕方ない。じゃあ、先にこれ持って行ってくれ。俺っちは、ちょっと知り合いに会ってくるから」
「はーい」
元気な返事とともに、萌孤は夕夜の手から風呂敷を奪い取り、脱兎の如く走り出した。
「あ、こら。真狐(まこ)さんに渡すまで食うんじゃねーぞー」
「ふぁふぁってふー」
「て、食ってんじゃねぇかよ」
すぐに小さくなった陰にため息を漏らしつつ、夕夜はバックに残る重みを確かめながら、紅葉の敷き詰められた秋の山道を歩き始めた。

妖孤の秋（3）

伏見稲荷大社が望める一軒の住宅。町の景観を壊さないほどに洋の外装を取り入れたその家から、今日は軽快な笑い声が響いていた。

「毎年、ご足労ありがとうございます。夕夜さん」

「気にすんなって。俺っちも好きでやってることだから」

「いえいえ、本当にありがとうございます。ささ、飲んでください。今日は泊まって行くんですよね」

注がれたビールを上機嫌になって一気に飲み干す夕夜に、細身で腰の低いその男、萌弧の父である七尾は細い眼をさらに優しく細めながら微笑む。

すると奥の方から。豪快な笑い声が響いてきた。

「はっはっは。好きで毎年こんなに美味いもん持ってきてくれるなら、大歓迎だね」

どこか気の弱そうな雰囲気の七尾とは対照的な、迫力のある強気な女性。萌狐の母である真狐は、両手と、ついでに頭にも乗せてきた料理を食卓に並べ始めた。キノコと油揚げの混ぜ込みご飯に、油揚げのステーキ。お稲荷さんに、白菜と油揚げのおひたし。油揚げのお味噌汁に、油揚げのチーズロール。果てには油揚げのピザまで。

まさに、油揚げ料理のフルコース。

「相変わらず、凄いな」

自分が作ってきた油揚げの七変化に、夕夜が思わず感嘆のため息を零す。夕夜も古今東西の料理は一通り嗜んでいるが、ここまで一品をさまざまな料理に作り変えられるほど、創造力には富んでないのだ。

じゃあ早速、と運ばれた料理に箸を伸ばし、夕夜が舌鼓を打つ。すると何を思ったのか、真狐がにやりと悪い笑みを浮かべながらズイっと夕夜に迫ってきた。

「で、夕夜。そろそろ、うちのバカを娶る気になったのかい。なん

なら、明日は天気雨にしてやってもいいぞ」
「バカは俺っち一人で十分だ」
直球なもの言いに、夕夜がおどけて返す。
「式はぜひともうちの神社で……」
「はっはっは。そりゃ残念だ。まあ、引き取りたくなったらいつでも言いな。アイツが嫌だって言っても嫁に出してやるからよ。さあ、夕夜ももっと飲め。今日は飲み明かすぞ！」
ごにょごにょと何か小声で漏らす七尾を無視し、真狐が特大の盃に日本酒を注ぎ始める。
「んじゃ、お言葉に甘えて」
真孤にならって夕夜が自分のグラスにビールを注ぎ込んでいると、台所の方から突然、何かが割れる騒々しい音が響いた。
「なんだ？」
音がした方へ夕夜たちが赴くと、粉々になったお皿が散乱するキッチンで、萌狐が頭を抱えながら蹲っていた。
「ん。異常無しだな。さ、飲み直すぞ」
「実の娘に対して、もうちょっと愛情を持ってもいいんじゃない？」
しっかりと手に持ってきていた一升瓶をあおる真狐に、萌狐が恨めしそうに顔を持ち上げる。
「いたぁ～。夕夜。タンコブになってない？」
「たく。何やってんだ、お前は」
涙目になる萌狐に、夕夜が飛び散った破片に注意しながら近寄り、頭を手で撫でてやる。手触りの良い綺麗な髪のてっぺんは、ものの見事に膨らんでいた。
「あーあ。でっけータンコブになってるぞ。大丈夫か？」
「胸もそのくらい膨らんだらいいのにな」
「お母さんは黙ってて！」
自分の胸を見せつけるように笑う真狐に萌狐の怒声が飛ぶ。真孤の後ろで救急箱を持つ七尾は、そんな二人を交互に見ながら助けを求める視線を夕夜に向けていた。

「血が出てるわけじゃないから、それはいいよ。代わりにタオル取ってくれ」
苦笑を漏らしながら頼む夕夜に、七尾が「いつもすみません」と本当に申し訳なさそうに頭を下げながらタオルを差し出す。
夕夜はタオルを受け取ると、キッチンの蛇口で軽く湿らせてから萌狐の頭に被せてやった。
「ふにゃ～。冷たくて気持ちぃ～」
目を細めながら、萌狐がピクピクと耳を動かす。本当に気持ちよさそうに夕夜に体を預ける萌狐を見て「あきれた。それが目的だったんじゃないのか？」と怪しみながら、真狐は散らばる破片を拾い始めた。
「力を使えばいいんじゃないのか」
一つ一つ手で拾い上げていく真孤に、夕夜が首をかしげる。
そんな夕夜に、真狐は粋な笑みを浮かべながら答えた。
「ばーか。こんなくだらないことに力を使ってどうする」
真狐の言葉に、夕夜は「あー、そうだったな」と相槌を打つ。真狐たち妖孤の一族は、日本古来から生き続けた誇り高き妖怪の血筋だ。今でこそ移りゆく歴史の波に迎合し、人の世で暮らしているが、その力の使い方には誇りをもっている。軽々しく力を使うのは、彼らの生き方に反するのだろう。力を持つものには、それ相応の役割があるのだ。
「しかし、萌狐。どうしたんだ？」
後始末を手伝いながら、夕夜が萌狐に視線を送る。萌狐は七尾に「もう大丈夫」とタオルを返しながら、しきりに首を傾げた。
「ん～、なんか最近ボーっとしちゃって。熱でもあるのかな」
自分の額に手の平を当て、萌狐が再び首を傾げる。どうやら、熱は無いようなのだが、身体から疲れが抜けきっていないといった感じだ。
そんな萌弧を見て、先ほどまでの剛毅な態度とは一転して神妙な面持ちを作った真狐が、鋭い視線を夕夜に走らせた。

「夕夜、大丈夫か？」
「大丈夫って、何がだ？」
どこか心の中が読めない態度で聞き返す夕夜。
真狐は何やら落ち着きなく耳を引くつかせると、苛立ち気に足音を響かせながら居間へ向かい、薄黄色の手提げ袋を持ってきて萌狐に放り投げた。
「わっぷ」
投げられた手提げ袋を顔面で受け、萌狐が非難の眼を真孤に投げかける。相変わらずオロオロとする七尾を尻目に、真孤はエプロンのポケットからなガマ口を取り出すと、手提げと同じように萌弧に投げつけた。
「わっとっと。お母さん、さっきからどうしたの？」
突然慌ただしく態度を変えた真狐に、萌狐がきょとんとした表情を見せる。
そんな戸惑いの隠せない萌狐に、真狐は手に持っていた一升瓶を一気にあおると、何を思ったのか実の娘に口移しで酒を注ぎこんだ。
「ン☆@ム$#！？」と、突然の母親の奇行に、萌狐が目を白黒させる。
その様子をこれまたオロオロと眺める七尾と、興味深そうに見つめる夕夜。
無理やり口腔に注がれる酒を、萌狐はなすすべもなく嚥下する。コクコクとその白い喉が動き、目尻には涙が浮かんできた。初めは抵抗するそぶりを見せていたが、今はもうだらしなく四肢を弛緩させ、真孤が両手で挟んでいる頬だけで浮いているという感じだ。
ちゅぽんと、軽快な音を立てようやく母と娘の唇が離れる。
「ほみゃ～……」
お酒を注がれたからか、それとも母の情熱的な口付けを受けたからか、だらしなく顔を弛緩させる萌狐。頬は微かに上気し、桃色の吐息を吐きだしている。とても正常な状態とは思えない。座ることすら困難なのか、萌狐はそのままへにゃへにゃとフローリングの床

に身体を横たえた。もはやへべれけ状態である。
「あ～あ。たかが日本酒一口飲んだぐらいで、情けない」
そんな娘を仁王立ちで見降ろす真狐は、再び一升瓶を呷る。一口と言っても、口付けの時間から察するに飲んだ量は相当のものだろう。
「さてと、情けないガキにはお仕置きが必要だな」
今しがた実の娘に酒を飲ませたとは思えない言動にさしもの七尾も口を挿もうとしたが、開けかけた口は真狐の鋭い睨みで強制的に閉じられた。
「あんたも苦労してるな」
「慣れてますから」
夕夜の言葉に、七尾が恥ずかしそうに頭を掻く。
そんな二人をよそに、ふぅっと酒気を帯びた熱い吐息を吐き出す真狐は、フローリングの床に寝ころんだ萌弧をまるで猫のように首根っこを掴んで持ち上げると、楽しげに事の次第を見守っていた夕夜に投げつけた。
完全に目を回している萌狐を受け止める夕夜に、真狐は手提げとガマ口も一緒に放り投げ、先ほどまでの奇行とは裏腹に豪快な笑みを浮かべて言い放つ。
「つまみが切れたから買ってこーいっ！」
ビシッと玄関を指差す真狐。「そんな、こんな遅くに頼まなくても。そうだ、やっぱり私が」と七尾が手を上げて申し出るが、その申し出は再び真狐のひと睨みで黙らされる。
夕夜は「へにゃ～」っとどこか夢心地の萌狐と、酒をあおりながら哄笑する真狐を交互に見比べた。
「いいのかよ、こんな酔った娘を連れ出しても」
「いいんだよ。なんだったら、襲っても良いんだぞ」
本気とも冗談とも取れない真狐の言葉に、夕夜は「やれやれ」と肩を竦ませながら、どう見ても一人ではまともに歩けそうにない萌狐を背負い上げた。

「んじゃ、行ってくる」
「おう、行って来い」
「夕夜さん、萌狐をお願いします」
人を一人背負っているとは思わせないほど平気な顔をしている夕夜を、真狐と七尾は口々に送り出す。二人に軽く会釈した夕夜は、そのまま酔っ払いの子狐を背負って夜の京に繰り出した。

妖狐の秋（4）

しん、と静まり返る京の夜。仄かに頬を撫ぜる夜風に、淡く道を照らす月明かり。遠くで聞こえる秋虫の音。薄のような萌狐の髪が、ときおり夕夜の耳元をくすぐる。背中に感じる彼女の体温は、彼女が少し酔っているからだろうか、じんわりと熱かった。

萌狐を背負っているので夕夜はなるべく人通りの少ない道を歩いた、夕夜が出逢うは闇と影。人ならざるものの知り合いが、クスクスとおかしそうに笑い合う。

出発してから十数分後。もうすぐ一軒のスーパーが見えてこようとしたところで、夕夜の背中で「ふぁれ？」っと間抜けな声が聞こえた。寝ぼけているのか、小さく身をよじりながら、萌狐が自分の眼を擦る。

「あれ、夕夜？　お母さんと、お父さんは？」

どうやら、お酒で若干記憶が飛んでるらしい。それでも、夜風に当たっていたおかげか口調はしっかりしている。夕夜が「もう大丈夫そうだな」と言って降ろしてやると、萌狐は自分の足でしっかりと地面に降り立った。

いちいち説明するのも面倒なので、夕夜は適当にはぐらかして足早にスーパーへと歩を進める。萌狐もいまいち納得はしなかったが、単純に夕夜と一緒に出かけているという事が嬉しかったのか、細かいことは気にせず耳をパタパタと嬉しそうに動かしながら、その後を追った。

小さなスーパーに入ると、学生くらいの若い女性の定員が「いらっしゃいませー」と、夕夜と萌狐を迎え入れる。「何買うの？」と訊ねる萌狐に、夕夜は「つまみ」と即答。とは言っても、夕夜が覚えている限りつまみに困っている様子はなかったので、つまみそのものは少なく、もっぱら萌狐が買いたがったお菓子やマンガが籠の中に収まった。レジに向かうと、先ほどの店員が「可愛い彼女です

ね」と夕夜に耳打ちする。その声を漏らさず聞いていた萌狐は恥ずかしげにそわそわと足を組みかえていたが、夕夜が「いや、ガキには興味無いんで」と答えると、眉間に皺を寄せて夕夜のお尻を軽く蹴っ飛ばした。

スーパーから出ると、夕夜と萌狐は再び薄暗い夜道を並んで歩く。

「ねぇ、おんぶしてよ」とねだる萌狐に、「重いから嫌だ」と夕夜は即答。再び夕夜のお尻に萌狐のキックがヒットする。

「綺麗な月だね」

十五夜間際の月を仰ぎ、萌狐は鼻をヒクヒクさせながら、胸一杯に秋の香りを吸いこんだ。

月夜に照らされる影はふたつ。手提げ袋を持った背高い影と、頭の先に獣の耳、お尻から見えない尾っぽを揺らす小柄な影が、二つ並んでゆっくりと揺れる。ときどきすれ違う人影もまだらに、夕夜と萌狐は少しゆったりとしたペースで帰り道を歩いていた。まだらだった人影はさらに薄れ、逆に萌狐の表情は喜色を増す。奥の見えない薄暗い闇にも、心寂しい人気のなさにも、萌狐はまったく恐がるそぶりを見せない。

「萌狐は怖いモノがないのか？」

「ん～、お母さんが怖い。でも、起こった時のお父さんはもっと怖いかな」

唇に手を当てて、空を仰ぎながら答える萌狐。その愛らしい耳をピクピクと振るわせた彼女は、てててっと小走りで夕夜の前に回り込むと、「夕夜は怖いものなんてないんだよね」と聞き返す。

「俺っちか？」

萌狐の質問に、夕夜は空虚な空にぽっかりと黄色い傷跡を刻む月を望み、「いや、ある」とどこか遠い景色を眺めるように答えた。

意外だった答えに、萌狐が「え、なになに。教えて」と夕夜にせがむ。「どうするかな～」と意地悪気な笑みを浮かべながら右手で顎を擦る夕夜。先ほどまで静かに歩いていたのとは一転して、二人の間の空気が賑やかしくなる。

そんな折、ちょうど十字路に差し掛かったところで、不意に夕夜の耳をか細い声が撫ぜた。
「あの……すみません？」
「ん？」
肩越しの声に呼ばれ、振り向く夕夜。そこには、秋らしい薄手のストールを肩に羽織った女性が、遠慮がちに立っていた。夕夜の見当違いでなければ、スーパーでレジに立っていた子だ。
「俺っちに何かようか？」
俺っちという珍しい呼称に少し戸惑いながらも、彼女は「ちょっと、道を尋ねたくて」と帰り道が分からなくなったのだと切りだした。地元民が道に迷うのも変な話なのだが、聞くと彼女は最近この辺りに引っ越してきて、バイト先からの帰り道が分からなくなったのだと言う。聞かれた住所に夕夜は覚えがなかったが、地元民の萌狐はすぐに場所を理解すると「あっち向かって、三つ目のところを左に行って、その後はギューんと真っ直ぐ……」と身ぶり手ぶりを加えながら説明。彼女は「ありがとうございます」と頭を下げ、萌狐に教えられた道へと消えて行った。
「萌狐も昔は良く迷子になって立って、真狐さんが言ってたなぁ」
しみじみと思い出す夕夜に、「でも、一人になっても全然怖がらなかったけどね。だって、その後のお母さんの方が怖かったから」と萌狐がおどけて返す。
それから数分と経たない時だった。
「あの……すみません？」
再び十字路に差し掛かったところで背中から掛けられる遠慮がちな声。振り向くと、そこには先ほど闇へと消えて行った、あの女性が立っていた。申し訳なさそうにカバンを両手で抱え、肩のストールがユラユラと自信なさげに揺れている。
「えっと、また道に迷ったのか？」
「はい」
恥ずかしげに呟く彼女。道に迷って、行きついた先にたまたま夕

夜と萌狐を見つけ、迷惑と知りつつも、もう一度声を掛けたのだと言う。しかし、あの時に萌狐が教えた道は、夕夜たちが歩いてきた道とはまるで別の道だ。それをこの短時間で追い付いてくるとは、それほどひどい方向音痴なのか、それともそんなに萌狐の説明が分かりにくかったのか。

「えっと、さっきと同じ場所でいいの？」

すでに道順が頭の中で描かれたのか、人懐っこそうな声で萌狐が彼女に訊ねる。すると彼女は「いいえ、今日は友達のうちに泊まることにしました」と、さっきとは別の住所を萌狐に教えた。新たに聞いた住所に、萌狐は「ココは、この道を行って、すぐそこの角を曲がってふたつ目の信号のところにたばこ屋さんがあるから、そこを右に折れて……」と先ほどよりも具体的に道順を説明する。

説明の最中、ふと夕夜が「携帯かスマフォで調べればいいんじゃないか」と現代的な意見を述べるが、運悪く今日は家に忘れてしまったのだと言う。「これでわかった？」と確認を取る萌狐に「はい、もう大丈夫です」と女性は首肯。再び夜の闇へと消えて行った。

「萌狐はスマフォ持ってるのか？」

「ん～ん。携帯。でも、お母さんはスマフォにしたよ。お父さんはその辺が全然ダメだから、本当に緊急の時は妖術を使っちゃうけど」

当り前のように答える萌狐に夕夜は思わず苦笑し、そう言えば黒電話が入ってきた時も七尾さんは使いこなすまで二年掛かってたな、と懐かしい思い出を思い出す。昔から彼は電化製品に弱いのだ。逆に萌狐は新しいモノはじゃんじゃん取り入れる性格をしているので、パソコンに至っては自分で組み立てていると言っていた。ある意味、二人がいることでバランスが取れているのかもしれない。

そんなことを考えていると、また。

「あの……すみません」

三度目の十字路で同じ声が聞こえてきた。振り返ると、案の定先ほど闇へと消えて行ったあの女性が立ち竦んでいた。今度は先ほどよりもさらに遠慮がちに、少し上目使いで夕夜たちに声を掛けてい

る。
　再三にわたって現れた女性。偶然にしては出来過ぎている。夕夜は俄かに警戒心を高めるが、萌狐は自分から彼女のもとへ駆け寄って行った。
「んーと、さっきと同じとこでいい？」
　訊ねる萌狐に「いえ。さっきの友達が都合悪くて」と、女性は申し訳なさそうに口ごもる。なるほど、途中で都合が悪いことに気が付いて、夕夜たちの後を追ってきたのだろうか。今夜は人通りがやけに少ない。女性の一人歩きだ、いろんな人に声を掛けるより、一度声を掛けた人の方が彼女も安心できるだろう。
「なので、今度は別の友達の家の道を聞きたいんですが」
　丁寧に訊ねる彼女に、萌狐は「いいよ、いいよ」と二つ返事で答える。さらに萌狐は「あ、紙とか持ってる？　地図書いてあげるよ」と言って女性から紙を受け取ると、サラサラと簡単な地図を書いて彼女に手渡した。「ありがとうございます」と頭を下げて、闇の中へ消えて行く小さな後ろ姿。
「これで大丈夫だね」と、女性が消えて行った方を見ながら得意げに笑って、萌狐が夕夜の腕に自分の腕を絡める。
「なんだよ」
「人助けしたご褒美」
　にこりと笑う萌狐に、夕夜は仕方がないと溜息交じりに了承。そして、二人が家に帰ろうと振り返った、その先に。
「あの……すみません」
　今しがた、正反対の闇に消えて行った女性が、まるで闇から溶け出るように立っていた。もう一度言おう。彼女は間違いなく、夕夜たちが今向かい合っている道とは真逆の方向に消えて行った。ついでに言うなら、この辺の道には立った数秒で回りこめるような道は存在しない。つまり、彼女が先回りすることなどあり得ない。
　先ほどよりも、そして今度は明確に夕夜が女性に対して警戒心を強める。だが、そんな夕夜とは逆に、好奇心に目を輝かせた萌狐は

「すごーい。お姉さん、どうやったの？」と、親しげに女性のもとへと駆け寄った。
萌狐には恐怖心と言うものが無い。というより、萌狐自身が人外であるため、人が感じるような得体のしれないものに対して恐怖心が駆られないのだ。
一歩離れたところで、女性と萌狐のやり取りを見守る夕夜。そのとき、彼女の説明を受けていた萌狐が「あれ？」と不思議そうに小首を傾げた。
「どうした、萌狐？」
「ん～、え～っと」
声を掛ける夕夜に、萌狐が曖昧な笑みを浮かべながら振り返る。そして、その頬を掻きながら困ったように呟いた。
「なんか、この人が次に行きたいって言っている住所って……うちのことなんだよね」
十字路に佇んだまま、萌狐が女性越しに真っ直ぐ正面の道を指差す。
その時、
萌狐の指先に立つ女性が、妖しく笑うのを夕夜は見逃さなかった。
なおも警戒心を見せない萌狐。代わりに、夕夜が思い出す。彼女は携帯の類を忘れてきたと言っていた。ならばなぜ、友達が家にいないことがわかったのか？
「あれ～、もしかしてうちのお客さん」と場違いなことを言っている萌狐の襟を、夕夜が無理やり引き戻す。「ぐえぇ」という苦しそうな声に一瞬遅れて、萌狐の顔があった辺りをヒュっという鋭い風切り音が撫ぜた。チロチロと空中を舐める、細く赤く長い、先が二手に分かれた舌。その付け根は、間違いなく正面に立つ女性の口元に収まっていた。
女性の変態が始まる。形のよかった口元は耳まで裂け、穏やかそうだった眼が吊り上がる。胴は不自然に長く伸び、二本の足がその付け根から融合し、一本の長い尾と変わる。その先端は闇と同化し、

伸びた胴はその長さを計りしれない。肩に掛かっていたストールはいつの間にか風に攫われ、代わりに禍禍しく揺らめく髪がその細い肩を覆っていた。

「うわ〜……」

眼の前の光景に、萌狐は何とも気の抜けた声を漏らす。この期に及んでも、やはり怖がっているようには思えない。萌狐自身が妖怪であるということもあるが、古より濃さを増した気高き血統が、自然と自分と相手の力量差を感じ取ったのかもしれない。だが、潜在的な力と顕在的な力は違う。自分自身の力を活かしきれていない萌狐など、明らかに人を騙すことに慣れている眼の前の妖にとって、ただの餌ですら無かった。

「逃げるぞ」

すぐさま大勢の悪さを悟った夕夜が、真狐の手を引き走り出す。背後でずるずると蛇が身体を引きずるような音が追いかけてくる。だが、人を襲う物の怪の類は、多くの場合、人通りの多い場所には近づかない。存在がバレれば、その後の狩りが難しくなるからだ。

人気の多い場所、灯りの多い場所に向けて夕夜が夜道を駆ける。背後の妖怪の足はそう速くない。夕夜たちと蛇に変わった女性との距離が、見る見るうちに広がっていく。このまま全力で走れば、十分に人気の多い場所まで逃げられる。

「ねぇねぇ、夕夜。あれ、誰なの？」

とき折り背後を確認しながら、手を引かれる萌狐が夕夜に訊ねた。

「あれは、蛇女（じゃめ）だ。おそろしく狡猾でしつこいから、出来ればあんまり関わり合いにはなりたくない奴だよ」

率直な感想を述べる夕夜の眼に、夜でも人が多い繁華街のネオンが映る。あそこの中へ飛び込めば、ひとまず今日のところはしのげるだろう。

あと一歩で繁華街へ飛び出そうとしたところで、不意に夕夜の足が止まる。「ちっ」と小さく舌を討つ夕夜。「どうしたの？」と萌狐が不思議そうに訊ねる。

夕夜は足を踏み出す代わりに、そっと片手を繁華街へ続く通路に差し出した。
ボワンっと、まるで水面に手を付けたかのように、繁華街へと続く道の景色が歪む。驚いた萌狐が真似て手を差し出してみると、まるでそこだけ水の膜があるかのように空間が歪んだ。差し込んだ手の先は、なんとも奇妙な感覚に包まれる。
「夕夜、コレなんなの？」
面白いのか、不思議な空間を何度も指先で突きながら萌狐が夕夜に訊ねる。夕夜は「止めとけ」と言って萌狐に突く行為を止めさせると、険しい顔で繁華街を見つめ直した。
「やられたな」
足下にあった石ころを拾い上げ、夕夜が繁華街の方へ放り投げる。通行人の一人に向け飛んだ石は、見えない水の膜に吸い込まれたかと思うと、同じところから反射するように飛び出してきた。
「結界を張られたな」
苦々しい表情を見せる夕夜に、「え、いつ？」と萌狐が驚く。結界を張るには幾つか方法があるが、どれも口で言うほど簡単なことではない。呪具を用いるにしろ、陣を張るにしろ、手間と労力を考えれば、ただ暗闇に引き込む方が断然有効だ。それでも結界を張る必要性があるというならば、相手の力が拮抗、または圧倒的に上回っている時だろう。
蛇女は執念深く用心深い。獲物を確実に仕留めるために、今夜は手間を掛けてきた。
「さっき、アイツを四回道案内しただろ。あの時だよ」
説明しようと夕夜が口を開くと、耳にずりずりと地を這いずる追手の音が響いてきた。顔を顰めながら、夕夜は萌狐の手を引き走り出す。念のため別の路地から繁華街へ抜けられないか確かめてみたが、そこもやはり不可視の水壁により元の場所に戻る無限回路と化していた。
「ねぇ、夕夜。なんで、道案内したのが、結界になったの？」

夕夜に手を引かれながら、興味が尽きないのか萌狐が訊ねる。その声は不安や恐怖と言うよりは、この状況を楽しんでいるような響きを持っていた。
「十字路、四つ角は四の世界、つまり死の世界へ続く呪路だ。覚えているか、蛇女が消えって行った方向？」
夕夜に言われ、萌狐が道を教えた時のことを思い出す。一度目は方向的には確か南、その次は西で、三度目は東。そして、最後の萌狐の家は、十字路の北を向いていた。
「四つ角で相手に方向を指させて、相手より先にその道を歩き印を作る。四つ角を支配した時、得物はどこの角からも出ることが出来なくなる。かなり古い呪術結界だな。懐かしすぎて、すっかり忘れてた」
「じゃあ、どうする？　あいつ、やっつける？」
後ろを指差して、萌狐が物騒なことを口にする。この期に及んでも、萌狐に怯えた様子は見られない。どこか、自分は大丈夫だと言う確証でもあるのか。
夕夜は萌狐の提案に「それもいいな」と笑って答えるが、「でも、あんなしつこいやつ、相手にする方が損だ」と言って不戦を選んだ。夕夜は蛇女のしつこさを良く知っている。むしろ、そのしつこさこそが蛇女の怖さと言ってもいい。
だから、夕夜は薄暗い夜道を萌狐と共に駆けた。結界が効いているからだろう、もはや人影どころか、取り囲む家の中からも人の気配が感じられない。ただ、後ろから迫ってくる邪気だけが、逃げる二人を取り囲む。
夕夜は一見して闇雲に逃げているようだが、そうではなかった。その手には周辺の地図を映し出した携帯が握られており、夕夜は何かを目指して走っている。
この手の結界を夕夜は昔に掛けられたことがあった。だからこそ、対処法も知っている。角を抜けられないこの結界だが、裏を返せば角を曲がらなければいいのだ。なだらかな曲がり角や、二股の分か

れ道など、明らかな角でない道は通り抜けることができる。これが、結界が使いづらいと敬遠される所以だ。拘束力が強い半面、融通に欠ける。強い結界で有ればある程、弱点は如実に表れる。

そしてこの結界の最大の弱点は、相手が路地などの角の中にいなければ、まったく拘束力を失ってしまうと言うことだ。

「さてと、萌狐。準備はいいな？」

「え～。夕夜、ここ抜けるの？」

確認を取る夕夜に、萌狐があからさまに嫌そうな顔をする。

夕夜が指す道は、今回京都に来た時に萌狐が夕夜を騙そうとした、あの山道の入り口だった。すでに暖簾を仕舞っている茶屋が、暗闇の中で寂しく佇んでいる。山道には灯りが一切なく、より強い闇に呑まれていた。

だが、萌狐が嫌がるのは単純に辺りの雰囲気を恐れたからではなく、山道を歩くと言う行為に対してだ。萌狐が履いているのは夏に仕舞い忘れたビーチサンダル。とても、山道を歩くような靴ではない。

「ほら、文句言ってないで行くぞ。嫌なら、俺っちだけで行くけどな」

「あ、もう。……分かったよ」

渋々ながら、夕夜の後に続く萌狐。山道を作るのは、人が作った壁ではなく木々が生い茂った紅い林だ。もちろん、そこに綺麗に定まった角など有るはずもない。この場において、結界は完全にその役目を失っていた。夕夜の経験則から言って、今回の結界は一度抜けてしまえば効力は無くなる。後はこの山道を抜けて、別の道から萌狐の家に向かえばいい。随分遠回りになってしまうが、仕方がない。

思った以上に芸が無く、夕夜が「はぁ」っとどこか落胆の吐息を漏らす。その後ろでは、意外と苦ではなかったサンダルに、萌狐が鼻歌を上げている。蛇女にしても、結界から抜けだした獲物をいちいち追いかけようとはしないだろう。

「さてと、これからどうするかな」
そう、夕夜が頭を悩ませた、その時だった。
「キャアっ！」
山の闇を切り裂く鋭い悲鳴。同時に、夕夜の手の中から萌狐の小さな手が失われる。慌てて夕夜が背後を振り向くと、地面に引き倒された萌狐の後ろで、長々と胴を林に張り巡らせた蛇女がその細い蛇眼で夕夜を睨んでいた。
「油断、したな、夕夜」
シィャーっと、蛇独特の威嚇音を出しながら、蛇女が夕夜に語りかける。「やられた」と、目の端で萌狐を捉える夕夜は顔を歪ませた。途中から蛇女の姿が見えなくなったと思ってはいたが、まさか結界を囮に先回りしていたとは。予想以上の展開に、夕夜の顎を一滴の汗が伝う。
「このぉ～、放せぇー」
じたばたと、足に絡みついた尾を解こうと萌狐がもがく。だが、いくらもがこうとも、数百年を生きた蛇女の尾は、そう簡単に獲物を放さない。
「だったら」と、もがくことを止めた萌狐は、スッと精神を集中させた。小さな炎が、萌狐の手に宿る。闇夜に妖しく揺れる狐火が、その気配に気づいた蛇女の縦長の瞳でユラユラと揺れた。
途端、蛇女の眼から光が消える。萌狐の術に囚われたのだ。
今頃蛇女は、萌狐が見せる幻術の中で闇よりも暗い真の闇を見ていることだろう。音もなく、匂いもしない死の闇。「へへん」と、萌狐が得意げに指先で鼻舌を擦る。
だが、真の恐怖を知らない萌狐が見せた幻影は、古より恐怖を与え続けてきた蛇女に取って、児戯の範疇を超えないものだった。
「こ、ざか、しい」
「え……、痛っ！」
不明瞭な声と共に、萌狐の足に絡みついていた尾が、足を握り潰さんと締め上がる。苦悶の表情を浮かべる萌狐。その柔らかな頬を、

幻術から完全に解き放たれた蛇女が長い舌でチロリとしゃくった。
「ぐえええぇぇぇぇ」
「な、何？」
萌狐の頬を舐めた途端、突然苦しみ出す蛇女。自分の首を掴みペッペッと唾を吐き出す。わけも分からず呆然とする萌狐を、蛇女はのたうち回りながら尾を撓らせ、立ち並ぶ木々の一本に投げつけた。太い木の幹に強かに体を打ち付け、「うぐっ」と萌狐が苦しげに肺から酸素を押し出す。
「萌狐っ！」
鋭い声を上げ、萌狐へ走り寄る夕夜。だが、夕夜が駆けよるよりも早く自力で身体を起こした萌狐は「なにすんのよ、ばかーっ」と、蛇女へ向かって大声を張り上げた。ひとまず、心配はないようだ。
むしろ、ダメージが大きかったのは萌狐の頬を舐めた蛇女の方だった。苦しげな息を繰り返す蛇女は、怨念の宿った瞳を萌狐へ投げかける。
「貴様、これは、神酒か？」
ようやく身体の状態が戻ってきた蛇女が、胴体を起こしながら萌狐を睨めつける。そう、蛇女を苦しめたのは、萌狐が出かける際に真狐が無理やり彼女に呑ませた、神酒の力によるものだった。これでは蛇女は、萌狐を食べることは出来ない。萌狐を食べるには、神酒抜きのため胃を空にさせてから七晩吊るすか、それこそなにか強大な力を得る必要がある。
標的を萌狐から夕夜に改める蛇女。だが、夕夜は至極余裕の表情をしていた。お荷物と言えばかわいそうだが、これで萌狐の心配をする必要がなくなったのだ。安心して、夕夜は蛇女と対峙することができる。実際、狡猾な策と強靭でしなやかに尾にさえ気を付ければ、退けることなど夕夜には造作もない。
萌狐を少し下がらせて、夕夜が蛇女と向かい合う。蛇女はふたつの憎悪の籠った瞳で夕夜を睨めつけると、手近にあった木の一本を尾で巻き取り、その膂力に物を言わせてメキメキとへし折った。太

い幹を絞り千切られ、断末魔の叫びを上げる紅葉の木。根を大地に残したまま毟り取られたその木は、夜の山の空気を引き裂いた。
投げつけられた太い丸太。バサバサと台風にでもあったかのような激しい葉音が木霊する。
「あらよっと」
飛んでくる丸太を、身を捌いて慌てることなく避ける夕夜。
「萌狐、もうちょっと下がってろ」
流れ弾に巻き込まれないよう萌狐に注意を促した夕夜は、第二第三と飛んでくる木の砲弾を前に、自ら前進した。視界を横一線に引き裂く丸太。夕夜は軽く地を蹴ると、飛んできた丸太をさらに踏み台にし、続けて飛んできた丸太をやり過ごす。空中の夕夜に向けられた、丸太の槍。引き裂かれた幹が、その恨みを晴らすかのように鋭い刃となって夕夜に牙を向く。
大気を圧迫する丸太の圧力に、夕夜の耳に下がる鈴のピアスが凛と涼しげな音を立てた。
空中では身動きが制限される夕夜だったが、近くにあった枝を掴むと、強引に丸太の先から回避。遠くで響くドスンと重い音を耳に捉えながら、夕夜は次の丸太の軌道を予測する。
重要なのは丸太そのものではなく、丸太を投げる蛇女の尾の動きだ。どんなに激しく嘘かそうとも、所詮、尾は一本しか無い。敵の体温で相手の動きを把握する蛇女と夜の戦は幾分不利ではあるが、すでに闇に眼は慣れてきた。月も出ている。夕夜が遅れを取る理由はなかった。
柔らかな枯れ葉の地に着地したところを、轟音を共なった丸太が薙ぎ払う。身をかがめて、ギリギリで丸太をやり過ごす夕夜。凄まじい音を立てて、薙ぎ払った丸太が別の木をへし折る。
「雪花の時はかなり手加減してたからな。今日は、久しぶりに本気出すぞ」
身体の調子を確認しながら、夕夜が余裕たっぷりの笑みを漏らす。今年の夏、雪ん子である雪花の依頼を受けていた時は、時間ぎりぎ

りまで遊ぶことを考えてかなり力をセーブしていたが、今日はその必要はない。
形勢は明らかだった。危なげなく丸太を避ける夕夜と、徐々に繊細さを失くしていく蛇女。しかも、攻撃するごとに、蛇女の近くにある木は減っていくのだ。木をへし折るために費やす時間が長くなる。一際遠くにある丸太に伸びる蛇女の尾。「そろそろか」と、夕夜が攻勢に出ようと、前方へ体重を掛ける。
「夕夜、危ないっ！」
悲鳴に似た警告。意識を刈り取る衝撃。後方へ流れるはずだった景色が真横へ飛ぶ。
「ガハッ！」
横から受けた規格外の打撃に息を詰まらせた夕夜が、再び身体を襲った衝撃に無理やり肺から空気と呻きを押し出した。
夕夜の身体を受け止めた一本の木が、与えられた衝撃に耐えきれずへし折れる。バサッと、枯れ葉を舞い上げながら地面に倒れ込む夕夜。かろうじて繋ぎとめた意識の先には、蛇女の周りで揺れる二本の尾が揺れていた。
「油断、したな」
人型の時、蛇女は二本の足で立っていた。以前の蛇女は、人型になってもふた足で立つことができず着物を纏っていたが、ここ数年で成長したのだろう。二本足で立てる蛇女は、二本の尾を携えた大妖怪へと変貌を遂げていた。
ずるずると枯れ葉を押しつぶしながら、夕夜に向けて丸太を薙ぎ払った二本目の尾が、夕夜の身体に巻き付く。無駄な言葉は吐かせない。夕夜に対してその無駄な言葉を吐かせることが命取りになると、蛇女はよく知っていた。速やかに、的確に、躊躇い無く。巻き取った夕夜の身体を、蛇女は己の口へと運ぶ。耳まで裂けていた口がさらに裂け。真っ赤な口腔を覗かせながら、蛇女は一口のうちに夕夜の身体を飲み込んだ。
ゴクンっ！

重々しい音を立てて、蛇女が喉を鳴らす。異様に膨れ上がった喉から、続いて胴部分が膨れ上がる。蛇女の身体の中を、夕夜が移動しているのが外から見ても良く分かった。
間違いなく、夕夜は蛇女に飲み込まれた。
途端、蛇女の身体から禍禍しい瘴気が噴き出した。「オオ、オオ、オオオオオオ」と、感極まったように闇の空へと咆哮する蛇女。強大な力が、蛇女の長い身体の隅々まで行き渡る。
「ハレ……？　ウソ……」
その様子を、萌狐はどこか夢心地で見ていた。いつもちょっかいを出すために、おでこにデコピンをしたり、ゲンコツを降らしていた夕夜はもういない。その現実が、萌狐には理解できなかった。眼の前で歓喜の声を上げる蛇女にしても、何でそんなに喜んでいるのか分からない。
「ユウヤ、タベラレチャッタ……？」
ボーっとした意識の中、現実が徐々に萌狐の身体に浸透する。その頬を、生温かい物がペタリと撫ぜる。それが蛇女の舌だと、萌狐は認識することができなかった。
「おお、おお。苦しくない。苦しくない。食える、食えるぞぉぉぉぉ」
嬉々として、何度も何度も萌狐の顔を舐める蛇女。その生温かい感触から、徐々に萌狐の意識が現実へと引き戻される。そして、夕夜が今通っているであろう膨らんだ胴を見た途端、萌狐の身体が震え始めた。初めての恐怖。自分の命が危険にさらされた恐怖。眼の前に立つ強大な敵に対する恐怖。大切なモノが失われた恐怖。圧倒的な絶望。その絶望を裏付けるかのように、ゆっくりと、ゆっくりと萌狐の身体に蛇女が尾を巻きつける。間近に迫る、夕夜を飲み込んだ真っ赤な口腔。生臭い匂い口臭。震える身体。
「……よ」
「ん？　貴様、何を、言っている」
「返し……てよ」

ありとあらゆる恐怖に駆られながら、突如として眼に光を灯した萌狐が、その眼と同じ紅き炎をその手に宿し。叫んだ。
「夕夜っ、返してよぉぉぉぉーっ！」
「なっ？」
先ほどの蛇女の歓喜の咆哮にも勝る、憤怒の咆哮。薄のような淡い薄茶色の髪を、まるで実りに実った黄金の稲のように輝かせる萌狐。その手から解き放たれた炎が、蛇女の眼に写り込む。
萌狐の手の中の炎をその眼に捉えた途端、蛇女は再び闇に囚われた。
「なんだ、これは？」
一切の光が無く、音もなく、匂いもなく。己の身体すら認識できない死の闇。今度はそれだけではない。身体の感覚は認識できないが、どこまでも堕ちて行く恐怖が蛇女の身体を包み込んだ。
「あ、ああ、あああぁぁぁぁぁっぁぁぁっ！」
蛇女は物の怪。闇の化身。元より闇を住処とするものにとって、さきほど萌狐が作りだした闇は恐怖ではなかった。だが、これは違う。全てを飲み込む闇をも堕とす、掛け値なしに底なしの奈落の闇。終わらない闇の浮遊感。一切のものに支えられていない恐怖。自分と言う根底が堕とされる恐怖。そして何より、徐々にその濃さを増す闇へと飲み込まれる恐怖。終わらない闇の深淵。終わらないどころか、さらにその虚無さが増していく。自分と言う存在が否定される。恐怖を喰らい、さらに増幅する恐怖。
蛇女は夕夜を喰らって大妖怪へと変貌を遂げた。だが、一個として生きてきた蛇女と、世代を重ねるにつれその血の濃さを深めてきた萌狐と出は、そもそも次元が違うのだ。
その昔、京の恐怖と恐れられていた蛇女が、その恐怖に身体を飲み込まれる。震えなどという生易しいものではない。身体が闇に食われていく。二股に分かれた尾の先から、徐々に闇が這い上がってくる。逃げられない。払えない。侵食する闇は、徐々に身体を上り詰め、蛇女と言う存在を喰らって行く。

「だ、だずげで、ぐれぇぇぇぇ」
闇の化身が、闇に向かって遂に助けを求める。
その瞬間、蛇女の身体に意識が戻り、ドサッと重い音を立てながら自らの身体を横たえた。蛇女の長い身体が、己の意思に反してピクピクと痙攣する。闇に食われた部分は元に戻っているが、喪失感は未だ拭えない。生きた心地がしないとは、まさにこのことを言うのだろう。
「はぁ、はぁ、は……んぐぇ！？」
荒々しく息を吐く蛇女が、突然苦しげな呻き声を漏らす。その口腔に指し込まれた細いう腕は、蛇女の長い舌の根本と掴んでいた。蛇女が何とか自分の意思に従う瞳を動かし、自分の口に腕を差し込んだ者の姿を捉える。
闇に浮かぶ黄金色の影。蛇女と同様に縦に割れ、蛇目よりも遥かに鋭利な狐の瞳。悲しみと恐怖と怒りに濡れた双眸から滴る、汚れ無き雫。
そこにいるのは、恐怖を知らないがゆえに恐怖を与えられなかった無邪気な子狐ではない。恐怖を知り、恐怖を喰らい、恐怖を与える術を覚えた妖狐が蛇女のことを見降ろしていた。相手の腕を口に入れているのは蛇女だが、相手を圧倒し精神を喰らっているのは萌狐だ。妖怪同士の戦いは、相手を精神的に凌駕した時、すでに肉体的な勝敗は決している。それを裏付けるかのように、圧倒的な大差で勝敗は決していた。
ギリギリと、蛇女の舌の根を締め付ける萌狐の力が強くなる。
「ギ、ェ……」
苦しげに呻く蛇女。
そんな蛇女を、まるでゴミでも見るような眼で見降ろしていた萌狐は、蛇女の長い身体が全て凍りつくのではないかと思うほど底冷えする声で言った。
「夕夜、返してよ」
泣きそうに震える声。幼さが残る萌狐の声は、逆に蛇女の恐怖心

を煽った。おそらく、これ以上の言葉は無い。蛇女の時と同じだ。
今の萌狐ならば、無駄な言葉を放させる前に蛇女の身体を引裂き、その体内から蛇女の血に濡れた夕夜を引き摺りだすだろう。
萌狐に舌根を握られた蛇女の身体が激しく蠕動する。獲物を飲み込む時とは真逆の方向へ、身体の中のものを外へ押し出す蠕動運動。蛇女の胴にあった膨らみが、凄まじい勢いで蛇女の頭へと押し出される。その膨らみが蛇女の喉まで到達すると、「グエェ！」と一際苦しそうに呻き、蛇女は口から夕夜の身体が吐き出した。
「夕夜！」
蛇女の体液に濡れた夕夜を、萌狐は構わず受け止める。
吐き出された夕夜は「ぺっぺ、あーひどい目に合った」と、ことのほか元気そうに悪態を付きながら、辺りの状況を確認し安心したように一息ついた。
「ふう。どうやら、上手くいったみたいだな」
「え？」
夕夜の言葉に、萌狐が不思議そうに首を傾げる。いったい、何が「上手くいった」と言うのだろうか。
夕夜の真意を計りかねていると、ぐったりと頭の部分を地に付けた蛇女が、恨みがましく夕夜を睨みながら非難の声を上げた。
「約束が、違うぞ、夕夜」
「約束？」
蛇女の言葉に、萌狐はさらに首を捻る。そんな萌狐を無視して、夕夜と蛇女のやり取りは続いた。
「俺っちは約束を破った覚えはないぞ。ちゃんと封印は解いてやったし、俺っちのこともしっかりと喰ったじゃねーかよ」
「妖狐が、いる、なんて、聞いて、ない」
「俺っち一人なんて言ってないだろ」
夕夜の言葉に、蛇女が「うぐぅ」っと恨めしそうに唸る。状況を把握しきれず、蛇女と夕夜を交互にキョロキョロと眺める萌狐。
そんな萌狐に、夕夜は優しく笑いかけると、その小さな頭に優し

く手を乗せた。
「萌狐。一人前、おめでとう」
「ふぇ？」
夕夜の言葉に、萌狐はさらに意味が分からないとキョトンとした表情を浮かべる。自分の頭を抱えて、一生懸命情報を整理しようと頑張る萌狐だが、なかなか理解が追いつかず、プスプスと白い煙を上げ始めた。
「おいおい、大丈夫か？」
「う～ん。分かんないよ。夕夜、ちゃんと説明して」
「ああ、そうだな。んじゃ、その前に一つ聞くが。萌狐、体調はどうだ？」
「え？」
「体調だよ。た・い・ちょ・う。調子、悪かったんだろ」
夕夜の言葉に、萌狐は少し恥ずかしそうに、そしてちょっとバツの悪そうに顔をそむける。夕夜の言うとおり、かなり前から萌狐は体調の悪さに悩まされていた。なんとなく身体が重く、だるい。ひどい時には目眩が起きる。山道の入り口にあった茶屋へ夕夜を迎えに行った時によろけたのも、夜にお皿を割ったのもそのためだった。
でも、なぜそれを夕夜が知っているのだろうか？
難しい顔を作る萌狐に、全てお見通しとばかりに肩の力を抜いた夕夜が、萌狐の身体に起こった現象を説明し始めた。
「萌狐、言ったよな。お前の術じゃ、まだまだ人は怖がらないって」
「うん」
「それはな。お前がまだ半人前で、力を扱いきれていなかったからなんだよ」
「え、なんで？　萌狐、ちゃんと一三歳の時に大人になったんだよ」
妖怪は一三歳で成人を迎える。萌狐はすでに高校生だ。成人の儀はとっくの昔に終えている。
だが、夕夜はこう言った。「萌狐は半人前で、まだ力が扱いきれていなかった」と。

夕夜は諭すように萌狐に言った。
「萌狐、お前今日まで。本気で『怖い』と思ったことがあったか？」
「え？」
「あったか？」
「う、う～んと。ない、かも」
自信なさげに応える萌狐。それこそが、萌狐が力を扱いきれていない理由だった。
妖怪はもともと、人を怖がらせ、恐怖によって生まれる存在だ。恐怖こそが妖怪の源であり、力の根源。妖怪は人を凌駕する力を持って人を怖がらせてこそ、己の存在を示すことができる。だが、その為には妖怪自身が恐怖を知らなけらばならないのだ。真の恐怖を知らないものに、真の恐怖を作り出すことは出来ない。これが、萌狐が夕夜を怖がらせることができず、一度目に蛇女を恐怖に落とせなかった理由でもある。
幸か不幸か、萌狐は真狐と七尾という、指折りの力を持つ妖狐の娘として生まれた。本人の自覚に関係なく、その身には強大な力が宿る。それが、萌狐が今まで恐怖心を抱かなかった原因なのだ。萌狐を本当に倒せる妖怪など、今の日本には数えるほどしかいない。多くの場合、妖怪は生まれた瞬間に弱肉強食の中に生きるため恐怖を知るが、萌狐にはそれが無かったのだ。
妖怪の中には力を持っていても、雪女のようにその境遇から恐怖を知る者もいる。寂しさが怖れとなり、それが力の源になる。しかし、家族にも恵まれた萌狐は、それすら叶うことが無かった。
力の扱いを知らない萌狐だが、力そのものはその身に溢れている。溜まりに溜まり、排出する術を知らない力は、逆に萌狐の身体に負担となった。それが、萌狐の体調不良の原因なのだ。
では、自分より強大な敵がいない者に恐怖を与えるにはどうすればいいのだろうか。答えは単純。奪えばいいのだ。大切なモノを失う恐怖は、自分より強大な敵が現れる恐怖に取って代わって余りある。

「じゃあ、夕夜が『会ってくる』って言っていた知り合いって」
「そ、こいつのこと。京で本気で俺っちのことを殺しに来て、尚且つ萌狐を怖がらせられるような奴って言ったら、コイツが一番ちょうど良かったからな。昔掛けてやった封印を解きに行ったら、案の定恨みたらたらだったし」
　言いながら「なあ」と夕夜が蛇女に声を掛けると、蛇女はことさら不服そうな顔をして、チロチロと舌を動かした。その昔に一戦交えた仲であるからこそ、夕夜は結界の対処法を知っていたし、蛇女の結界を利用して罠を張ることを考えたのだ。
「くそぉ、次こそは、絶対」
「おいおい、まだ懲りないのかよ」
　さすが今回で諦めるだろうと踏んでいた夕夜も、未だ戦意の衰えない蛇女に驚く。蛇のしつこさとはよく言ったものだ。
「幾百年、封印されたと、思ってる。空腹だ」
「ああ、そうだろうと思ってな。ちゃんと、美味い酒と肴を真狐さんに頼んであるよ」
「……神酒は、いらん」
　プイッと顔をそむける蛇女に、夕夜は苦笑を漏らす。妖人問わず酒の中で美味いのは神酒と相場は決っているが、蛇女は神酒を飲むことができなのだ。
　そんな蛇女に、夕夜は「ああ、その点なら心配すんな」と明るい声を掛けた。
「萌狐のことはちゃんと礼をするつもりだったからな。蛇女、今のお前なら神酒を飲めるようになってるぞ。さっき、萌狐を舐めても何ともなかっただろ」
「む、そう言えば。……何をした？」
　不思議そうな表情を見せる蛇女に、夕夜は凛ッと耳に下がる鈴のピアスを鳴らせて見せた。
「お前の腹ん中に結界を張っといたんだよ。これでお前も神酒が飲めるぞ」

「何。本当、か？」
「ああ。俺っちだって利用するだけしてポイなんて言う、後味悪いことはしねぇよ。だから、もう人を襲うのは止めろよ。噂でも流れてきたら、もう一回封印すっからな」
「むむむ、承知、した」
重々しく頷いた蛇女は、それでも気だるげに身体を震わせると、徐々にその胴を引き戻し、夕夜たちに会った時の人の形へと姿を変えた。
「おいおい、それ借り物の顔だろ。町で本人に会ったらどうするんだよ？」
「問題ありません。その時は上手く誤魔化しますから。それに、今の人の世で生きるには、こちらの方が都合がいいんです」
「あー、そうかい。でも、素っ裸で森の中を歩くのはどうかと思うぞ」
夕夜の注意に妖しく、そして艶やかな笑みを浮かべた蛇女は、やはり裸のまま森の奥の闇へと消えて行った。
夜の森が平穏を取り戻す。静けさの中で風が微かに木の葉を揺らし、くすぐったいような葉音が耳を撫ぜる。
しばらく無言のまま柔らかな地に腰を降ろしていた夕夜は、「さてと」といって立ち上がると、お尻についた埃を払って萌狐に笑いかけた。
「帰るか」
夜空に浮かぶ三日月のような、綺麗な弧を唇で描く夕夜。それこそ命がけで自分を育ててくれた夕夜に、萌狐は微かに頬を赤らめながら、ちょっとおどけたように言った。
「夕夜。かっこいいけど。身体……べとべとだよ」

妖孤の秋（5）

事務所に届いた一通の手紙と小包。差出人の名は、どちらも萌狐だった。

「元気にやっているみたいだな」

ギシっと椅子の背もたれを軋ませながら、夕夜が送られてきた手紙に目を通す。手紙には体調がすっかり良くなったことや、蛇女が人を怖がらせる方法を教えてくれているなど、萌狐の近況が綴られていた。一緒に送られてきた写真を見ても、どうやらもう心配はないそうだ。

ただ、これからも毎年の油揚げは必要らしい。そうでなければ、蛇女と一緒に事務所へ押し掛けると、嫌というほど念を押して書いてあった。

来年からは神酒を付け足す分、さらに荷物が増えるだろう。神酒は熟成させればさせるほど美味が出る。こちらは、明日にでも取りかかった方がよさそうだ。

神酒を用意する算段を考えながら、夕夜は手紙を丁寧に机に仕舞い、小包を手元に引き寄せる。軽く振ってみると、カサカサと何やら音がする。小包を縛る紐を解き梱包紙を開くと、中には一辺が二〇センチほどの長方形の木箱が入っていた。

萌狐からの御礼か何かかと見当付け、夕夜が木箱の蓋をそっと開ける。

ビロロロロ〜ンッ

すると木箱の中から、舌を出した狐の人形が飛び出してきた。人形が抱えているメッセージカードには、ラメ入りの文字で『どう、怖かった？』と書かれている。

「ばか、これは『怖い』じゃなくて、『びっくり』だろ」

呆れたように漏らしながら、送られてきたビックリ箱をしばし眺める夕夜。

怖れを知ることで強くなる。それは、妖怪も人間も同じじゃないだろうか。誰しもが抱く怖れ、その怖れを祓おうともがく努力は大きな力となる。

「いや、それだけじゃない……か」

手紙に同封された写真を摘み上げる夕夜。人型の蛇女の腕に、まるで蛇のように絡みつきながら、楽しそうな笑顔を見せる萌狐。

怖れを知り得るものは力だけじゃない。失う怖れを知りるからこそ、大事な物を慈しむように、愛しむようになる。萌狐もまた、一つ大人への階段を登ったのだろう。

「ん……。くくく、そうだ」

珍しく感傷に浸っていた夕夜が、ふと何やら底意地の悪い笑みを浮かべ、萌狐から送られてきたビックリ箱を掴む。そして、窓に吹きつける木枯らしの音を聞きながら、可愛らしい狐が飛び出すビックリ箱を、開けたら夢に出てきそうな怖ろしいビックリ箱になるよう、せっせと改造を始めたのだった。

第三話　子鬼の冬

慌ただしい師走が過ぎ、今年も何かと珍客の多かった正月が明ける。半月後のイベントを見越し商店街の洋菓子店で始まったチョコレートの特売では、若い少女たちが恋話に花を咲かせていた。

「ふぅ……冷えるな」

丈の長いコートを羽織った夕夜は、白い息を吐き出しながら買い物袋片手にアパートへと向かっている途中だった。

都会にまだ雪の足音は聞こえない。だが、底冷えする冷気は、遠からずその純白を見せることを教えてくれる。「そういえば、雪花が遊びに来るって言ってたっけ」と、再び白い息を吐き出しながら、夕夜が遠山の宿で頑張っている雪花に思いを馳せる。こっちに来たら、またカキ氷でも準備してやろう。と、夕夜が身体の芯から冷えそうな御馳走を考えていると、どこからか「しくしく」と幼い泣き声が聞こえてきた。

耳を撫ぜた声に、夕夜が足を止める。急に足を止めた夕夜を不思議そうに眺める夕方の買い物客。雑踏と雑音の中、夕夜がそっと耳を澄ます。雑音に紛れてしまった声を必死に探ると、遠くの方で聞こえるか細い声を見つけた。

「こっちか」

アパートへ向けていた足が、そっと店と店の間に出来た狭い路地に向けられる。もうほとんど日の落ちた商店街でも、より一層暗い都会の隙間。冷たい空気に、ゴミの異臭が混じる。こんな所にいるのは、今夜の食料を漁る野良ネコか野良イヌくらいだろう。足下に気を付けながら、夕夜はそっと声を追う。「えんえん、しくしく」と、寂しげな泣き声が少しずつ大きくなる。

夕夜は徐々に進む速度を落としながら、路地の突き当りで静かにその足を止めた。

「……だぁれ？」

路地の奥、布切れ纏う子供が近づいてきた夕夜の気配に顔を上げる。眼を赤く腫らした家なき子は、寒さで手の先も紅くなっていた。
「俺っちは明朝夕夜。お前は？」
「うみゅは……瑠鬼（るき）」
俯きながら、蚊の鳴くような声で瑠鬼が呟く。はぐれ鬼か、と心の中で呟きながら、夕夜は表情を和らげ、優しく瑠鬼の頬を撫ぜた。ゆっくりと左右に動かすと、小さな小さな角がふたつ、確かな硬さを伴って夕夜の指先に当たる。
「良い名前だな」
「……」
ぱちくりと大きな眼を瞬かせながら、ゆっくりと顔を上げる瑠鬼。おっかなびっくりといった様子で小さな手を夕夜の手に重ね、「温かい……」と纏っていた緊張を和らげた。
まるで眠るように穏やかに眼を閉じ、夕夜の手の暖かさに浸る瑠鬼。夕夜は何かを話すわけでもなく、ただただ瑠鬼の頬に手を貸す。
どれ程、そうしていただろうか。
夕夜の指先に鈍い痺れが走ってきた時、不意に瑠鬼が顔を上げた。
「ぁ……」
微かに口を開いた瑠鬼の声が、冷たい路地に溶けていく。
「なんで、泣いてたんだ？」
口籠る瑠鬼に、そっと訊ねる夕夜。ビクッと震える小さな身体。
夕夜はわざと瑠鬼から視線を外し、少し雲行きが怪しくなってきた空へ向けて呟いた。
「俺っちは妖怪の相談屋だ。何か悩みがあるな……ら……」
ぐいっと、夕夜のコートの袖が小さな手で引っ張られる。布切れから幼い手を差し出した小さな身体は、怯えるように震えていた。
「みんなが……うみゅのこと……いじめるの……。あっちいけって……いじめるの」
途切れ途切れに言葉を吐きながら、瑠鬼が夕夜の袖を引く力を強める。ビリっと、安くは無い夕夜のコートの肩口がほつれた。下に

着込んだ長袖が冷たい外気に舐められる。
「ああ、そうか。そんな時期か」
ひとり頷いた夕夜は、引っ張られた手を再び柔らかな頬に当てると、親指の先でそっと瑠鬼の目元を拭った。温かな雫が、冷え切った指先をじんわりと濡らす。
布切れの隙間から、瑠鬼が夕夜の顔を覗く。
夕夜は八重歯を見せて力強く微笑むと、「来るか？」と一言だけ瑠鬼に囁いた。
まっすぐに夕夜を見つめる大きな眼。怯えと期待が入り混じる、とても不安定で純粋な朱色の瞳。
瑠鬼は、夕夜の誘いに答えない。
ただ、静かに夕夜の袖を握っていた手を放すと、怯えるように震えながら小さな両手を精一杯に伸ばして夕夜の誘いに応えた。
夕夜が穏やかな笑みを浮かべ、瑠鬼の小さな両脇に自分の両手を滑り込ませる。両手に掛かる、小さな重み。背中に回した手を自分の方に抱きこむと、瑠鬼がその小さな身体を夕夜の胸に預けてきた。
小さな小さな瑠鬼の身体。小さな小さな手が夕夜の背中に周り、ぎゅっとコートにしがみ付く。
「行くか」
やはり、瑠鬼は答えない。
ただ、小さく小さく頷いた。

子鬼の冬（2）

ひんやりと冷えた浴室に、真っ白の湯気が立ち上った。蛇口から盛大に吐き出されるお湯が、徐々に浴槽に堪り、同時に浴室全体を暖めて行く。夕夜が相談所の傍ら営むアパートは築何年とも分からない代物だが、風呂や水道など電気・ガスの設備はしっかりとしていた。

キュッキュッと水滴がついた栓を捻り、揺らめくお湯に手を差し込む。湯加減は三九度ほど。夕夜にしてはぬるめだが、子供がゆっくりと浸かるには良い温度だ。程よく溜まった浴槽に、夕夜が『紀伊』と書かれた温泉の素を入れる。白い粉末がじんわりとお湯に溶け、透明だった浴槽のお湯に乳白色の柔らかな色が付いた。

「よしっ、と」

満足げに息を着き、脱衣所に戻った夕夜は浴室の湿気で張り付いた服を脱ぐ。腰にタオルを一枚巻くと、部屋の隅で小さくなっていた瑠鬼を手招いた。

少し躊躇した瑠鬼だったが、思いのほか素直に脱衣所へとやってきた。路地から帰ってくる間、ずっと抱きかかえられていたことで、夕夜に対する警戒心はだいぶ薄くなっていた。

たどたどしい手つきで、瑠鬼が身体を覆っていた布切れを脱ぐ。布の下は、トラ柄のタンクトップとパンツという、なんとも寒寒しい恰好をしていた。瑠鬼が鬼でなかったなら、とっくに凍死していただろう。いや、鬼といえども今年の寒さは厳しい。夕夜は瑠鬼の冷たい手の感触を思い出した。

鬼のトレードマークともいうべきトラ柄の下着を、見られていても躊躇なく脱ぎ捨てる瑠鬼。瑠鬼の外見は、まだ小学校の低学年ほどだ。実際の年齢はどうであれ、まだまだ幼い身体。しかも、栄養が足りていないのか、その身体はやけに細かった。一人で生きていくには、精神的にも肉体的にもあまりに心もとない。

「さ、入るか」
浴室の扉を開け、夕夜がゆっくりと瑠鬼の背中を押す。柔らかな湯気に包み込まれる瑠鬼の餅のような肌が、じんわりと熱を持ち、珠の雫を付け始める。
「自分で洗えるか？」
夕夜の問いかけに、瑠鬼はふるふると首を横に振る。予想通りの答えに夕夜は「そうか」と笑いかけると、「んじゃ、座れ。洗ってやるよ」と言って、浴室に置かれた白い椅子を指差した。言われた通りに、ちょこんと瑠鬼が椅子に腰かける。
夕夜はボディタオルを手に取ると、ボディソープをちょっと多めに出し、タオルの生地が見えなくなるほど入念に泡立てた。その様子を鏡越しに見ていた瑠鬼の目に、子供らしい好奇心の光が灯る。十分に泡立ったタオルで優しく背中を擦ってやると、瑠鬼はくすぐったそうに目を細め、完全にその身を夕夜に預けた。
瑠鬼の身体から力が抜けたのを感じ取った夕夜が、妙に手慣れた手つきで小さな身体を泡でくるんでいく。ちなみに、夕夜の手際が慣れているのは、過去に何度か同じように子妖怪を保護したことがあるからだ。数百年生きた経験の積み重ね。けして変な趣味や、やましい心根があるわけでは断じてない。
「……ふぁ……」
心地よさげに目をトロンとさせる瑠鬼に、夕夜が浴槽から掬ったお湯を少しづつ掛ける。今にも凍えてしまいそうなほど冷たかった肌も、今は健康そうな桃色に色付いていた。「次、髪を洗うぞ」と声を掛けると、瑠鬼が大きく首を縦に振る。「目、しっかり閉じとけよ」と言う夕夜の注意に、瑠鬼は手や体もつられてぎゅっ緊張させながら、硬く瞼を閉じる。濡れた髪を掻き分けて、にょきっと生える肌色よりも少し黄色みが掛かった堅い角。
髪を洗うには少し邪魔な二本の角に注意しながら夕夜がシャンプーを泡立てると、瑠鬼の頭に白いアフロが出来上がった。ときおり薄く目を開きながら、瑠鬼が鏡に映った自分を覗き見る。「ほらほ

ら、流すぞ」という声に瑠鬼は再び身を堅くすると、真上から放出されたシャワーのお湯が、瑠鬼の頭から白い泡を溶かし流した。
路地にいた瑠鬼は正直少し臭っていたが、今は安物とはいえシャンプーのおかげで、気持ちの良い匂いを石鹸の匂いがする。
「よし、もういいぞ」
軽く瑠鬼の肩を叩く夕夜。
瑠鬼のちょっと長い前髪から、ぽたぽたと余った雫が流れる。腕で顔の水気を拭おうとした瑠鬼に、夕夜は乾いたタオルを手に取ると、そっとその顔に当ててやった。タオルの上から顔を抑え、頭から流れる雫を懸命に拭う瑠鬼。だが、顔ばかり拭いている瑠鬼は次々に頭から滴る水滴のせいで、なかなか顔を拭くのを止められない。
そんな瑠鬼に苦笑を漏らした夕夜は、タオルの余った部分を持つと、瑠鬼の髪に残った水気を取ってやった。ようやく目を開けられた瑠鬼が、仄かに頬を上気させながら、上目使いで夕夜の顔色を覗き込む。
「ほら、俺っちのことはいいから。さっさと風呂に浸かってな」
夕夜に促された瑠鬼はこくりと小さく顎を引くと、大きく足を上げて浴槽の縁を跨ぎ、乳白色のお湯の中にゆっくりと身体を沈めていった。お湯は瑠鬼が浸かることを考えて、いつもより少なめに張ってある。足を楽にしながら肩までしっかりと湯に浸かる瑠鬼の口から、「はふぅ〜」と気持ちよさげな声が自然と漏れた。
瑠鬼を洗った時との丁寧さが嘘のように、泡立たせたタオルを手に取り、夕夜は手早く自分の身体を洗い流す。頭を洗うのにも、ほとんど髪を気にすることなくシャンプーで乱雑に髪を掻き分ける。オシャレには鈍感な夕夜は、自分の髪にもほとんど手間を掛けない。風呂にあるのもシャンプーだけで、リンスの手合いは見当たらなかった。
（リンスは……明日にでも買ってきておくか）
眼の端で瑠鬼を見ながら、乱雑に髪を洗う夕夜が明日の買い物に想いを馳せる。経験からの勘だが、なんとなく瑠鬼とは長い付き合い

になるような気がした。
シャワーで一気に泡を洗い流し、軽く髪を掻き上げて水気を飛ばす。ついでに顔を拭った夕夜は、湯船でこっそりと自分のことを伺っていた瑠鬼に視線を合わせた。少し緊張の色を見せた瑠鬼が、口元まで乳白色の水面に潜る。しかし、その顔に警戒したような色は無く、鼻と眼をちょこんと水面から覗かせた瑠鬼は、そっと動いて夕夜が入れる場所を空けた。
「ありがとよ」
微笑みかけながら、夕夜が瑠鬼の作ったスペースにゆっくりと足を浸けて行く。小さくは無い浴槽だが、二人が並ぶには些かキツイ。それを悟ったのか、夕夜から離れていた瑠鬼は、すすすっと滑るように夕夜に近づき、ちょこんと夕夜の太股に乗っかった。夕夜が湯船に入ってお湯かさが増した分、瑠鬼は太股に乗るとちょうど良い高さになる。
ふぅーっと、疲れを吐息と共に吐き出す夕夜。薄く目を閉じ、浴槽の縁に頭を預けながら水滴を付けた天井を仰ぎ見る。夕夜の真似をして、天井を仰ぐ瑠鬼。まるで家族、お父さんと娘と言うよりは、年の離れた兄と妹が一緒に入っているようだった。
しっかりと身体を温め、一緒にお湯から上がる。少し寒いほどにひんやりとした脱衣所が、火照った身体には心地いい。瑠鬼が着ていた服を洗濯機に入れた夕夜は、代わりに自分のシャツを瑠鬼に着させることにした。ダボダボの黄色いシャツは、それ一枚で瑠鬼の身体をすっぽりと包みこむ。
風呂から上がった瑠鬼は、再び部屋の隅へ。どうやら、そこが落ち着くらしい。
夕夜は「見たいもんがあったら、適当に見てな」と言って瑠鬼にテレビのリモコンを手渡すと、自分は台所に立ち晩御飯の準備を始めた。少し時間が掛かるが、栄養があって、身体が温まるものが良いだろう。今日の夕食のメニューはシチューに決定。幸い、買い置きしておいたルーも、戸棚の下に残っている。

ごそごそと、必要な食材を冷蔵庫から取り出していると、突然、居間の方からバキッと何か硬いものが割れる音がした。「なんだ？」と、慌てて冷蔵庫から首を引っ張り出した夕夜が、居間を覗き「げっ！」と渋面を作る。

部屋の隅。オロオロと首を忙しなく振っている瑠鬼の足元には、粉々になったリモコンの破片が散らばっていた。

「あ～あ……。やっちまったか」

頭を掻きながら、夕夜が瑠鬼に近づく。子鬼とはいえ鬼。その力は、人間を遥かに上回る。コートの肩が破れたことを思い出し、夕夜は真剣に瑠鬼に力加減を教えなきゃいけないことを考えた。

近づいてくる夕夜に、瑠鬼はきゅっと目を閉じ、シャツの襟を持ち上げて頭からシャツの中に隠れてしまった。瑠鬼の身体がすっぽりとシャツの中に収まり、頭が覗く首口からは、二本の角が小刻みに震えている。

夕夜は腰に手を当てて困ったように息を着くと、「こーら」とあえて大きな声を出しながら瑠鬼の頭に手を乗せた。頭に触れた手に、瑠鬼の身体が大きく跳ねる。

「怪我……なかったか？」

子鬼がリモコンの破片ぐらいで怪我をするとは思えないが、一応訊ねる夕夜。シャツの首の部分から覗く角が、夕夜の声を聞いて前後に揺れる。

「なら、よかった。怒ってねえから、顔見せろ」

柔らかい声色で放しかける夕夜に、瑠鬼は目元まで顔をシャツから覗かせた。鼻から下をまだシャツの中に隠しながら、夕夜の顔色をうかがう瑠鬼。

すると夕夜は、何を思ったのか優しく頭に乗せていた手に力を込め、瑠鬼の頭を鷲掴んだ。慌てて瑠鬼が顔を引っ込めようとするが、がっしりと頭を掴まれ逃げられない。

若干涙目になる瑠鬼に、夕夜は口の端を意地悪気につり上げながら、反対の手の指先で瑠鬼のおでこをコツンと押した。

「そんなに怯えるなよ。怒ってねぇって言ったろ。でも、失敗して顔を隠してるのはダメだ。どうすればいいか、分かるな？」
真っ直ぐに瑠鬼の瞳を見据えながら訊ねる夕夜に、瑠鬼はシャツの下で口をもごもごとさせながら、蚊の鳴くような声で呟いた。
「……ゴメンナサイ」
「ああ、それでいい」
にかっと、満面の笑みを浮かべ、夕夜は瑠鬼から手を放す。そして、バラバラになったリモコンの破片を手早く掃除すると、適当にテレビのチャンネルを回し、子供向けのアニメをやっているところで止めておいた。ほけーっとしていた瑠鬼が、ゆっくりとシャツから顔を出す。
「失敗したり間違ったりしたら『ごめんなさい』。良くしてもらったら『ありがとう』。誰かに会ったら『こんにちは』。別れるときは『さようなら』。あとは、ご飯の時の『いただきます』と『ごちそうさま』が言えれば、この家にいていい。わかったか」
ただ怒るのではなくちゃんと教えてくれる夕夜に、瑠鬼がはにかみながら「うん」と頷く。
「よし、いい子だ」
褒めながら瑠鬼の頭を撫ぜ、夕夜は台所へと戻ったが、途中でふと思うところがあり携帯電話を手に取った。発信履歴のほとんどを埋め尽くした番号に電話を掛け、少し携帯電話を耳から放して待機。数秒後、「こんな時間に何の用だ！」と静かながらも威圧感のある声が聞こえてきた。
「あー、俺っちだよ。俺っち」
「詐欺なら別を当たれ」
「そういうお決まりの返しはいいから」
毎度毎度の不毛なやり取りに嘆息を着きながら、夕夜は手短に瑠鬼のことを電話の相手に説明し、瑠鬼が着られるような子供用の服を準備してくれるように頼んだ。
「頼む。さすがに、女の子の服を買いにはいけねぇよ。それに、金

もあんまりないしな」
「ふん、貧乏人が」
吐き捨てるように言う電話の相手に、「そりゃ、お前から見たらだれでも貧乏人だろうよ」と夕夜は心の中で返す。
「ふぅ、分かった。明日、相談所に持って行く」
「助かる」
最後に幾つかの小言を吐き捨てながら、荒々しく電話が切れる。疲れた息を吐き出した夕夜は、瑠鬼の方を覗いていた。瑠鬼は昔から続いている、忍者の卵が奮闘するアニメに夢中になっている。
疲れた顔で微かに笑みを零した夕夜は、早速晩御飯作りを開始した。今から作ると遅い夕食にはなるが、アニメはしばらく入っているから大丈夫だろう。
まずは鶏肉を一口大に削ぎ切り、塩コショウをして小麦をまぶしてサラダ油とバターで軽く焼く。弱火にしながら、次は玉ねぎやジャガイモ、ニンジンなどの野菜を切る。今回は栄養面を考え、シメジとブロッコリーも入れることにした。鍋で玉ねぎを先に炒めつつ、他の食材と隠し味に白ワインを投入。おまけに缶から空けたコーンを入れ、ルーを落として煮込みに入る。
余った時間でお湯を沸かし、沸騰したところでタマゴを入れる。少し短めに茹で、半熟タマゴに。軽い付け合わせとして、レタスのサラダを準備し、三十分ほどシチューの煮込み待ち。瑠鬼と一緒に、月から現れた子供とそれを追ってきた子鬼たちのアニメを見ていると、終わったところでちょうど良い時間となった。
シチューやカレー用の深めの器に、とろりとした具沢山のシチューを注ぎ込む。食欲をそそられる湯気と香り。居間に置かれたちゃぶ台で待つ瑠鬼がそわそわと身体を揺らす。
付け合わせのサラダを準備し、半熟タマゴをシチューの真ん中に置く。シチューと同じく白いご飯を器に盛ると、口の中が早くも唾液でいっぱいになった。スプーンとサラダ用のフォークを取り出し、準備は万端。

しっかりと手を合わせ、夕夜にならって瑠鬼も小さく頭を下げる。
「いただきます」
「……いただきます」
二つの「いただきます」を食卓に響かせ、美味しい夕食が始まった。たどたどしい手付きでスプーンを握った瑠鬼が、「はむ」と熱々のシチューを冷ますことなく頬張る。ビクッと小さく飛び跳ねる瑠鬼。「おい、大丈夫か？」と慌てて水を用意する夕夜をよそに、瑠鬼はゆっくりと瞬きをすると、幸せそうに顔を綻ばせ、一心不乱にシチューを口へ運び始めた。
鬼は熱さに強いと言うが、それは幼い瑠鬼でも例外ではないらしい。
なんとも微妙な表情を浮かべた夕夜が手に持っていた水をぐいっとあおり、ゆっくりと腰を下ろすと自分も食事を開始した。スプーンの先で半熟タマゴを割ると、とろりとした黄身が流れ、クリーム色のシチューに絡まる。程よく混ざった部分を口に運ぶと、上手く煮込めたシチューはコクが出ており、なかなかの出来だった。ブロッコリーやコーンの触感が程よいアクセントとなっている。
三分の二ほど食べたところで、夕夜はご飯をシチューに混ぜ合わせる。夕夜はこの食べ方が昔から好きだった。日本で初めてシチューにご飯を混ぜたのは、実はこの夕夜だったりする。
夕夜をまねて、瑠鬼もシチューにご飯を投入。食べる速度が一段と速くなる。
「ちゃんとサラダも食べろよ」
夕夜の言葉にコクコクと頷き、スプーンをフォークに持ち替え瑠鬼がサラダに手を伸ばす。ザクッと小気味の良い音を立ててレタスをフォークの先に指した瑠鬼は、葉っぱの先からレタスをちょびちょびと食べ始めた。その姿はまるっきり小動物だ。
シチューがよほど気に入ったのか、瑠鬼はその小柄な体で三杯もお代わりをした。ちゃんと最後は「ごちそうさま」と手を合わせふっくらとお腹を膨らませた瑠鬼は、食事を終えるとごろんと横にな

る。目尻を下げて頬を緩ませる表情を見る限り、大満足の晩御飯だったようだ。
使った食器を洗い終えた夕夜は、残ったシチューを別の器に移しラップを掛けて冷蔵庫へ。水周りをきちんと片づけた夕夜は、ちゃぶ台を壁に立てると押入れの襖を開けた。
「えっと、布団は別々でいいか？」
夕夜の部屋には、こういう突然の来訪者のために二組の布団が準備してある。瑠鬼は上半身を起こして無言のまま夕夜を見つめると、迷わず首を横に振った。
「そうか。じゃあ、一緒に寝るか」
笑いかける夕夜に、瑠鬼は目を細めて笑い返す。
布団が一式に枕がふたつ。そそくさと毛布の中に潜り込む瑠鬼に、夕夜は「コラコラ、歯を磨いてからだ」といって布団の中から引きずり出すと、そのまま洗面所へと連行。洗面台の下の棚から新品の歯ブラシと子供用のバナナ味の歯ブラシ粉を取り出し、軽くブラシを解してから瑠鬼に渡した。シャコシャコと、二人分の歯を磨く音が静かな部屋の中に溶ける。自分が先に口を濯いだ夕夜は、続けて脇に手を入れ瑠鬼を持ち上げ口を濯がせる。
二人一緒に温かな毛布の中に潜り込むと、瑠鬼は早くも目をトロンとさせた。温かな布団どころか、家の中で眠ることすら瑠鬼にとっては珍しいことだろう。室内の電気を淡い常夜灯に切り替えると、数分と掛からないうちに深い寝息が聞こえてきた。
「さてと、ちょうど明日なんだよな」
穏やかな寝息を聞きながら、浅く眼を閉じる夕夜。明日は節分。立春、立夏、立秋、立冬と四季を分ける節目の日。古来、自然歴、つまり季節の始まりで一年を分けていた日本にとって、立春の前の日である明日は一年の最後の年にあたる。
「一年の最後に訪れた鬼……か」
ひとり呟く夕夜の腕が、不意に柔らかなものに握られた。そっと布団を持ち上げてみると、瑠鬼が夕夜の腕に抱きつくように寝息を立

てている。このくらいの小さな子どもは体温が高い。寒い冬の夜だが、今日の布団はいつもより温かい。
ふっと、夕夜の口元の柔らかな笑みが浮かぶ。厄介事に首を突っ込むのも、厄介事に巻き込まれるのも、もう慣れたものだ。いまさら疎む気にもならない。
いや、むしろ。一人身の夕夜にとってこの温かさは心地よく、そしてありがたい。
夕夜はきっと、瑠鬼よりもずっと長生きするだろう。成長する瑠鬼とは異なり、今の姿のまま。いつまでも変わることなく。
自ら望んだことではなかったかもしれない。だが、それは夕夜自身が決めたことだ。自分で決めた以上、夕夜に後悔は無い。
それでも、今この時だけは。誰かと一緒に暮らすという望みを願ってもいいだろう。
「俺っちも、まだまだ人間だな」
生きている限り、出逢えば必ず別れが来る。ならば、いっそ出逢うことがなけらばいいと、山に籠った時期もあった。しかし、離れれば離れるほど闇は近づき、結局出逢いという因果に結びつく。
逃れられない因果ならば、身を委ねよう。尋ねてくる者がいるならば、すべてを受け入れよう。この身で叶えられる相談があるなら、その全てに応えよう。
人ならざる者、人でありながら人と相いれない者たちの願いを聞き続けできた夕夜。
昔、そんな夕夜の生き方をバカだと言う娘がいた。「現実を見ろ」と、「お前が頑張ることで何が変わる」と。初めてそう問われた時、夕夜は答えることが出来なかった。
それから幾年月が過ぎ、臨終際に駆け付けた夕夜に、あのとき娘だった老婆はもう一度同じ言葉を問い掛けた。変わらぬ問いに、夕夜は朗らかに笑って答えた。
――「でも、この生き方のおかげで、俺っちはお前に会えた」――
彼女の言うとおり、夕夜の生き方はバカな生き方かもしれない。

バカな生き方かもしれないが、そんなバカな生き方だからこそ、夕夜は老婆のところに駆け付けた。良家藩主の娘でありながら、没落したがために誰にも看取られることなく眠ろうとしていた老婆のもとへ、夕夜は一人駆け付けた。

そんな夕夜に、自分の人生を呪っていた老婆は、最期は穏やかな笑みを残して息を引き取った。

バカな生き方で何かが変わるかどうかは、未だに夕夜にも分からない。それでも、バカな生き方をすることで、誰かが笑顔を浮かべられるなら、その笑顔が自分の心の中に残り続けるなら、少しはこんなバカない生き方にも意味があるのだろう。現実という果てしない壁があろうとも、誰かにバカと罵倒されようとも、自分で決めた道ならば、そんな自分に酔いながら進むのも一興だろう。

しばし感傷に耽っていた夕夜の身体を、ゆっくりと睡魔が包み込む。

しばらくすると、幼い寝息に夕夜の静かな寝息が重なった。

子鬼の冬（3）

「ほら、ロリコン。頼まれた品だ」
夕夜の相談所のソファーの悠然と腰を沈ませたその女性は、持ってきた紙袋を机に置くなり、にこりともせずに言った。紅いシャフトがどこか好戦的な、色の濃いサングラス。起伏の富んだ身体にピッタリと合う上質なビジネススーツ。こんな場末の相談所にかなり不釣り合いな美女は、その形の良い鼻先を夕夜に向けた。
「誰がロリコンだよ。誰が」
苦み走った表情を浮かべた夕夜が、奥の給湯室からほのかに湯気を立ち上らせるホットミルクを持って現れた。美女にホットミルクを差し出し、その対面へ夕夜が腰を下ろす。
「準備が良い」
「千歳姫のお口に合えば幸いです」
慇懃無礼に頭を下げる夕夜に、千草と呼ばれた美女は小馬鹿にするように鼻を鳴らし、ホットミルクが注がれたマグカップをそっと手に取った。艶やかな唇に、マグカップの中の白い液体が飲み込まれる。どこか老成した気品を漂わせながら一口ホットミルクを味わった千草は、「ふう」と温かい吐息を零し、マグカップを元の位置に戻した。
ホットミルクに向かっていた千草の視線が再び夕夜に向けられる。サングラス越しに睨む彼女の眼は夕夜からは伺えない。いや、そもそも千草は盲目で、その眼は見えていないのだ。それでも夕夜が睨まれていると感じるのは、彼女が心眼をもって夕夜を睨んでいるからに他ならない。
今世の誰よりも長い付き合いになる千草は、今世の誰よりも夕夜が苦手とする人物だ。とにかく、口での勝負は絶対に敵わない。
居心地が悪そうに顔を顰めた夕夜は、その視線から逃げるように紙袋を引き寄せ、中身を確認する。紙袋の中には、女の子用の可愛

らしい服が数着入っていた。昨晩、夕夜が彼女に頼んだものだ。
「どうだ、お前の好みに合うものを揃えてやったぞ」
「誤解されるようなこと言うなっ！」
口の端に意地悪気な笑みを浮かべる千草に、夕夜はムキになってすぐさま反論。そんな夕夜に、千草はさらに深い笑みを作る。
夕夜は口の中で小さく悪態をつくと、再び紙袋の中を確認し、感心したように呟いた。
「よくもまあぁ、こんなに早く用意できるよな。事業の方は儲かってるのか」
「そうだな。この相談所ぐらいなら、丸々更地に出来るぐらいには、な」
あながち冗談とも言えない話しに、夕夜がさらに渋面を濃くする。事実、夕夜と千草の収入にはそれほどの差があった。
千草は盲目だが、その分ほかの感覚が鋭い。その点を有効に活用し、最近は女性用化粧品、特に香水で大きな成功を上げていた。千草がその嗅覚で選別し企画した香水は日本においてあらゆる女性に支持されており、海外でも評価が高い。おまけに、千草には掛け値なしの海千山千、あらゆる経験から交渉術に関しては並ぶものが無い。会社や組織の運用に関しても、相手の心理を感じ取る千草は人選術に長ける。千草と夕夜を比べる方が、可哀想と言うものだ。
しかし、さまざまな力に長ける分、千草は体力面に関してかなり弱い。遠出することはほとんどできず、会社の経営に関しても海外事業に関しは部下に任せることが多い。この点が、千草が妖怪関係の問題について夕夜を頼る所以である。
「で。そいつが話しの子鬼か？」
夕夜に向けていた視線を事務机へ滑らせる千草。彼女の位置から見えるのは、事務机の表面だけだが、千草の心眼はその裏に隠れる瑠鬼の姿をしっかりと視ていた。「ああ」と答える夕夜に、千草は事務机の後ろに振るえる瑠鬼に向け「出てこい」と、柔らかながらも有無を言わせない口調で言った。

机の向こうで、瑠鬼がビクッと飛び跳ねる気配がする。机の影から覗く鬼の角。本人は隠れながら様子を伺っているつもりだが、しっかりと頭の半分が覗いている。どちらにしろ、千草からはその姿が全て視えているのだが。

「来るんだ」

もう一度呼ぶ千草に、瑠鬼はしばらく逡巡し、何を思ったのか机の近くにあったゴミ箱を頭から被りながら千草に近寄ってきた。たぶん、本人は隠れているつもりなのだろう。鬼の名前が隠(おぬ)が語源になっているとはよく言ったものだ。

そんな懸命な瑠鬼に、千草は問答無用でゴミ箱を瑠鬼の頭から取り外し、邪魔だとばかりに放り投げた。ゴミ箱はそのまま夕夜の顔面へ直行。慌てて身を引いた夕夜の背後にあった資料棚が代わりにゴミ箱を受け止め、数冊の本が音を立てて零れ落ちる。わざとやっているとしか思えない。

突然露わになった千草に息を飲む瑠鬼と、部屋を散らかされ苛立ちを顕わにした視線を送る夕夜。二人の子となる視線を受け止めた千草は、夕夜の視線をきれいに無視。

無言のまま千草に見詰められた瑠鬼が、緊張に身体を固くし震える手で口元を隠す。

緊張を身体全体で表現しながら、瑠鬼が忙しなく視線を泳がせる。しかし、その視線が夕夜に止まった途端、瑠鬼は何やら決意したような表情を浮かべ、身体を強ばらせながらも真っ直ぐに千草に向かい合った。

「……こ、……こんにちは」

ただでさえ高い声をより一層緊張で高くし、瑠鬼が千草に頭を下げる。それが限界だったのか、頭を下げたまま瑠鬼は後ずさり。そのまま夕夜の背中に隠れてしまった。

「くくく、あーはっはっはっは」

突如巻き起こる千草の哄笑。「ど、どうした?」と、瑠鬼ばかりか夕夜もその姿に眼を丸くする。

しばらくお腹を抱えて笑い続けた千草は、僅かにサングラスを上げて目尻を拭うと、実に楽しそうに夕夜と瑠鬼に笑いかけた。
「な、なんだよ。気持ち悪い」
耐えきれなくなって、夕夜が身を引きながら素直な感想を漏らす。鼻白む二人を見ながら鷹揚にひとり頷いた千草は、満面の笑みを浮かべながら腕を組んだ。
「なーに。いいコンビだな、と思ってな」
千草の言葉に夕夜と瑠鬼は顔を見合わせ、一緒に首を傾げる。その様子にもう一度大きな笑い声を零す。
「夕夜、なぜ節分に豆を撒くか知っているか？」
「何だ藪から棒に？」
「そうか、知らんのか。バカに聞いた私がバカだったよ」
千草の安っぽい挑発に、夕夜は「そのくらい知ってるわっ！」と声を荒げた。極めて扱い易い男である。
「季節の変わり目に生まれる邪気を祓うためだろ。豆を撒くのは、豆を『魔滅（まめ）』と古くは読んでいたから、だったか」
唐突に話しを切りだした千草に、夕夜は苛立ちを滲ませながら不思議そうな表情を浮かべながら答える。
「ああ、その通りだ。ついでに言うならば、五穀の一つである大豆には穀物の霊が宿り、その霊力によって魔を祓うためという理由もある」
千草の言葉に、夕夜が感心したように「へ～」と相槌を打つ。夕夜もかなりの博識を自負しているが、やはり千草にはまだまだ敵わないようだ。
「もう一つおまけするなら、煎り豆を使うのは『魔の眼を射る』為だそうだ」
「随分と物騒な話だな」
『眼を射る』と言う言葉に身体を強張らせる瑠鬼。背中でビクビクとしている瑠鬼を落ち着かせるように撫ぜながら、夕夜は千草に非難の眼を向ける。

千草はそんな夕夜の視線を軽く流すと、マグカップからもう一口ホットミルクを飲み、さらに話を続けた。
「では、夕夜。こんな話は知っているか。『福は内、鬼は外』というのが節分の一般的な掛け声だが、地域によっては『福は内、鬼も内』と言うところもある」
『鬼も内』という言葉に、瑠鬼がひょこっと夕夜の背中から顔を覗かせる。相変わらず隠れているつもりだが丸見えだ。
優しさからか、はたまた単純に面白いからか。そんな瑠鬼を無視しながら、千草はさらに話しを続けた。
「今でこそ鬼は『魔』とされることが多いが、古来の日本で鬼は家を守り、頼りになるものとして鬼神様と呼ばれ、鬼は神格化されていた。東北地方の『ナマハゲ』がいい例だな。今のような邪鬼の印象が強くなったのは中国の思想が日本に入ってきてからだ。豆まきの風習も元は中国のものだからな」
饒舌に話す千草に、夕夜は黙って話しを聞き続ける。千草の話しは勉強になるし、何より途中で話しを遮るのは怖い。意外と話し好き（教えたがりとも言うが）の機嫌を損ねると、それこそ鬼のようになる。
「誰が鬼だ？」
楽しそうに話していた千草の口調が、突如として険を帯びる。心眼で夕夜の心を察知したのだろう。夕夜は適当に笑って誤魔化すと、「何でそんな話を？」と場を繋ぐように千草に聞き返した。
睨むように身を乗り出していた千草は、その背中をソファーに預けると、どこか皮肉気に微笑んで言った。
「いや、なに。だから、面白いな、と思ってな？」
「面白い？」
怪訝な顔をする夕夜に、千草はその見えていない瞳で瑠鬼を見据えながら、懐かしむような口調で続けた。
「だって、そうだろう。昔は神と祭っていたものを、今では邪鬼として追い祓う。それこそ、手の平を返すように。まさしく人間だな。

心の持ちよう一つで、善は悪に、味方は敵になる。振り回される方は、いい迷惑だ」
言葉を切る千草。その言葉に続けたのは。夕夜だった。
「だがその柔軟さで、悪を善に、敵を味方にできるところも、人間の面白いところじゃないのか。昔、お前が俺にしたように」
同じく懐かしむような口調で話す夕夜に、千草は「確かにな」と頷く。しばし感慨深そうに窓の外へ視線を向けていた千草は、口の端だけで僅かに笑みを作ると、「さてと」と言って立ち上がった。
「私はもう行くぞ。下に車を待たせてあるからな。そうだ、夕夜――今晩は上手くやれよ」
「だから、誤解されるような言い回しをするなっ！」
すぐさま反応する夕夜に、千草が颯爽と身を翻す。そのとき、「さようなら」と夕夜の背中で小さな声が上がった。首だけで振り返る千草は、凛々しく口の端をつり上げ「ああ、またな」と軽く手を上げて答え、長い髪を揺らしながら扉の向こうへと消えて行った。
しばらく千草の消えて行った扉を眺めていた瑠鬼が、夕夜の背中から出てきてさっきまで千草が座っていたソファーに腰掛ける。じーっと、残されたホットミルクを見つめる瑠鬼。
「飲んでいいぞ」
肩の力を抜いて促す夕夜に、瑠鬼は満面の笑みを浮かべ両手でマグカップを持ち上げる。ちびちびとマグカップを傾ける瑠鬼。その姿に頬緩めながら夕夜が千草の持ってきた紙袋を引き寄せると、底の方で何か乾いたものが擦れる音がした。
洋服を掻きわけ袋を覗き込むと、幼稚園児や小学校の低学年に配られそうな可愛いイラストが描かれた豆袋が姿を現した。透明な部分から覗く豆には、砂糖の真っ白な衣が着せられていた。これが、本当のおまけということらしい。
「たく、かなわねぇな」
実に微妙な表情を浮かべた夕夜は、今日は早めに相談所を閉めると、瑠鬼を引きつれて商店街へと繰り出した。

*

子鬼の冬（4）

商店街は、ある意味流行の最先端だ。季節の風物詩に合わせ様々な飾りつけがされ、普段は意識しない店に眼を吸い寄せられる。

左手に千草からもらった紙袋、右手で瑠鬼の手を掴みながら、夕夜は瑠鬼とふたり並んで商店街を歩いていた。ちなみに、瑠鬼の服は千草が持ってきた者に着替えさせてある。子供用のジーパンに、人気のキャラクターが描かれたネズミ色の長袖。その上には、柔らかな黄色を基調としたパーカー。悔しいことのどれも子供服の有名ブランドで、夕夜よりもかなりよい身なりをしていた。

「さてと、恵方巻きの材料で足りないウナギとでんぶは買ってくとして、何か他に食べたいものあるか？」

晩御飯のリクエストを求める夕夜に、瑠鬼は無言のまま夕夜を仰ぎ見ると、料理を言う代わりに足に抱きついてきた。「なんでもいいのか？」と続けて聞くと、足に顔をくっつけたまま瑠鬼は首を縦に振る。すれ違う買い物客の温かな笑い声。

「わかったよ。ほら、それじゃあ歩けないだろ」

困ったように頬を掻く夕夜がそう言うと、瑠鬼は再び頷き、足から離れて手を取った。

一緒に歩き出しながら、夕夜は今晩の献立を考える。瑠鬼は鬼だけあってなかなかの大食家だが、そこは恵方巻きでカバー。恵方巻きならそれだけでかなりお腹が膨れるから、副菜は作り過ぎない方がいいかもしれない。となると、何か温かいもの、汁っ気のあるものが欲しくなる。味噌汁……よりはお吸い物の方が合うな。いい魚があれば、すり身にしてつみれを作れる。つみれ作りは瑠鬼にも手伝ってもらうのがいいだろう。

「となると、魚屋だな」

考えをまとめ、買いもの先を魚屋へと定める夕夜。その時、不意に瑠鬼の足が止まり、知らずに歩き続けていた夕夜の身体が仰け反

った。
「とっとっと、どうした？」
訊ねる夕夜の声が聞こえていないのか、瑠鬼は無言のまま一点を凝視。どうしたのかとそちらの方へ眼を向けると、そこには鬼の格好を被った人たちが、子供たちに豆と風船を配っていた。しかし、男性の鬼の面は分かるが、女性の鬼の角だけ付けている恰好はどうなのだろうか？　ハッキリ言って、往年のアニメのキャラクターコスプレにしか見えない。
瑠鬼は彼らを仲間……と思ったわけではさすがに無いようだった。瑠鬼の視線は、空中でフワフワと揺れる風船に釘づけになっている。瑠鬼と夕夜の力の差を考えれば、無理に動かすのはかなり大変な作業になるだろう。
やっぱり子供なんだな、と当り前のことを思う夕夜は「貰ってくるか？」と声を掛ける。ようやく反応を示した瑠鬼は、初めは躊躇った表情を見せたが、一度頷くと夕夜の腕をぐいぐいと引き、鬼の姿をした彼らのもとへ近寄った。
「あ、こんにちはだっちゃ」
近づいてくる夕夜の瑠鬼に気が付いた女性が、ハキハキとした声で活発な笑みを作る。キャラクターでやっているのかと思ったら、どうやら素のようだ。
先んじて声を掛けられて驚いた瑠鬼が、足を止めて身を竦ませてしまった。その様子に「あらら」と優しげな笑みを浮かべた女性は、「ちょっとごめんね」と言ってお面を被っていた相方の男性に自分の周りの子供たちを任せる。「え、待てよ。アキ！」と戸惑う男性に両手を合わせたアキと言う彼女は、真っ赤な風船を持って瑠鬼の方へ歩み寄ってきた。
近寄ってくるアキに、瑠鬼がオロオロとしながら夕夜の後ろに隠れる。そんな瑠鬼に、彼女はことさら楽しげに笑うと、瑠鬼と同じ目線になるように膝を折った。
「驚かせちゃったかな？　ごめんね？　はい、お詫びの印にどうぞ」

にこやかに風船を差し出すアキに、瑠鬼は警戒心を弱め夕夜の後ろから出てくる。彼女の手から風船を受け取ると、仄かに顔を赤らめながら「ありがとう」と真っ直ぐに彼女の眼を見てお礼を言った。
「わー。ちゃんとお礼が言えてエライね」
褒めながら、アキが瑠鬼の頭に手を伸ばす。「あ、待っ……」と夕夜は慌てて制止を掛けたが間に合わず、すでに彼女の手は瑠鬼の頭を撫ぜていた。
手の平に硬いものが辺り、「あれ？」とアキが首を捻る。ぱっと見ただけでは分からないが、さすがに触られれば角があることはすぐに分かる。事実、怪訝な表情を見せたアキの指先は角の先っぽに触れ、その眼にも角が見えていた。
しまった、と顔を顰める夕夜。騒ぎになる前に退散しよう身構える夕夜に、アキは視線を瑠鬼から夕夜に向けると、含み笑いをして言った。
「これって、お兄さんの趣味？」
「……え？」
ぽかんと口を開く夕夜に、立ち上がったアキがそっと耳打ちする。
「可愛いけど、あんまり変な格好をさせてるとロリコンって呼ばれちゃうよ」
勘違いも甚だしいが、真実を言うわけにもいかない。本日二度目のロリコン発言を受けた夕夜は、「あ、ああ。気を付ける」と、よりロリコン誤解が深まるような答え方をしながら、騒ぎが起こらなかったことに安堵をついた。
「そういうあんたも、なかなか似合ってんじゃないか」
お返しとばかりに、夕夜がアキの頭の角を指差す。
「これは自前なんだよね～」
得意げに笑って、夕夜の皮肉に皮肉を返す。憮然とする夕夜を見て、アキは「あ、怒った？」と悪戯っ子のように笑って、「お兄さん怖いねー」と言いながら瑠鬼の頭を撫ぜた。
クスクスと笑うアキに、他の子供を全部任され、配った豆を早速投

げられている相方から助けの声が掛かる。「あ、ごめんごめん」とあくまで明るい声で答えるアキは、「じゃあね、子鬼さん」ともう一度瑠鬼の頭を撫ぜると、仕事へと戻って行った。
「……あ」
「ん、どうした。瑠鬼？」
「『さようなら』って言えなかった……」
約束を破ったというより、単純に言えなかったことを寂しむ瑠鬼が夕夜の顔を見上げる。「じゃあ、次に会った時はちゃんと言おうな」と夕夜が笑いかけると、瑠鬼は「うん」と力強く頷いた。
明るい鬼たちと別れ、夕夜たちは少し歩いたところにある魚屋へ。つみれの種になる旬ものの味に加え、店頭にはありがたいことにウナギの姿もあった。よく色艶を吟味して、夕夜は必要な食材を店主に頼む。
氷袋に入れてもらっていざ会計、というところで不意に夕夜の袖が引っ張られた。
「瑠鬼？」
財布を探す手を止めて、夕夜が瑠鬼に眼を向ける。瑠鬼は夕夜の視線を受け止めると、難しそうな顔をして夕夜たちが歩いてきた方向を指差した。
どうしたのかと思い夕夜がその指先を追うと、先ほど瑠鬼に風船をくれたアキという女性が、なにやら学生服の三人組に絡まれていた。相方の男は三人のうちの一人に遮られ、残り二人がアキに詰め寄っている。
「たく、どこのバカだよ」
呆れたように呟く夕夜。しかし、よくよく見ると彼らが着ている制服は都内でも有数の私立進学校のもの。バカと天才は紙一重というが、この場合はバカの方に行ってしまったようだ。
周囲の買い物客はその様子を遠巻きに見守っている。声をかけたいが絡まれたら面倒臭い。相方の男もっと頑張れ、と声援を送るくらいだ。

アキは大人の余裕で学生たちをあしらっているが、どうにもしつこい。辟易とした表情を遠目に伺うかぎり、バカの相手は相当こたえるようだ。
これも一種の妖怪からの相談である。どちらにしろ、夕夜なら相談が無くても彼女のことを助けるだろうが。
ところが、夕夜よりも早くアキのもとへ駆けだした小さな影があった。
瑠鬼だ。
「な、こら。ちょっと待て」
「ちょい、兄さん。お金お金！」
瑠鬼の後を追おうとする夕夜の腕を、アキの方に気が付いていない魚屋の店主が慌てて捕まえる。「え、あ。払う、払うから」と夕夜が慌てている間に、瑠鬼はすでにアキのところへ走り寄り、男子学生との間に身を滑り込ませていた。
「ああ？　なんだこのチビ？」
「あ。君はさっきの」
突然現れた瑠鬼に、アキと不良が同時に驚く。不良を前に、アキを守るように瑠鬼が両手を広る。
「あはははは。なんだよ、お前が俺たちの相手をしてくれるのか？」
立ちはだかる瑠鬼を前に、不良の一人がせせら笑う。突如現れた女の子に、心配そうな視線を投げかけるヤジ馬たちが。魚屋の店主に捕まった夕夜も心配そうな表情を浮かべる。ただし、夕夜が心配しているのは瑠鬼ではなく不良たちの方だ。
「ちょっと、あんたたち。子供相手になんてこと言ってんの？」
それまで不良たちの言葉を軽く躱していたアキが眼の端をつり上げた。「怒った顔もまたかわういね」と、どこまでもバカバカしい言葉を吐く不良が、強引にアキの手を掴みかかる。
「やめなさい」と手を払うアキに、「なにすんだよ」と逆ギレする不良。
女性にあしらわれたことで逆上した不良がアキに向けて腕を振り上

げた、次の瞬間。
「ダァッッ！」
幼い叫び声と共に、強烈な威圧感が辺り一帯に吹き荒れた。その場にいた全ての人間が呼吸を止め、身を竦ませる。幼いとはいえ鬼の覇気をまともに受け止めたチャライ不良は、泡を吹きながら眼を回しその場に尻餅をついた。
実にいい気味であるが、いささかマズイ。ノびた仲間を引き摺って行く不良たち。ざわめきが商店街に波紋となって広がって行く。眼を丸くするアキ。振り返る瑠鬼。
「だいじょう……」
アキを心配して声を掛ける瑠鬼に、アキの隣にいた男が彼女の手を引いて叫んだ。
「アキ、危ない。離れろっ！」
大声を上げて瑠鬼を睨む男性に、アキへ手差し伸べていた瑠鬼がビクンと震える。ただでさえ力を使って感情が高ぶっている時に、この追い打ちはマズイ。けれど、瑠鬼は不良たちに覇気を浴びせた時のように暴走することはなかった。
ただ、その大きな瞳に涙を湛え、唇を引き締めて走り出した。
「あ、くっそ。おっさん、財布置いてくから荷物頼む」
「お、おい」
財布を魚屋の店主に投げ渡し、夕夜が慌てて瑠鬼の後を追う。夕夜が何かを失敗したわけではないが、何もフォローできなかったのもまた事実だ。人通りの増えた商店街を、瑠鬼はその小さな身体を利用して駆け抜ける。逆に、人の壁に遮られる夕夜は、徐々にその距離を離されていった。
「くそっ。俺っちはバカか？」
自分自身に悪態をつき、夕夜が辺りを見回しながら足を止める。完全に瑠鬼を見失ってしまった。
「どこだーっ。瑠鬼ーっ！」
人目を構わずに大声で叫ぶ夕夜。周りにいた買い物客が、迷惑そ

うな顔をして夕夜に眼を向ける。瑠鬼の気配を探るが、小さすぎて分からない。瑠鬼が身に付けていたものでもあれば術を使って探せるが、瑠鬼が昼まで着ていた服は魚屋に預けてきてしまった。
「今から戻るのかよ」
顔を顰めながら、夕夜はもう一度辺りを注意深く見渡す。すると、茜色に染まる空に、真っ赤な風船が飛んで行くのが見えた。
「あっちかっ！」
風船を目印に、夕夜が再び走り出す。商店街の中央通りから逸れ、小さな公園が見える住宅地の方向へ。商店街のアーケードが終わり、住宅地に入る一歩手前。小さな駄菓子屋の前で、瑠鬼は立ち竦んで肩を震わせていた。
「……瑠鬼」
今にも崩れてしまいそうな背に、夕夜が零すように声を掛ける。涙の流れる真っ赤な眼を擦りながら振り返った瑠鬼は、俯いたまま夕夜に駆け寄り足にしがみ付くと、声も無く身体を震わせた。
瑠鬼は悪くない。悪者というなら、間違いなくあの不良たちだろう。けれども人は、目に見える悪よりも、自分の理解を超えたモノを恐れる。たとえそれが、本当は自分よりも儚い存在であろうとも。
やりきれない表情を見せながら、夕夜がそっと膝を折り、瑠鬼を胸の中に招き入れる。顔を夕夜の胸に埋める瑠鬼。幼い涙は止まらない。
その時、二人のところに息を切らせた女性が走ってきた。
「はぁ、はぁ。やっと見つけた」
「あ。あんたは、さっきの」
瑠鬼を抱きしめながら夕夜が振り返ると、アキが「もう、どこまで走るのさ」と汗が浮かぶ胸元の服をぱたぱたと引っ張りながら立っていた。
「ふぅ、よかった～。やっぱりあの風船、君のだったんだ」
どうやら、アキも瑠鬼が飛ばした風船を目印にここまで来たらしい。

そんなアキを前にして瑠鬼はますます夕夜の身体の中に隠れてしまった。また拒絶されることが怖いのだ。
瑠鬼の様子に鬼が付いたアキは、何を思ったのかいきなり駄菓子屋へ飛び込むと、まるで子供のように「おばちゃーん。これちょうだーい」と大声を張り上げて何やら買ってきた。
いまだに顔を隠したままの瑠鬼。アキは「大丈夫だよ」といって微笑むと、僅かに覗いていた瑠鬼の指先を取り、駄菓子屋で買ってきたおもちゃの指輪を嵌めた。
手を引っ込め、夕夜の胸の中で瑠鬼がごそごそと動く。指に嵌められた指輪に気付いた瑠鬼は、眼を大きく瞬かせながら夕夜の胸から顔を上げ、アキの方を向いた。
ようやく現れた瑠鬼に、アキが白い歯を見せながら微笑む。
「さっき助けてくれたお礼だよ。ありがとね」
アキの笑顔を受け、やっと瑠鬼の顔から涙が消え、恥ずかしそうな笑顔が現れた。
瑠鬼の笑顔を見て、夕夜もようやく安堵を着く。
「あのバカにはちゃんとキツーく言っとくから、許してくれる？」
困ったように眉で八の字を描くアキに、瑠鬼はすぐさま首を縦に振った。どうやら、もう完全に機嫌を直したらしい。
「よかった。あ、そうだ。君の名前教えてくれるかな？」
ぐいっと顔を寄せてくるアキに、瑠鬼は顔を真っ赤にしながら俯き、耳を澄ましてようやく聞こえる声で答えた。
「……瑠鬼」
「へ〜、ルキちゃんか。どんな字？」
字を訊ねるアキに、瑠鬼はしゃがむ込むと、石を掴んでちょっと得意げに自分の文字を書いた。難しい漢字だが、瑠鬼はちゃんと自分の名を書き終える。
「綺麗な名前だね。あ、ちなみにアタシの名前はこう書くんだよ」
瑠鬼の名を褒めながら、アキは瑠鬼を真似して石を拾うとアスファルトの地面に自分の名前を書き始めた。

『愛鬼』と。
「えっ？」
思わず声を上げる夕夜に、愛鬼は悪戯っぽく笑いながら顔を上げる。
「角は自前だって言ったよね」
「やられたな」
苦笑いを浮かべて顔を覆う夕夜。隠が語源と言われるように、鬼は本当に妖気を隠すのが上手いようだ。
「君も、変な人間に引っかけられたらだめだよ～」
にやにやと笑いながら、愛鬼がよしよしと瑠鬼の頭を撫ぜる。後ろで頬を引き攣らせる夕夜の気配を感じながら、愛鬼はさらに続けた。
「まあ、人間も捨てたもんじゃないんだけどね～」
クスッと温かな笑みを浮かべる愛鬼のその声に誘われるように、商店街の方から「あ～、こんなところに居やがったか」と、両手いっぱいに荷物を持った男性が現れた。よく見るとそれは先ほど夕夜が買い物をしていた魚屋の主人で、持っている荷物は瑠鬼の服が入った紙袋と魚がどっさり入ったビニール袋だった。
「はぁ、はぁあ。死ぬぜ、おい」
両膝に手を付いて、肩で大きく息をする魚屋の主人。どうしたのかと夕夜が訊ねようとしたら、一足早く回復した主人がと自分のペシャリと頭を叩いた。
「いや～、わるいことしちまったな～。その姉ちゃんとチビちゃんにちょっと気がつかなくてよ」
「あ、いや。こっちの方こそ、荷物持ってきてもらっちまって」
頭の後ろに手を当てながら申し訳なさそうにする夕夜に、主人は「いやいやいや」と首を横に振った。
「やっぱり悪いのはこっちだよ。しっかし、嬢ちゃんはすげーな。あんな男たちに立ち向かうたぁ、てぇしたもんだ。ほらよ、これはお詫びと、いいもん見せてくれたお礼を兼ねた俺のおごりだ。持っ

てきな」
そう言って差し出されたビニール袋は、活き活きとした魚の重みでパンパンに膨らんでいた。
「いいのか？」
万年金欠病の夕夜には嬉しい話だが、素直に受け取れるかといえば別の話だ。
確認する夕夜に、主人は気風の良い笑みを浮かべて、「おうっ」と頷いた。
「いいんだよ。持ってけ持ってけ。今後ともご贔屓に、ってな。ああでも、嬢ちゃん。今度ああいうバカがいたら俺に言えよ。もう二度と商店街を歩けないようにしてやるから」
太い腕を見せる主人に、それまでぽかんとしていた瑠鬼はコクコクと首を縦に振った。
「おっしゃ、約束だぞ」
「約束はいいけど、魚屋さん。店開けっぱなしでいいの」
「あ、やっべ。そろそろ帰んねぇと、俺がかあちゃんに殺されちまう」
大仰に慌てながら振り返る主人に、「じゃあ、アタシも行くから。君も頑張ってね、瑠鬼ちゃん」と愛鬼が続く。
商店街へ帰って行く二人に、瑠鬼が突然、「あ、あの」と声を張り上げる。
「ん？」
「どうしたの？」
少し驚きながら振り返る二人に、瑠鬼は大事そうに指輪を嵌めた手を抱えながら、大きな声で言った。
「ありがとう。それと、さようなら」
小さな身体からこれでもかと大きな声を吐き出す瑠鬼に、愛鬼と主人が揃って笑顔を浮かべる。
「おう、さよならだ」
「うん、さようなら。……でもね、瑠鬼ちゃん。こう言う時、友達

には『さようなら』じゃなくてこう言うんだよ」
そう言うと愛鬼は、大きく手を振り上げて叫んだ。
「『バイバイ。またね』」
そんな愛鬼を見て、主人も慌てて手を上げて年甲斐もなく叫ぶ。
「『バイバイ、また来いよ』」
人間と鬼。ふたつの違う種族に並んで手を振られた瑠鬼は、一瞬夕夜の顔を見上げると、夕焼けの色が移ったかのように顔を赤らめながら、大きく手を振り上げた。
「バイバイ。またね」
「また、よろしく頼む」
瑠鬼と一緒に手を振る夕夜。雑踏の奥に消えて行くふたつの影。本当にどこでどんな出逢いがあるか分からない。何が悪で、何がそうでないかということはさらに分からない。
だからこそ、人生は面白いのだろう。
「さあ、帰るか」
「うんっ」
再び手を取り合って歩き出す夕夜と瑠鬼。その足は、商店街に訪れた時よりもずっと軽やかだった。

第四話　河童の春（1）

鼻をくすぐる硫黄の香り、僅かに残る雪を押し退け芽吹く草花。都会の喧騒からかけ離れた春の野山は、清々しい空気に包まれていた。濁り湯の温泉は少し熱めだが、その分に山から吹きつける冷風が気持ちいい。

肩の力を抜く夕夜の口から深い吐息が漏れる。離れ湯で自分たち以外に人はいないし、何よりタダというのがより一層温泉の味を引き揚げていた。

「ふふ、湯加減はいかがですか？」

艶やかな声が耳を撫ぜる。声の方へ視線を向けると、旅館割烹に身を包んだ女性が脱衣所から現れ、夕夜に微笑みかけてきた。

「ああ、最高だ」

雪のように白い肌をした儚くも艶やかな顔立ちの美女に、夕夜は手で掬ったお湯を顔にぶつけながら返事をする。

「よろしければ……私もご一緒しますが」

割烹を肩から滑らせ艶美な鎖ながら骨を覗かせ妖艶に誘う美女に、夕夜は苦笑いを浮かべながら、大人の余裕を見せつけるように軽く手を振って言った。

「そういう誘いは、もっと大人になってからするんだな。雪花」

夕夜の言葉に、彼を誘惑していた雪女の涙で作った人型、梨雪はもとの氷の彫像と化しピタリとその動きを凍らせる。続けて背後の脱衣所の戸がガラガラと荒々しく開き、梨雪の主、雪花が頬を膨らませながら走ってきた。

「雪花はもう大人だってばっ！」

「おいおい、走ると危ないぞ」

夕夜の制止を全く聞かず、梨雪は石畳を蹴ると、その小さな身体を温泉へと投げ出した。ちなみに、すでに服を脱いですっぽんぽんの状態である。大きな水飛沫があがり、温泉を飲み込んでしまった

夕夜が苦しげに咳き込んだ。
「げっほげほ。コラ、危ないだろ」
「子供扱いした夕夜が悪い」
「温泉に飛び込むような大人の女はいねぇよ。つか、何怒ってんだ？」
怪訝そうに訊ねる夕夜に雪花は顔を真っ赤にして眼をつり上げると、物珍しそうに温泉の中でちょろちょろと泳いでいる小さな影を指して叫んだ。
「夕夜の浮気者っ！　雪花に付いてこなかったのに、なんであんなのと一緒に居るのっ？」
雪花に指をさされ、それまで忙しなく温泉を楽しんでいた瑠鬼がきょとんとした表情を見せる。離れたところで不思議そうに首を傾げる瑠鬼と、説明を求めて馬乗りになってくる雪花。幼い二人に挟まれた夕夜は、困ったように頭を掻きながら、ひとまず雪花を落ち着かせようと、その柔らかなほっぺたを撫ぜた。
「そう目くじら立てるなよ。雪花に付いてられなかったのは、俺っちがこの山にずっといるわけにはいかなかったからだろ。それに、瑠鬼はまだ幼いんだ。誰かが面倒見てやらないとな」
「雪花だって子供だもん」
「さっき子供扱いするなって言ってなかったか？」
「それとこれとは話が別っ！」
眉間に皺を寄せた雪花が、一瞬にして温泉のお湯から氷の玉を作り出して夕夜に投げつける。ひょいっと首を傾げて難なく氷の玉を避ける夕夜。
「何で避けるのよ」
「何で喰らわなきゃいけねえんだよ」
意地悪気な笑みを浮かべる夕夜だったが、ふと考えを思い直すと、優しげな笑みを作って雪花の髪を撫ぜた。耳の後ろをくすぐってやると、眼を細めてネコのようにじゃれついてくる。
さきほど聞いた女将さんの話によると、雪花はとてもまじめに働い

ているらしい。それこそ、人間の他の中居さんたちと変わらない働きを見せ、見た目の愛くるしさから最近では看板娘となっているのだそうだ。このくらいのご褒美はあげても良いだろう。それに、ただで宿に泊めてもらった恩もある。

しばらくそうして雪花の気分を解した後、夕夜は「それで、今日は何の相談なんだ」と言って表情を改めた。

「えっと。実は雪花の友達がちょっと困ってて」

「友達？」

夕夜が首を捻る。『友達』と言う割に、雪花はどこか面白くなさそうな顔していた。何か理由があるのかとさぐりを入れようとしたが、雪花が素直に応えるともなんとなく思えない。

まぁ、相談の内容がわかりにくいのもよくあることか。と深く追求しないことにした夕夜は、「それで、その友達ってどこにいるんだ？」と話しの先を促した。

「……あっち」

仏頂面を浮かべながら、雪花が指先を持ち上げる。その示す先をみて、夕夜はますます首を捻った。雪花の指先にいるのは、広い温泉で再び泳ぎの練習を始めていた瑠鬼だ。もう友達になったのか、と一瞬考えたが、雪花はどこか瑠鬼に敵愾心を燃やしていたからそれも無いだろう。

雪花の真意を計りかねていると、不意に夕夜に疑問が浮かんだ。

「あれ？　瑠鬼のヤツって泳げたっけ？」

自分に逢うまでの瑠鬼の生活は知らないが、都会の真ん中に放りだされたはぐれ鬼が泳ぎを練習する場面にめぐり合えたとも思えない。親が教えたというのも考えにくい。となると、瑠鬼は誰に泳ぎを教わっているのか。

そこまで考えた時、夕夜はようやく温泉に漂う異様な影に気が付いた。濁り湯をかき分け、瑠鬼の周りで泳ぐ影。瑠鬼に泳ぎを教えた何かがいる。しかし、アレはいつから潜り続けていたのだろうか。

「で、夕夜。頼み受けてくれるの？」

念を押す雪花に、夕夜は「ああなるほど、そういうことか」と頬を掻きながら、頼りがいのある笑みを浮かべて答えた。
「俺っちの相談所は年中無休だよ」
夕夜の答えに、雪花は安心したように頬を緩める。了承を得たことに満足すると、雪花は温泉で揺れる影に向かって叫んだ。
「水音（みずね）。いいってさ」
雪花の声に、瑠鬼の周りを遊泳していた影がピタリと止まる。ブクブクと温泉から気泡が立ち上り、大きな水飛沫を上げて今回の依頼主が姿を現した。
「こ、ここ、こんにちは。河童の水音です。え、えっと、キュウリ……食べますか」
温泉のお湯を割って現れた水音が、遠慮がちにふやけたキュウリを夕夜に差し出す。溜息を着きながら顔を覆う雪花に、「これまたエライのが来たな」とどこか楽しげに笑う夕夜。ちなみに、差し出されたキュウリは丁重にお返しした。
「そうですか。こんなに美味しいのに」
返されたキュウリを、水音は躊躇なく口に入れる。ふやけたキュウリは何とも頼りない音を漏らすが、食べている本人はご機嫌だった。
全体的に薄く緑がかった肌。艶やかな黒髪と、頭のてっぺんに乗っかった皿。とがった、というよりはアヒルのような唇。そして背中に背負った甲羅と、指の間の水掻き。どこからどう見ても、立派な河童少女だ。
「まあ、せっかくの温泉だ。ゆっくり浸かりながら話をしようや」
惜しげもなく自分の裸体を見せつける水音に、夕夜は遠まわしに温泉に浸かるように促す。童顔の割に、水音はかなり発育した身体を持っていた。出る所が出ているという騒ぎではなく、後から空気でも入れたしたのかと疑いたくなるように張った胸。腰元は程よく肉を残しながら括れており、艶やかなお尻は熟れた桃のようだ。おそらく、これが雪花の面白くない理由だろう。場馴れした夕夜で無

ければ、眼のやり場に苦心している。
「あ、そうですね。そうします」
夕夜の言葉に素直に従う水音は、ざぶんと水飛沫を上げながら胸の少し上まで温泉に浸かり、「ふぁ～、いいお湯です」と気持ちよさげに顔を弛緩させた。いつの間にか、その膝には瑠鬼がちょこんと腰かけ、大きな胸に頭を預けている。どうやら、泳ぎ方を教えてもらっている間にかなり懐いたらしい。
「んで、俺っちに何の相談なんだ？」
「私に特訓して欲しいんです」
「特訓？」
真っ直ぐな瞳で見つめてくる水音。何とも要領の得ない言い方に夕夜が雪花へ眼を向けると、雪花は呆れたような表情を浮かべ温泉に顔を浸けていた。どうやら、雪花自身も水音の扱いには苦労しているらしい。
「具体的にどういう特訓なんだ？」
「具体的に、ですか？　えーっと、向かい合った時の効果的な視線とか、抱き合った時の力の入れ方とか、相手の気持ちを知る方法とか、腰の使い方とか、あとは押し出すタイミングとかも」
「……」
雪花はすでに頭まで温泉に沈んで、任せたとばかりにブクブクと息を吐き出している。
しかたなく夕夜は軽く眼を閉じて水音の言葉を反芻、吟味。向かい合う、視線、抱き合う、相手の気持ち、腰、タイミング、押し出し……。ややあって、夕夜は「あぁ」と一つの結論に至った。
「つまり、相撲の特訓に付き合えってことか」
「はいです」
無邪気に、活発に、朗らかに、水音は満面の笑みで頷いた。
「……わざとやってるわけじゃないよな」
「なにがですか？」
心底不思議そうに小首を傾げる水音。天然というものらしい。

これまた変な依頼主が現れたと、夕夜が面白げに笑みを作る。だが、たまにはこんな気の抜けた依頼があるのも相談屋の仕事の面白いところだ。

「ああ、わかった。この相談を請け負おう」

夕夜は水音の依頼を了承した。

河童の春（2）

「わぁぁぁっ、うっぷ」

地面に書いた円線を飛び越え、両手をバタつかせた水音が頭から草むらに突っこんでいく。計十四度目の大転倒。「そろそろ学習してもらいたいものだな」と夕夜は汗一つかかずに腰に手を当て、マワシ姿のお尻を突き出したままもがく水音に辛辣な溜息を送った。

ここは、雪花の住む山の中。清らかな雪解け水が流れる川のほとりで、水音の特訓は続いていた。とは言え、水音は全然学習せずに同じ過ちを繰り返し続けるので、状況はまったく変わっていないのだが。

「だから言ってるだろ。腰を落とすだけじゃなくて、重心そのものを落とすんだよ。ただでさえ水音は重心が高い上に前側にあるんだ。そのまま突っ込んで相手が身を引いたら、どうなるかもう分かるよな？」

「はい。十分に身体で体験しています」

頭を振って髪に付いた草を落としながら、水音が「よいしょっと」と言って草むらから這い出てくる。「もう一回、お願いします」とすぐに枠に入って四股を踏む意気込みは素晴らしいが、夕夜はその申し出を丁寧に断った。

「ん～、口で言うより体験した方が早いと思ったんだが。さて、どうするか」

口元に手を当てる夕夜に、「すみません、お馬鹿で」と水音がにへ～っと笑いながら首を傾ける。なんとも力の抜ける笑みに柔らかな苦笑を漏らした夕夜は、「ちょっと休憩だ」と言って、近くで特訓を見守っていた瑠鬼と雪花の隣に腰を落とした。

「じゃあ、私は鉄砲の練習をしてますね」

あれだけ転がされたにもかかわらずケロッとした表情を浮かべる水音が、近くに立っている一際幹の太い木に向かって鉄砲――突っ

張りの稽古にはいる。ズパーンズパーンと、素手で木を叩いているとは思えない音が辺り一帯に木霊した。
「筋はいいんだけどな」
「やっぱり難しい？」
水音の動きを観察する夕夜の顔色を、雪花が心配そうに覗きこんでくる。夕夜は小さく笑みを零すと、安心させるように雪花の頭にポンと手を置いた。
「時間はあるし、何とかしてやるよ。それに、俺っちもちょっと安心したからな」
「安心？　何に？」
「雪花にも、ちゃんと友達がいたんだな」
夕夜の言葉に顔を赤くした雪花は、その動揺を隠すように夕夜の手を頭からどけると、自分の手を首の後ろで組んで明後日の方向を向いた。
「友達っていっても、知り合ったのは最近なんだけどね」
「ん？　そうなのか？」
意外だと思った夕夜だったが、考えてみれば雪花は「寂しい」という理由で夕夜のもとを訪れたのだ。もし前々から水音が傍にいたのなら、そんなことは言わなかっただろう。
「うん。少し前に、旅館で噂になったの。夜な夜な凄い音が森から聴こえるとか。マワシとサラシを撒いた河童が出るとか。それで、森の様子を見に来たら」
「友達になったってわけか」
「そ、そうよ。悪いっ？」
「誰が悪いなんて言ったよ」
口に空気を溜め、雪花がぷくーっと頬を膨らませる。雪花、瑠鬼、水音の中で一番年上だが、精神年齢は一番低いかもしれない。いや、これはただ単に性格だろうか。とりあえず、夕夜は大きく手を開けて雪花の柔らかな頬を押しつぶした。「ぷー」と雪花の口から空気が漏れる。

夕夜と雪花が微笑ましく戯れていると、不意に森の中でメキメキと木が悲鳴をあげる音と共に、ドスンという重々しい音が響いた。小鳥と遊んでいた瑠鬼と夕夜に噛みついていた雪花が小さく飛び跳ね。はらはらと舞う木の葉。その奥で、「あら～」と口に手を当てる水音。

静寂が森に戻ってくる。川のせせらぎ、鳥のさえずり、虫の声。静かに朽木と化した木を見詰めていた水音は、「よし」と言って朽木に向けて合掌すると、別の木に鉄砲を打ち始めた。再び、森の中にバシーンバシーンと手のひらが木を叩く音が木霊する。

「なあ、何で水音は相撲が強くなりたいんだ？」

ひたむきに稽古を続ける水音に、夕夜は野暮と思いながらも訊ねる。

「大会が、あるん、ですよ」

「大会？」

「は、い。第３４１回女河童大相撲大会です。一週間後に」

大木に力強い突っ張りを打ち込みながら水音が答える。

「ふーん。賞品でも出るのか？　キュウリ一年分とか」

「あ、それも嬉しいですね。でも、違うんですよ」

水音が木を打つ手を止め、削れた幹にコツンと頭をくっつける。恥ずかしそうに顔を綻ばせると、指先で「の」の字を幹に描きながら、耳をくすぐるようなこそばゆい声で答えた。

「大会で優勝すると。自分の好きな男の子に結婚を賭けて挑戦できるんです」

夢見る乙女になって、頬を赤らめる水音。何ともほほえましい光景に、夕夜が優しげに眼を細める。しかし同時に、ふと疑問が頭を過った。

「いちいち大会で優勝しなくても、普通に告っちまえばいいんじゃないのか？」

「な、ななな。何言ってるんですかっ？」

夕夜の何気ない言葉に、水音が眼に見えて動揺した。

「わ、私なんか全然魅力が無くて。る、るる、流威(るい)君なんかとつり合わないですよ。いや、視界にも入らないかも。流威君は強いし、かっこいいし、優しいし。みんなの人気者なんです。……どんくさい私なんかと違って」
胸に手を抱く水音の声に寂しさが混じる。けれど、水音はすぐにその寂しさを払拭すると、まっすぐな眼で夕夜を見据えながら、ここだけはまったく気後れすることなく言った。
「だから、私は頑張るんです。その、認めてもらうじゃないですけど、流威君に私のこと見てほしいから」
もじもじと手をすり合わせる水音が、やはり最後は自信を失くしたように「こんな私ですが」と小さく零す。
そんな水音に、夕夜は腰を払って立ち上がると「いいんじゃねぇか、そういうの」と、どこかやる気のある笑みを浮かべて言った。
「いいん、ですかね……」
「少なくとも、俺は嫌いじゃないな」
「ふぇ？」
夕夜の何気ない言葉に、顔を上げた水音がきょとんとした表情を浮かべる。「え、え、え？」と、顔を赤らめながら一人動揺する水音。
そんな水音に笑みを零しながら、夕夜が軽くストレッチをして身体を解す。
「さあ、続きをやるか」
と、夕夜が土俵の中に入った、その時だった。
「アハハハハ。ねぇ、今の聞いたぁー？」
「マッジ。超ウケるんだけど」
どこからともなく、なんとも意地悪気な笑い声が聞こえてきた。
耳障りな声に、夕夜が眉を顰めながら声の主を探る。すると、突然川の水が膨れ上がり、噴水のように逆巻く水柱の中から三匹の女河童が姿を現せた。三匹とも年は水音と同じくらいだろうか。三匹のうち二匹はギャルといった感じの少女で、残り一匹はどこか澄まし

た威圧感のある少女だった。
ギャル河童は汗を流して鉄砲の練習をしていた水音に目を向けると、大きな声で嘲った。
「こんなノロマのカメみたいな奴が流威様に挑戦〜？　冗談言うのも大概にしてよ。汗臭いアンタなんかが流威様につり合うわけないでしょー」
「そうそ〜う。つーか、何その胸？　スイカでも吊ってんの？　笑っちゃーう。よくそんな恥ずかしい身体でうろちょろ出来るわね。神経疑うわ」
髪を茶髪に染めた女河童と、耳にピアスを幾つも下げた女河童が口々に水音を攻撃する。もう一人の目つきの鋭い女河童は、言葉で水音を攻撃するようなことはなかったが、迫力のある鋭い視線を水音に叩きつけていた。
ギャル河童たちの嘲りを受けた水音は反論するわけもなく、ぎゅっと口元を引き結ぶ。その様子を見る限り、このいじめの構図は昨日今日できた関係ではないようだ。
夕夜は口を出すこと無く、じっと両者の様子を見つめる。バカな言葉を吐き続けるギャル河童二匹と、心の痛みを堪えるように胸の前で手を組む水音。
そのとき、ピキンッという空気が悲鳴を上げる耳の痛い音が辺りに木霊した。周囲一帯を包み込む冷気。「え、なになに？」と驚くギャル河童たちの足元の水が、突如として凍りつき始めた。慌てて川から飛び出す彼女たち。そこへ、絶対零度の殺気が突きつけられる。
「雪花の友達を、バカにするな」
静かに、冷徹に、底知れぬ怒気を纏う雪花。雪女の妖力は妖怪の中でもかなり高位だ。子供とはいえ侮ることは出来ない。さらに雪花の隣では、瑠鬼が深い怒りに満ちた鬼の形相を浮かべていた。こちらも最高位の妖力を持つ種族だ。しかも、たちの悪いことに二人はまだまだ子供。つまり、力の加減を知らない。

河童たちも水神と称えられる高い妖力を備えているが、個体数の比較的多い河童の中で大きな力を持つものはごく一部に限られる。少なくとも、先ほど水音に汚い言葉を浴びせていた二匹が高位な河童とは思えない。

「雪花ちゃん。瑠鬼ちゃん」

慌てて水音が二人に声を掛ける。しかし、怒りに飲み込まれている二人にはその声も届かない。ガタガタと震えるギャル河童。悪いことにケンカを売るタイミングを間違えたようだ。

幼い二人が小さく一歩踏み出すと、二匹のギャル河童から「ひぃっ！」と悲鳴が漏れる。

「こーら。何やってんだ二人とも」

張り詰めた緊張の糸を切ったのは、おどけた夕夜の気の抜けた声だった。怒りに飲み込まれていた瑠鬼と雪花の後ろから、夕夜が両手でその小さな身体を抱きあげる。

「あ、ちょっと。夕夜、離してよっ！」

「水音、いじめた」

「だからって、お前らがこんなやつらをいじめる必要なんてないだろう」

腕の中で「納得がいかない」と暴れる二人を、夕夜が優しくたしなめる。妖怪の世界とはいえ軽々しく暴力を振るわせるわけにはいかない。しばらく二人は駄々をこねていたが、夕夜の頼みとなれば最後はちゃんと折れてくれた。

「さてと」

二人を落ち着かせた夕夜は、次にギャル河童たちに目を向ける。先ほどの二匹はまだ怯えた表情を見せていたが、夕夜が人間と分かるや否や、精いっぱいの虚勢を張って見せた。

「はんっ。なんだよ、お前。どーせ、お前なんか。あのデカ乳が目当てなんだろ」

「人間がアタシたちの喧嘩にしゃしゃり出てくんじゃねーぞ」

突然威勢を取り戻した二匹に、再び瑠鬼と雪花の顔に怒気が籠る。

二人の怒りに危険を察知して身を竦ませるギャル河童。「だから、いちいち喧嘩買うなってーの」と二人をあやしながら、夕夜は格の違いを見せつけるように余裕を持った態度で口を開いた。
「胸に関してはどうでもいい。そんなもんだけ見て……というか、相手の外見なんて俺っちには関係ないからな。それと人間とか言うのも関係ない。そんなもん、大した問題でもないだろ。――ただ」
それまでおどけ気味だった口調が、突然変わる。
「ひたむきに努力して頑張る奴を嗤うのだけは許せねぇな」
夕夜の眼が細まる。その言霊に乗せられた怒気は、先ほどの瑠鬼と雪花の子供の駄々とは比べ物にならないほどの純度を誇っていた。幾千の針のような殺気に近い怒気。余波を受けた森が、計り知れない恐怖に慄きざわめく。夕夜の怒気を叩きつけられた二匹のギャル河童は息をすることすらできず、二人の後ろで瑠鬼と雪花の怒気には動じなかったもう一匹の女河童も、耐えきれずに冷や汗を流していた。
夕夜の放った怒気は3秒と無かったが、その迫力は伝説級の大妖怪と比べても遜色のないものだ。怒気を受けていたギャル河童たちは、解放されてもなお指一本動かせない。
そんな彼女たちの緊張をほぐすように、夕夜は再び声を和らげると、ふと思い出したように口を開いた。
「ところで、お前たちも相撲大会に出るのか？」
「あ、ああ。悪いかよ」
「いんや、面白い。じゃあ、今この場で宣言してやるよ。他の河童たちにも伝えておけ。今度の相撲大会、その優勝者は水音だ」
大胆に宣言する夕夜に、真っ先に声を上げたのは他でもない水音だった。
「え、ええ、ええええーっ。夕夜さん？」
「何驚いてんだよ。優勝狙ってるって言ったのはお前だろ？」
「そ、そうですけど。で、でも。大会は強い河童たちもたくさんでるし。その子たちも、特に葵（あおい）ちゃんは優勝候補なんですよ」

水音が一人だけ暴言を吐かなかった女河童を指して夕夜に訴える。しかし、夕夜の自信は揺るがなかった。
「大丈夫だ、まあ大船に乗った気でいろよ」
なんなく言ってのける夕夜に、「はぁ」と水音は思わず頷く。どうしてかは分からないが、夕夜の笑みには力があった。本当に優勝できてしまうかもと、思わず夢描いてしまう、そんな力が。
対して、夕夜の水音勝利宣言を受けたギャル河童は、それまでのビビりぶりが嘘のように笑いだした。
「あはははは、ウソでしょ。水音が優勝とか」
「ありえない。私たちが川に流されるくらいありえない。あんなバランスの悪い身体で、まともに戦えるわけないじゃん」
お腹を抱えて大笑いする二匹に、瑠鬼と雪花が三度表情を厳しくする、しかし、そんな二人に夕夜は「放っとけ。その元気は、水音の応援に溜めとくんだよ」と二人の怒りを収めさせた。
一方、こちらは収まらないとばかりに笑いながら、帰っていくギャル河童たち。その身体が川に沈んでいく中、一番後ろにいた葵という女河童に水音はためらいがちに声を掛ける。
「あ、葵ちゃん」
「なに？」
透き通った声で、葵が水音の方を振り返る。
水音は精いっぱいに微笑むと、澄ました表情の葵に小さく手を振った。
「大会。その、頑張ろうね」
「はぁ、敵に塩を送るなんて……水音は相変わらずね」
どこか他人を寄せ付けない雰囲気を纏っていた葵が、不意にその気配を和らげ、優しげに微笑む。それだけで、この二人の関係が分かる気がした。
「あの子たちがバカを言ったことは謝るわ。ごめんなさい」
「そ、そんな。別に、気にしてないから」
謝罪を述べる葵に、水音が慌てて顔の前で手を振る。

「悪い子たちじゃないのよ。ただ、ちょっと不器用なのよね」
「うん。大丈夫。知ってるよ。だって。葵ちゃんの友達だもん」
「そう、ありがとう」
零すように漏らした彼女は、そのまま真っ直ぐに水音の方を見て言った。
「大会は、悪いけど手加減抜きに行くわよ。私も、流威のことを狙ってる一人だもの」
「う、うん」
「よかった。じゃあ、楽しみにしてるわ」
最後は好戦的な笑みを残し、川の中へと沈んでいく葵。
辺りが再び平穏に包まれると、水音は気が抜けたようにその場にへたりこんだ。
「ふわ〜。疲れた〜」
「そんなんで疲れててどうすんだよ。これから特訓だぞ」
「あ、はい。そうですね。でも、夕夜さん。本当に私なんかが優勝できるんでしょうか」
「わからん」
水音の質問に、夕夜はきっぱりと答えた。その、いっそのこと清々しい返答ぶりに、言葉の意味を掴めたなった水音がキョトンとする。
「わからん、て」
「勝負事に絶対なんて無いからな。そんなもんがあるなら、初めから大会や試合なんて腕試しはこの世に存在しないだろ」
もっともなことを言う夕夜に、「それはそうですが」と水音の言葉から元気が抜けていく。
けれど、そんな水音の心配をよそに、夕夜の自信は揺るぎなかった。
「まあ、安心しろよ。こと相撲に関しては、ちょっと自信があるからな」
にやりと笑う夕夜。

それからすぐに、夕夜の指導の下で水音の本格的な指導が始まった。

河童の春（3）

河童、河童、河童。右を見ても左を見ても、前を見ても後ろを見ても、ついでに木の上を見ても、どこもかしこも河童ばかり。

水音の特訓を始めて早一週間。とうとう当日となった相撲大会の会場は、青々しい若葉と数知れない河童とが相まって、辺り一面緑色に染まっていた。

「よくもこれだけ隠れていたな」

差し出されたキュウリをぽりぽりと齧りながら、夕夜が感心するように零す。当初は人間に鬼の子、さらには雪女という異色の組み合わせに入場を断られた夕夜たちだったが、大会関係者の河童の中に以前夕夜が相談を受けた者がおり、特別に入場を許可してもらった。しかも、特別に来賓用の客席まで用意してもらい、至れり尽くせりの待遇で大会が始まるのを待っている。

「ババハハハ、夕夜。前々から来ると連絡してくれれば、もっと良い席を作ったんだがな」

額から右頬にかけて鋭い爪痕を負った壮年の河童が、豪快に笑いながら夕夜の肩を組む。名は水衛門（みずえもん）といい、大工を生業といている河童だ。以前夕夜が川の流れを調整する水門の建設を手伝った時に気に入られ、今でも親交が深い。

「いや、十分だよ。恩に着る」

「ババハハハ、水クセぇこと言うなよ。俺とお前の仲じゃねぇか。んでぇ、その夕夜様が入れ込んでいる娘っ子っていうのはどいつだ？」

どうにもオヤジ臭い笑みを浮かべながら、手で庇を作って水衛門が参加者の集まっている方を向く。

夕夜は端の方で緊張して硬くなっている水音を指差して答えた。

「アイツだよ。水音っていうんだが」

「水音！？　あの優勝宣言した奴かっ！」

名前を聞いた水衛門が「こりゃいい。色ものの大穴だと思ってたが、夕夜がし込んだって言うなら賭ける価値はあるな」と、懐の銭袋を取り出して優勝者を賭けている胴もとのところへ走っていく。正確に言えば優勝宣言をしたのは夕夜なのだが、あえて指摘することでもないだろう。

程なくして開会式が始まり、ぜんまいのからくり人形のような動きをする大会委員長の老河童が壇上へ上がる。長々しい話しが始まり、待ちきれなくなった瑠鬼と雪花は居眠り。相撲大会のきっかけとなった数百年前の大河童が９９９匹の河童相手に三日三晩耐久相撲をしたところで、係りの者が老河童を強制連行。

そしてようやく、女河童大相撲の幕が明けた。大会はトーナメント制。参加者は全部で６４匹、六回戦の長丁場だ。一回戦と二回戦は予備の土俵で行われ、ベスト８から立派に土が盛られ俵が付いた土俵が使われる。

ようやく目覚ました雪花が「水音―っ、ガンバレーっ！」と元気よく手を振り、瑠鬼がその横で「がんばれーっ！」と同じく声援を送る。声に気付いた水音は精力溢れる笑みを作ると、元気いっぱいに手を振った。どうやら、緊張すでに解けたようだ。

突然、女河童たちから黄色い歓声が上がった。彼女たちの視線が観客席に今しがた現れた一匹の男河童に注がれる。「アレが流威か」と、夕夜はすぐに察知した。なるほど、確かに女河童たちが入れ込むだけあって顔はかなりいい。どちらかというと、イケメンというよりはおとなしそうで優しい感じの優男だが、立ち振る舞いから夕夜はすぐに流威の力量を見抜いた。

「ん～、水音じゃちょっと厳しいかな」

「夕夜っ！」

率直な感想を漏らす夕夜に、雪花が声を荒げる。「そう怒鳴るな」とたしなめた夕夜は、ひょいっと雪花の身体を持ち上げると自分の膝の上に置いた。途端、雪花が水を掛けられた子猫のように大人しくなる。そんな雪花を見て、瑠鬼は無言のまま両手を差し出しおね

だり。「はいはい」と夕夜は片手で瑠鬼を持ち上げると、雪花の身体を少しずらし、両太股に一人ずつ座らせた。
「まあ、見てろよ。勝負は水もの。始まるまで分からないからな」
意味ありげな笑みを浮かべながら、夕夜が再び水音の方へ眼を向ける。すると、この前ちょっかいを出してきたあのギャル河童たちが、再び水音に絡んでいるのが見えた。あの葵という河童も一緒だ。耳を澄ましてみると「あんた、本当に出てきたの？」「せいぜい乳の重みに負けないことね」と質の低い挑発をしているのが聞こえてくる。水音は今日も反論しない。ただ、その瞳だけはあの時と違った。
今の水音の眼は、夕夜のような自信に満ちていた。
散々バカにしても答えない水音に、「はん、面白くないの」と痺れを切らしたギャル河童たちが踵を返す。水音と二、三言葉を交わし、それに続く葵。去っていく彼女たちを見送ると、水音が夕夜にVサイン付きの笑顔を向けた。
軽く頷いて水音に応える夕夜が、ふと目の端に移った葵の方へ眼を向ける。他の二匹のギャル河童たちと共に流威へ情熱的な視線を送る葵。なるほど、優勝への最大の敵はここだな、と夕夜は冷静に予想しながら始まりの合図を待った。
「では、第一回戦一試合。初めっ！」
主審の行司が軍配団扇を落とし、一斉に試合が開始する。刹那のうちに、幾つかの土俵で歓声が上がった。相撲は立ち合いで八割決ると言われるように、勝負は始まった一瞬。残った土俵もすぐに勝敗が決り、次の組み合わせが準備される。一試合目は一斉に始まったが、二試合目からは各土俵で順次試合が行われていった。水音の出番もすぐにくる。
いよいよ始まる水音の取組。その対戦相手を見て、雪花が「ずるいっ！」と叫んだ。
水音の対戦相手は、掛け値なしに体格が水音の倍はある大河童だった。身体もようやく土俵に収まっているといった感じで、ちょっ

とやそっとじゃ動きそうも無い。
「あんなの反則じゃん」
「心配無い。黙って見てろ」
腕をばたばたとさせる雪花を、夕夜がその頭を押さえて黙らせる。水音を見守る夕夜の顔には、余裕の笑みしか刻まれていなかった。
「ハハハハハ。優しく相手してやるから安心しな」
豪快に笑う大河童に、「よろしくおねがいします」と水音が礼儀正しく頭を下げる。あまりの大きさに、急遽土俵の外枠を拡大した特設土俵が、水音の初舞台となった。
「見合って見合って、はっけよい……」
副行司の掛け声に合わせ、水音が腰を落とす。その胸は、きつくサラシで押さえられていた。若干苦しくはなるが、その方が重心が定まると夕夜が水音にし込んだのだ。
両方の徐々に士気が高まる。そして両者の合意の下、浮いていた手が同時に地を叩いた。
立会いの瞬間、水音は相手の懐に潜り込んだ。自身の重心を掌握したからこそできる、圧倒的な初動の差。無防備な懐へ水音が渾身の力でぶち当たる。
しかし、いかんともし難い体重差に、大河童は余裕を持って水音の初撃を耐え切った。
「残念だったね」
笑みを浮かべながら、大河童が水音のまわしを取ろうと手を伸ばす。
心配そうに夕夜の袖を握る雪花と瑠鬼。
「勝負中に喋ったり笑ったりするのは無粋だな」
そんな二人とは対照的に、夕夜は余裕の表情を崩さなかった。
「ん、あ、あれ？」
水音のまわしを取りに行った大河童が、いくら手を伸ばしても届かないまわしに焦りだす。それも当然だろう。水音は重心ごとしっかりと腰を落として相手のまわしを取っているのだ。油断して腰を

高くしている相手が、水音のまわしを取れるはずがない。
真剣に取り組む水音と、相手を見て油断した大河童。
その差はすぐに歴然とした結果として現れた。
「フンッ！」
水音が丹田に力を込め、自分の重心を操作しながら大河童の重心を読む。自分はさらに前へ出ながら相手の重心を崩し、一気に敵の巨体を転がした。ドスンという重々しい音が辺りに響き、観客が騒然とする。
一瞬遅れて湧き起こる歓声の嵐。しっかりと礼をきめて土俵を出た水音が恥ずかしそうに頭を下げる。
「んな。言った通りだろ」
得意げに笑う夕夜に、雪花が「な、何を水音に教えたの？」とせがりついた。
「別に、大したことは教えてないぞ。水音の場合、基礎稽古をしっかりとしていたおかげで足腰はかなりいい物を持ってたからな。鉄砲打ち、お前たちも見ていただろ」
水音の鉄砲がいい音を立てていたのは、腕だけではなく体全体で打ち込んでいたからだ。気になって夕夜は他の基礎稽古を見せてもらったが、摺り足や股割など、相撲を取るための土台を作る稽古を、水音はそれは丁寧にやっていた。基礎練習で培ったものは、同時に相撲において最大の武器になる。これは、相撲だけに限らず、他の武道、引いては全ての習い事に通じる概念だ。
「だから、後は重心の使い方を教えてやればいいだけだったんだよ。相撲を初め、武道の全ては重心の使い方にある。水音に自分の重心を操作する方法と、相手の重心を読む方法は、この数日でみっちり教え込んだ」
「でも……。じゃあ、何で水音は今まで勝てなかったの？　基礎はしっかりしていたんでしょ」
「あ、ああ……。それはな……」
雪花の質問に、夕夜はどこか曖昧な笑みを浮かべながら、対戦相

手と握手を交わす水音、正確にはたぷたぷとゆれる胸を指差した。
「あの胸がどうにも重心を掴むのに邪魔だったんだよ」
他の河童たちは水音が弱いとこぞって言っていたが、その原因は確かに水音の胸にあった。大きくてたわわに育った胸は、大きく揺れて重心の妨げになる。
「だから、それさえサラシで押さえちまえば」
そう、それさえサラシで押さえこんでしまえば、あとは重心をどこまで極められるかだ。
初めは、ただ立って自分の重心を感じるとこから始まった。大まかに自分の重心を感じ取れるようになったら、次はあらゆる角度から立っている水音を押す修行だ。重心が定まっていれば、どの方向から押されても身体がブレることは無い。これができるまでには四日も費やしてしまったが。大会まであと三日は、実際に夕夜が水音と組んで、相手の重心を知る修行だ。ここからは意外に早い。水音の勘がよく夕夜の教え方が上手かったということもあるが、自分の重心が分かれば自然と相手の重心を感じられるものだ。
「でも、それだけであんな大きな相手を投げれるの？」
「大きいとか、力が強いとかは関係ないぞ。言っただろう、相撲は武道だ。武道はもともと弱者が強者に勝つために生み出した技術の集大成のことを言う。て、まあ俺っちも受け売りだけどな」
「受け売り？」
「あ、ああ。……昔、みょうちくりんなおっさんに、みっちり教え込まれたんだよ」
口が滑ったとばかりに、それまでご機嫌だった勇夜が唐突に顔を顰める。「ああ、嫌なこと思い出した」と頭を掻いた夕夜は、「さあ、そんなことより。試合だ、試合」と強引に話しを切り上げた。
二回戦も危なげなく勝利した水音の三回戦の取組相手は、あのギャル河童の一人だった。
「へ～、少しはやるじゃん」
茶髪に髪を染めたギャル河童は、少しは水音を認めたのか口調の

割に油断は無い。
夕夜はちらりと一回戦、二回戦とギャル河童の動きを見ていたが、確かに優勝候補と言われるだけあって素人のものではなかった。河童の世界では見た目や言動と勝負強さは関係ないらしい。
「はい。よろしくおねがいしますね」
いままで散々苛めていた相手に明るく挨拶され、ギャル河童は調子を崩したように微妙な表情を作る。「ま、まあ。勝ちは決ってるけどね。そんな重いもんぶら下げた奴になんか、負ける気しないし」と最後に憎まれ口を叩きながら、両者は真剣な面持ちで塩をまいた。
立派に盛られた土俵が塩で清められ、いよいよ取組が始まる。すでに一・二回戦で負けた者も含め、大観衆の視線は二人の女河童に注がれていた。
主審の行司が対戦者の名を呼び上げる。両者は綺麗な四股を見せ、仕切りに入ると、会場の空気がピンと張りつめた。
「見合って見合って、はっけよい……」
行司の掛け声だけが響き、張り詰めた空間で両者の士気が高まる。
ふたつの拳が、同時に地を叩いた。
立合いは水音が上。だが、絶妙な身体の入りで水音の初撃を受け止めた茶髪のギャル河童は、すぐさま反撃の突っ張りを打ち出した。体重の乗った上手い一撃。初撃で受けた反動で、水音の体勢がやや悪い。水音の肩を捉える相手の掌。
誰もが水音の敗北を予期した、その瞬間。
夕夜だけが確信に満ちた笑みを零していた。
「なっ！」
驚きの声を上げるギャル河童の掌が、水音の肩を滑る。まるで暖簾に突き手をかましたかのような手応えの無さに、ギャル河童の重心が前方へ流れる。一方、自分の重心を再び掌握した水音は、浮足立った相手に足払いを決め、さらに浮いた相手の肩を押し、見事に相手を崩して見せた。
一瞬の攻防。予期したものとはまるで逆の結果に、会場の熱が一

気に噴き上がる。
　そんな中、開会式で長々と演説をしていた老河童が、眼を見開いて叫んだ。
「あ、あれは！　『脱法・河童崩し』？」
　勝負を決めた技の名に、観衆が老河童の方を向く。老河童は鷹揚に頷くと、血管が切れれんばかりに目を見開きながら、髭で覆われた口を開いた。
「完全な脱力により、相手の力を受け流す妙技。その昔、天下無双を謳った我らが大河童様が唯一破れ、河童の技術向上を願いこの大会を作ったきっかけの技じゃ」
　老河童の言葉に、会場一帯がどよめき立つ。
「完全な脱力。言うは易いが、勝負の最中に力を抜くなど、そうそうできることではない。娘よ。お主、どこでその技を？」
「え、え～っと。教えてもらったんですよ。ねぇ、夕夜さん」
　興奮する老河童に話しを振られた水音が、助けるように夕夜に目を向ける。すると、老河童に向いていた視線が、今度は一斉に夕夜の方を向いた。
「そう言えば、夕夜。前に大河童と勝負して勝ったって言ってたっけ」
　雪花が、正確には雪花の操る梨雪が夕夜と山へ来た時に電車でしていた話しを思い出す。
「まさか、こんな大きな大会になってるとは知らなかったけどな」
　全観客の視線を集めながら、「いや～、参った参った」とおどけるように笑う夕夜。
　だが、老河童を初め、大会の実行委員となっていた河童たちはそれどころではなかった。その昔、天下にその名を轟かせた大河童を倒した男の弟子とも言うべき娘が大会に出ているのだ。それは慌てもするだろう。
「おい、そんなの卑怯だろ。反則だ、反則」
　どこからともなくそんな声が上がった。反感の声は徐々に大きく

なる。言ってみれば、水音は大敵の弟子なのだ。
「そんな奴、失格にさせろっ！　大河童様のバチが当たる」
「そうだー、そうだー」
会場に広がる反感の波紋。その波は徐々に大きくなる。土俵の脇に居る水音は、さっきまで自分を応援していた観客が敵になることに、大きな戸惑いを覚えていた。せっかく認められたのに、また突き放される。悲しみに濡れた瞳から、一滴の涙が零れた……その時だった。
「五月蠅い。黙りな、あんた達っ！」
「黙りやがれ、テメェらっ！」
ふたつの大きな怒りの声が、会場の反感の声を吹き飛ばした。ひとつは一回戦で水音に破れた大河童、もうひとつは今水音に破れた茶髪のギャル河童の声だ。
二匹の河童の慟哭に、会場の空気が静まり返る。二匹は会場の河童たちを一瞥すると、それぞれ口を開いた。
「あんた達、それでも誇り高い河童の一族かい？　寄ってたかって女一人を苛めて、情けないったらありゃしない」
「この節穴ども。テメェらはがん首揃えて何見てたんだ。コイツが何か卑怯な手を使ったか？　正々堂々勝負しただろうが」
二匹の河童の啖呵に、水音に罵声を浴びせていた者たちが下を向く。
水を打ったように静まり返る会場。誰も口を開けられない。罵声を浴びせていた者はもとより、騒ぎの中心にいた水音はどうすればよいか分からず、おろおろと辺りを見回すしか出来ない。
そんな中、夕夜はおもむろに手を上げて老河童に呼びかけた。
「なあ、ちょっといいか。大会委員長さん」
「……なんじゃ？」
「この大会は、あの大河童の大将、平八（へいはち）が、俺っちを倒すため。子孫たちの技術を向上させるために始めたんだよな」
「そうじゃ」

「だったら……」
一度言葉を切った夕夜が、その顔に壮絶で好戦的で、そしてどこか子供じみた無邪気な笑みを浮かべて言った。
「俺っちの技を引き継いだ水音を倒してこそ、大会の本懐なんじゃないのか？」
あまりにも大胆な言い回しに、会場全体が息を飲む。
会場の視線を一手に引き受けた老河童は、老成した瞳を水音へと向け、重々しく口を開いた。
「水音よ。お主は河童か？　それもと、あの人間の弟子か？」
虚言を許さない重みのある言葉に、会場全体が再び息を飲む。
しかし、当の水音は、まるで迷うことも無く当り前のような口調で答えた。
「そんなの決ってるじゃないですか。私は河童で、夕夜さんの弟子です。河童であることを誇りに思いますし、夕夜さんの弟子であることも私の誇りです」
胸を張って答える水音に、会場が三度目の息を飲む。
「そうか。それがお主の答えか」
水音の答えを受けた老河童はその年が嘘のように腰を伸ばして立ち上がると、森全体に聞こえるほどの大きな声で宣言した。
「水音の試合続行を認める！　皆の者よ、河童の誇りに賭けあの人間の技を破り、大河童様の悲願を成し遂げよ。そして、水音よ。お主も河童の誇りに賭けて、己が取得した技を存分に振るい、人間の技をも自分の技と昇華した力の進化を見せつけるのじゃ。よいなっ！」
老河童の名口上に、会場が元の熱気を取り戻す。
「あ、あの。さっきはありがとうございました。庇ってくれて」
土俵から去ろうとするギャル河童に駆け寄り、水音は深々と頭を下げた。
「別に。こんなの……。ま、まぁ、今まで私も言い過ぎたし……。こ、これでチャラだかんなっ！」

「はいっ！」
顔を真っ赤にしながら早口でしゃべるギャル河童に、水音は満面の笑みで答える。その笑みでさらに顔をリンゴのように赤くしたギャル河童は、そっぽを向きながら零すように言った。
「魅魚（みお）」
「え？　今、なんて？」
「だから、魅魚だつってんだろ。私の名前たよ。それから、もう一人のアイツは柚葉（ゆずは）つーんだよ。覚えとけっ！」
怒るように言い捨てながら、魅魚は水音を残して駆け出した。きょとんとする水音は、名前を教えてもらったんだと理解すると、今まで追い詰められていたのが嘘のように顔を綻ばせた。
水音の試合続行が決まり、大会は残りの三回戦を消化する。ベスト４には、今しがた魅魚が名前を教えたもう一人のギャル河童の柚葉と、葵の名があった。柚葉とは準決勝、それにも勝ち進めば葵とは決勝で相対することになる。
緊張と興奮が高まる中、注目の準決勝が始まった。
「見合って見合って、はっけよい……」
会場の全注目が集まる中、水音と柚葉は同時に地を叩いた。
立合いはほぼ互角。お互いの初撃は決定打にならず、二発目の攻防が始まる。しかし、突っ張れば河童崩しで受け流される。勝負を急ぐことを拒んだ柚葉は、どっしりと腰を落としてから水音のまわしを取ることを狙った。事前の知識さえあれば、秘儀とはいえ恐れることはない。
土俵に登る前から河童崩しの対策を考えていた柚葉の判断は賢明だった。
水音の狙いが、河童崩しにあったなら。
腰を落とそうと重心を下げた柚葉の顔が強張る。水音は脱力するどころか、下げた柚葉の重心に自らの重心を乗せるように前へ出てきていた。予想外の水音の動きに柚葉の対処が遅れる。その遅れは致命的となった。落ち過ぎた重心は到底支えることなどできず、柚

葉の身体はそのまま水音に乗られるように押し倒される。
水音と柚葉。軍配は水音へと上がった。
「お、おふぉい。ふぁっふぁとふぉりろよ……」
「あ、ごめんなさい」
水音の胸に顔を押しつぶされていた柚葉が、苦しそうに息をしながら「なんだよ、今のは？」と問い掛ける。
水音に代わり、その問いには夕夜が答えた。
「『攻法・河童倒し』だよ。進歩するのが、お前たちだけだと思うなよ」
にやりと笑った夕夜は、さらにその仕組みについても続けて答えた。
「『河童倒し』は『河童崩し』と表裏一体の技だ。『河童崩し』を見れば、誰でも攻める手を躊躇して、前に倒れないように腰を落とすだろ。そこに自分の身体ごとぶつかれば、そうそう耐えきるなんて不可能だ」
見事に相手の心理の逆を突いた技に、もはや反感を通り越して感心の溜息が零れる。
「くっそ、負けは負けだよ。認める。あんたは、ただ乳がデカイだけのバカじゃ無かったよ」
「み、認めてくれるだなんて。ありがとうございます」
「……あーんもう。なんでアンタはそんなにノー天気で純朴なんだよ」
皮肉の通じない水音に、柚葉がガシガシと頭を掻く。「ただし、葵はアタシたちと違うからなっ！」と最後に捨て台詞を吐くと、魅魚の時と同じように顔を真っ赤にしながら逃げるように去って行った。
「青春だな。いいね～、若いって」
水音たちのやりとりを見ながら、どこかオヤジ臭くもらす夕夜。
そんなことを言っている間に、こちらも危なげなく葵が準決勝を勝ち上がり、遂に決勝戦の舞台が整った。

向かい合う両者。ふと、水音を見つめる葵が柔らかな表情を漏らす。
「こうしていると、思い出すわ。昔は、よく二人で相撲を取っていたわね」
「うん。結局、葵ちゃんには一回も勝てなかったけど。でも」
葵の柔らかな笑みを受け止めた水音が、自信の籠った笑みを返す。
「今日は、負けない」
水音の言葉に、嬉しそうに顎を引く葵。
土俵に撒かれる清めの塩。高まる熱気。今、全ての準備は整った。
「見合って見合って、はっけよい……」
行司の掛け声に合わせて、互いの士気が存分に高められる。双方とも、一合目の動きはすでに決っていた。これだけの舞台と観客を前に、逃げ手や引き手は一生の恥になる。
一抹の迷いも無く地を叩く拳。二人の少女は互いに申し合わせたかのように、真正面から相手にぶつかっていった。立合いは葵の方が上だ。夕夜が睨んだ通り、数日前に重心を学んだ水音よりも葵の方に一日の長がある。重心の移動が僅かに早い。
「うっ！」
「くぅっ！」
音を立ててぶつかる互いのやわ肌。立合いの立ち上がりで後れを取った水音だったが、ぶつかる瞬間の力の入れ具合で五分の状態へ持って行った。初撃の打ち合い、覚悟の勝負では勝負はつかず、戦いは力と技量に持ち込まれる。
葵は迷い無く組み相撲に持ち込んだ。腕だけでなく、体ごと水音に押し込み回しを取る。河童崩し・倒しが共に突っ張りや取り組む前の返し技ならば、体ごと密着すれば仕掛けられる可能性は低くなる。
と、葵は踏んでいたが。その程度の即席案で破れるほど、夕夜の考えた技は容易くは無かった。
組まれた瞬間に、水音の身体から力が抜ける。組み相撲の状態か

らでも、河童崩しは十分に有効な技だった。押し込もうとした葵は咄嗟に重心を制御し、流れた体を押し留める。そこに圧し掛かる水音の重心。いつの間にか水音は葵のマワシを取り、河童倒しを仕掛けていた。

葵は圧し掛かってくる水音に合わせて重心を前へ押し出すと、大きく足を引いた。重心を預けてくる水音にさらに自分の重心を預け、二人の重心が、互いの重心によって支えられる。

合わせ技が通じず、水音の顔に微かに焦りが生まれる。葵は、その隙を見逃さなかった。

気合いを込め、葵が引いた足に力を込める。重心を体の中央に置き、腰を落としながら水音を押し込む。真っ向からの力押し。もはや、重心を読むという問題ではない。水音の足裏が土俵を滑り、俵へと押し込まれる。

だが、基礎修行において強靭かつ柔軟な足腰を持った水音も、ただでは終わらなかった。水音の足が得俵に付いた途端、後退する体がピタリと止まる。

右手が相手の腕のうちに入る右四つで組み合う両者。互いの肌を密着させ、自分の気合いと相手の隙が合致した一瞬を狙うため呼吸を整える。

一切気の抜けない状況で力を拮抗させていた両者が、次の瞬間再び動き出した。

仕掛けたのは葵だ。狙うは体ごと捻りながらの下手投げ。力の入り始めを気付かせない絶妙な体重移動から繰り出された一撃に、水音の右手が葵の回しから離れ、足が土俵から浮き上がる。

水音は、逆らわずに跳んだ。

予想以上に軽い、いや加速すらした手応えに葵が眼を見開く。自ら前方へ跳ぶことで葵の投げを堪えた水音は体を反回転させ逆に一度離した右手で葵のマワシを掴むと、即座に投げ返しに入った。

自分の投げの勢いが加えられた水音の下手投げに耐えきれず、葵の足が土俵を放す。だが、葵の眼の闘気はまだ消えてはいない。

投げ飛ばされる刹那、葵は死んでも離すかと掴み続けた右手に力を込めると、地面へ向かっていた体を強引に持ち上げた。
「おいおい。『回法・河童回し』を受け切りやがったぞ」
水音に教えた最後の技を見事耐えきった葵に、夕夜が興奮したお面持ちで称賛を漏らす。これで、夕夜が水音に授けた持ち球は全て葵に返された。あとは……
「行けっ。水音っ！」
水音が自分で鍛え上げた技を見せるだけだ。
夕夜の声が聞こえたかは定かではない。だが、水音は確かに感じ取った。
水音の気配が変わったことを感じ取り、葵も最後の勝負を仕掛ける。葵の狙いは、相手の足の内側に足を掛け転ばせる内掛け。これ以上ないタイミングで、葵の足が水音の足に掛かる。
その時、かつて無い衝撃が葵の肩を襲った。
肩を支点にして体が浮き上がる。気が付いた時にはすでに、葵の体は吹き飛び宙を舞っていた。
素手で肌を叩いたとは思えない音を響かせたのは、水音の放ったただの突っ張りだった。ただの突っ張りとはいえ、それは鉄砲の修練の果てに大木を倒すまで至るようになった珠玉の一撃。それこそ血の滲むような地道な特訓が生み出した、真似ようのない一撃だ。この一撃は、たとえ夕夜といえども受けきれない。
宙に体を舞わせた葵は、そのまま土俵の俵を飛び越える。強かに地面に打ち据えられる、今しがた熱戦を繰り広げたとは思えない華奢な体。「葵ちゃんっ！」と水音が声を震わせながら、土俵から駆け出す。
そんな水音よりもいち早く葵に駆け寄る影があった。
「葵っ！」
それは、女河童の誰もが羨望の眼差しを寄せていた、流威という河童だった。
労わるような優しい手つきで、流威が葵の身体を抱き上げる。そ

の所作だけで、会場の誰もが理解した。流威と葵は、すでに恋仲なのだと。
痛みで目を閉じていた葵が、自分の身体を抱きかかえる温かな腕に目を開ける。葵は眼の前に現れた流威に一瞬乙女の表情を見せて顔を赤らめたが、すぐさま凛とした空気を身に纏うと、自ら流威を突き離した。
「離して。私とあなたは……何の関係もないでしょ」
「葵……」
目を合わせず声を吐き出す葵に、流威が拳を握りながら彼女の名を呼ぶ。
そう。葵は破れ、流威への挑戦権は水音が手にしたのだ。そんな水音の前で、自分が流威にすがるわけにはいかない。葵は、どこまでも気高い河童だった。
「葵ちゃん。……やっぱり、葵ちゃんと流威君は付き合ってたんだね」
「水音っ！」
核心に迫る水音に、葵は声を張り上げる。
そんな葵に、水音はどこか清々しく、そしていつものように元気いっぱいに笑って言った。
「うん。知ってたよ。だって、だから葵ちゃん私から離れてくれたんだもんね」
「え……？」
水音の突然の告白に、葵が言葉を詰まらせる。
眼を見開く葵に笑いかけながら、水音はさらに言葉を続けた。
「葵ちゃん。私が流威君のことをかっこいいな～って思ったから、自分に気を使わせたく無くてわざと私から離れたてくれたんでしょ」
「水音……気づいてたの？」
「うん」
「いつから」
「え～っと、初めからかな？」

アハハハハ、と笑って答える水音に、葵は口をパクパクさせながらやっとの思いで言葉を絞り出した。
「なんで、分かったの？」
「だって、葵ちゃん優しいもん」
屈託なく笑って答える水音に、葵の眼から一滴の涙が零れる。胸の中に押し殺していた感情が、水音の言葉で決壊してしまったのだ。冷静な仮面を砕いて流れ出す涙は止まらない。震える身体。その肩に、流威が優しく手を掛ける。
しかし、流威にも河童としての誇りがあった。
「水音君。それでも僕は、君が立合えと言うなら勝負を受ける。そして、もし僕が負けたのなら、潔く葵から別れるよ。それが、僕の覚悟だ」
真っ直ぐに水音を見据えながら、流威が会場の全ての河童に聞こえるように宣言する。
「だけど、僕は絶対に負けない」
闘気を顕わに叫ぶ流威。夕夜の見立てでは、水音にも少なからず勝機はあった。むしろ、勝負は五分五分といったところだろう。夕夜の技に加え、水音は自分の積み重ねてきた鍛錬の結晶をものにしたのだ。
真っ直ぐに自分を見つめてくる流威に水音は恥ずかしそうに身を捩ると、胸の前で両手を交差させ、大きく×を作った。
「だーめ。親友の彼氏は恋愛対象外です」
「水音」
「水音君」
元気いっぱいのいつものままおどけて言う水音に、会場一帯の空気が一気に和らぐ。「だから、流威君も浮気したらだめだよ」と釘を刺す水音に、流威は「しないさ。絶対に。約束する」と堅い誓いを立てる。
拍手と共に祝福される三人。しかし、その拍手が収まると、次は別の問題が勃発した。

「それで、水音。あなたは誰と戦うの？」
まだ足下がおぼつかない葵が、流威の肩を借りながら水音に訊ねる。その言葉に、会場の男河童たちがどよめき立った。童顔だが、水音は掛け値なしに可愛い娘だった。それに、顔に似合わない凶悪な体つきと、憧れすら覚える強さ。
今や水音は河童の森筆頭の嫁候補と化していた。
そんな辺りの空気など露知らず、水音はあっさりと「あ、それはもう決めてあるんです」と宣言。「俺か？」「いや、俺だろ」と若い河童が自分の名を呼ばれるのを胸を高鳴らせて待つ中、水音は大きく手を上げると、自分の対戦相手、勝てば即婿ゲットの相手の名を呼んだ。
「夕夜さーん。お願いしまーす」
水音の選んだ対戦相手に、会場全体がずっこけた。
「み、水音。あんた、正気？」
あっけらかんと言ってしまった水音に、葵が慌てて声を張り上げる。
そんな葵に、水音は「葵ちゃん、なに驚いてるの？」と不思議そうな表情を浮かべて答えた。
「だって、夕夜さん凄く強くてかっこいいんだよ」
「相手は人間よ？」
「ん～、あんまり関係ないかな。夕夜さんも、妖怪とか関係ないって前言ってたし。それに、好きになっちゃったんだからしょうがないじゃん」
まさに天真爛漫、純粋可憐。恋する乙女は何より強い、葵も、もはや呆れるしかなかった。
「コラー、水音―。アンター、なに言ってんのよー」
そんな水音に、夕夜の膝に座っていた雪花は猛抗議。反対の膝に座っていた瑠鬼も、無言のままだが激しく怒った表情を浮かべている。
「アンター、親友の彼氏は恋愛対象外ってー、言ったばっかでしょ

ー」
「夕夜さーん。夕夜さんて、雪花ちゃんや瑠鬼ちゃんと、もう付き合ってるんですかー」
「いや、まったく」
「夕夜っ！」
「ほー、らー、ねー。だから、早い者勝ちだよー」
早く早くと、水音が夕夜に向かって手を振る。一応夕夜は老河童に目を向けると、大会委員長は大きな鼻ちょうちんを作って居眠りを始めていた。「ワシは何も見てない、聞いてない。勝手にしろ」ということらしい。
「しゃーねーなー」
好戦的な笑みを作った笑みが、雪花と瑠鬼を膝から降ろして腰を上げる。必死に「行くな」としがみ付いてくる二人に「まあ、見てろよ」と余裕綽々の笑みで微笑むと、夕夜はデモンストレーション代わりに、かなりの距離がある土俵までひとっ飛びで辿り着いて見せた。
予想外の対戦カードにどよめく会場。だが、生来祭りごとが好きでノリのよい河童一族だ。すでに、賭けの胴元はどちらが勝つかという賭け切符を配っている。水音の優勝により大穴を当てた水衛門は、有り金全部を再び水音の勝ちにつぎ込んでいた。
「さてと、手加減なしで良いんだな」
「はい。もちろん。手加減なんてしたら、ばけて出ますよ」
「んじゃ、ついでにもう一つ聞くかが、本当に俺っちに勝ったら俺っちの嫁になるつもりか？」
「はい、末長くよろしくおねがいします。あ、そうそう。これでも私、料理は得意なんですよ」
「なるほど、これは何が何でも勝たないといけなくなったってわけだ」
修行中に水音が作った料理の数々を思い出し、夕夜が深く頷く。
「ひどいですよ、夕夜さん」と頬を膨らませる水音に、夕夜は「最

後にもうひとつ」と口を開いた。
「一応言っておくが、俺っちが教えた技が俺っちに通用すると思うなよ」
「わかってますよ。それに、私にはコレがあります」
バシッと音を立てて、水音が開いた掌を突きだす。水音は本気で夕夜に勝つつもりでいた。修行中に気付いたことだが、単純な腕力ならば水音の方が圧倒的に上だ。夕夜が手を打つ前に一気に勝負に持ち込めば、水音には十分な勝機がある。
「よし、わかったよ。じゃあ、やるか」
靴と靴下を脱ぎ捨て、夕夜が軽くストレッチを開始する。さらにマワシまでしっかりと巻いた夕夜は、数百年前を懐かしむように目を細めると、しっかり足の裏で土の感触を確かめた。
行司が名を呼び上げ、いよいよ本日の結びの一番の力士が土俵に上がる。力で言えば、言わずもがな水音が、しかし技術力で言えば夕夜が上。会場の注目は、夕夜がどのように水音を捌くかという一点に注がれていた。
「見合って見合って、はっけよい……」
行司の軍配団扇が二人の中央を切る。一切の油断なく睨み合う両者。気負いされまいと、水音が全ての気力を捻りだすように士気を高める。
そして、二人の拳が地を叩いた瞬間。
水音の視界から、夕夜の姿が霞んだ。
腹部に当たる圧迫感。立合いの刹那、懐へ潜り込まれたと勘だけで悟った水音が、当初の考えに無かった『河童崩し』を無意識のうちに展開する。夕夜の動きを眼で追い切れず、すでに間合いのうちに踏み込まれた水音が取ったその行動は、無意識とはいえ最善の方法だった。
ただ、最善を持ってしても、夕夜の初撃を受け止めることは叶わなかった。
完全な脱力をしたにも関わらず、夕夜の掌は一切水音の身体を滑

らなかった。反対に、完全な無防備状態で夕夜の一撃を受けた水音は、なすすべもなく木の葉のように土俵から舞上がる。そのままちょうど雪花と瑠鬼がいる所まで吹き飛ばされた水音は、瑠鬼に身体を受け止めてもらったものの「ふにゃ～」っと目を回してしまった。

あまりにもあっけない結末に、会場全体がポカーンと口を開く。

そのとてつもない空気の中で一人きちんと礼を決め、涼しげに微笑む夕夜。「なにを、したの？」と会場の全ての疑問を代弁した葵に、夕夜は「ん、ああ」と足の裏の土を払いながら答えた。

「『脱法・河童崩し』の極意は、全身の力を抜きつつ重心を丹田のさらに中央に置いて、あたかも球体のように相手の力を受け流すことにある。じゃあ、なんでも受け流しちまう球体を突くにはどうしたらいいか？　答えは簡単だ、受け流せない箇所、重心、つまり丹田を捉えてやればいい」

まるで出来て当たり前のように答える夕夜。口で言うは易いが、寸分違わず相手の重心を捉えるなど、簡単なことではない。それも、相手が自分を見失うほどの速さで動いたのならなおさらだ。

しっかりと靴まで履いて服を着替えた夕夜は、ようやく意識が戻ってきた水音に、あの余裕たっぷりの笑みを湛えて言った。

「俺っちに勝つには、まだ三百年は早かったな」

河童の春（4）

梅雨が明け、初夏の熱気でじんわりとシャツの背に汗をかく頃。一通の便りと大量のキュウリが夕夜の営む相談事務所に届いた。差出人の名前を確認するまでもない。水音だ。

手紙を開くと、そこには幸せそうに和服の婚礼衣装に身を包んだ葵と流威、彼らを取り囲む魅魚と柚葉、そして誰よりも元気いっぱいの笑みを浮かべる水音の写真が同封されていた。

あれから、水音には結婚を前提に付き合ってくれという申し込みが絶えないらしい。水音はそのすべてに断り続けて稽古に励んでいるという。まだまだ、夕夜のことを諦めるつもりはないようだ。

ちなみに、雪花が雇われている旅館は、近くで河童が出るというミステリースポットとなり、今まで以上の繁盛を見せていると書き添えられていた。ついでに、「今度は私が夕夜に挑戦する」という殴り書きも添えて。

挑戦といえば、先日萌狐からも手紙が届いた。七尾に習って神社の仕事を今まで以上に手伝っている傍ら、妖術について本格的に学び、真狐には花嫁修業を付けてもらっているらしい。こちらも、今秋こそは夕夜を落とすという、キスマーク付きの挑戦状が同封してあった。

瑠鬼は相変わらず、夕夜のアパートに住み、相談所や各地へ遠征する時には付いて回っている。愛鬼のもとへはよく遊びに行き、力の制御に付いて学んでいた。お得意様になった魚屋では、毎日のように魚をおまけして貰ってきた。

巡る巡って一年が過ぎ。変わらない暑さが夕夜の身を焼く。そう言えば大昔、悪人相手に泥棒続けていたときに千草にであったのも、こんな季節だった。言いくるめられて、不老長寿の術を会得して幾百年。過ぎてしまえば、本当にあっという間だ。腕を競った者たちの多くは逝ってしまったが、代わりに新しく腕を競い合うものたち

にも出逢えた。存外、悪くない人生である。
ふと、郷愁に耽っていると、カランカラーンと音を立てて相談所の扉が開いた。早々と気配を察知して冷たいお茶を用意していた瑠鬼が、そっと水滴の付いたグラスを差し出す。座らせてから渡した方がよかったが、受け取った相手は緊張を和らげていたので、結果オーライ。
都会の隅っこにある小さな小さな妖怪相談所。
そこの主は、チリンと鈴のピアスを涼しげに鳴らすと、客にソファーを進めながら立ち上がった。

「ようこそ、俺っちの相談所へ。本日は当相談所にどういった御用件でしょうか？」

（了）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2744x/

妖怪さんと俺ちっち

2011年11月20日22時29分発行